

# 死せる魂

または チチコフの遍歴 第一部 第一分冊

MYORTVUIE DUSHI (M E P T B Y E Д У Ш И)

青空文庫



## 第一章

県庁所在地のNNという市の或る旅館の門へ、弾機つきばねのかなり綺麗な小型の半蓋馬車ブリリーチカが乗りこんで来た。それは退職の陸軍中佐か二等大尉、乃至は百人ぐらいの農奴のうどを持つている地主といった、まあ一口に言えば、中流どころの紳士と呼ばれるような独身者ひとりものがよく乗りまわしている型の馬車で。それには紳士がひとり乗っていたが、それは別に好男子でもないかわりに醜男ぶおとこでもなく、肥りふとすぎてもいなければ痩せやすぎてもいず、また年配も、老ふけているとはいえないが、さりとしてあまり若い方でもなかつた。この紳士が乗りこんで来たからとて、市には何の騒ぎも起ころねば、別に変つた出来ごとこも持ちあがらなかつた。ただ僅かに、旅館の向い側にある居酒屋の入口に立っていた露助ろすけの百姓が二人、ぼそぼそと蔭口かげぐちをきいただけで、それも、乗っている紳士のことよりも、馬車の方が問題になつたのである。『おい、どうだい、』と、一人がもう一人の方に向つて言った。『大した車でねえか！ ひよつと、あの車でモスクワまで行くとしたら、行きつけるだか、行きつけねえだか、さあ、お前めえどう思う？』——『行きつけるともさ。』と、相手が答えた。

——『だが、カザンまであ、行かれめえと思うだが？』——『うん、カザンまであ、行かれねえだよ。』と、また相手が答えた。これでその話にも覺けりがついてしまったのである。あ、それからまだ、馬車が旅館の間近までやつて来た時、一人の若い男と擦れ違った。その男は、おそろしく細くて短かい綾織あやおり木綿もめんの白ズボンをはいて、なかなか凝こつた燕尾服を著きていたが、下からは、青銅のピストル型の飾りのついたトウーラ製の留針ピンを挿したシヤツの胸むね当あてが覗のぞいていた。この若い男は振り返つて馬車を一目ひとめながめたが、風で吹つ飛ばされそうになつた無縁帽カルツーズを片手でおさえると、そのまま志す方へすたすたと歩きだした。

馬車が中庭へ入ると、宿屋の下男というか、それともロシアの旅館や料亭で一般に呼ばれているように給ボロウオイ仕しというか、とにかく、おつそろしくてきばきして、あまりせわしなく動きまわるので一体どんな顔かおつき附つきをしているのか、見分けもつかないような男が飛び出して、紳士を出迎えた。その男はひよる長い軀からだに、襟えりが後頭部までも被かぶさりそうな、長い半木綿のフロックコートきを著きていたが、片手にナプキンを掛けたまま素早すばやくく駆け出して、さつと髪を揺りあげるように一いちゆう揖うすするや否や、木造の廊下づたいに、そそくさと紳士を二階の有り合わせの部屋へ案内して行つた。それは至極しごくありふれた部屋であつた。という

のは、第一、旅館そのものが、極くありふれたものであったからだ。つまり県庁の所在地などによくある旅館で、なるほど一昼夜二ルーブリも払えば、旅客は静かな部屋をあてがわれるけれど、部屋の四隅からはまるで杏子のような油虫がぞろぞろと顔を覗け、隣りの部屋へ通じる扉口はいつも箆筒で塞いではあるが、そのお隣りには決まって泊り客があつて、これが又ひどく無口で物静かな癖に並はずれて好奇心が強く、新来の客の一挙一動に興味をもつて聴耳を立てていようといった塩梅である。この旅館のおもてつきが又、いかにもその内部にふさわしく、無闇に間口ばかり広い二階建てで、一階の外壁は漆喰も塗らないで赤黒い煉瓦が剥き出しになつてゐるが、もともと汚ならしい煉瓦が烈しい天候の変化に逢つて一層くろずんでゐる。二階の方は、相も変らぬ黄色のペンキで塗つてあり、階下には、馬の頸圈だの、細引だの、環麵麩だのを売つてゐる店が並んでゐる。その並びの一番はずれの、店というよりは一つの窓に、赤銅のサモワールと並んで、そのサモワールそつくりの赤銅いろの顔をした蜜湯屋が控えておるが、その顔に漆黒の顎鬚さえ生えていなければ、遠目にはつきりサモワールが二つ窓に並んでゐるとしか見えない。

新来の客が、あてがわれた部屋を檢分してゐる間に、身のまわりの荷物が運びこまれた。真先に来たのは白い革の旅行鞆で、それがあちこち擦り剥けてゐるところは、旅に出た

のは今度が初めてではないぞといわんばかりだ。旅行鞆トランクを運びこんで来たのは、馭者のセリファンと従僕のペトウルーシカとで、セリファンの方は毛皮外套がいとうを着た背丈の短い男だが、ペトウルーシカの方は、まだ三十そこそこの若者で、どうやら旦那のおさがりらしく、いいかげん著古きふるされた、だぶだぶのフロックを着こんだ、おそろしく鼻と唇の大きい、見たところ少し険けんのある男だ。旅行鞆トランクについて、木目白樺もくめで象嵌ぞうがんをほどこしたマホガニイの手箱だの、長靴の型木だの、青い紙に包んだ鶏けいの丸焼まるやきだのが持ちこまれた。こうした物をすつかり運びこんでしまうと、馭者のセリファンは厩舎きゅうしゃの方へ馬の始末をしに行き、従僕のペトウルーシカは、まるで犬小舎いぬこやのような、いやに薄暗い小さな控室ひかえしつのなかを取りかたづけはじめたが、そこへはもう既に自分の外套といっしょに、彼特有の変な臭いまでちゃんと持ちこんでいた。その臭いは、後から運びこまれた従僕向きの七つ道具の入っている袋からもプンプン臭っていた。彼はその小部屋の壁際に、窮屈きうくつそうな三本脚の寝台を据すえつけて、その上へ、こちこちのまるで揚煎餅あげせんべいのように薄っぺらな、また恐らくは揚煎餅のように脂じみた、小つぽけな、どうやら蒲団らしい代物しろものをかぶせたが、それは宿屋の主人からうまく借り出して来た品しなである。

こうして召使たちが大騒ぎをして、いろいろの始末をつけている間に、紳士は食堂へ出

かけて行つた。その食堂という奴が抑々そもそもどんなものであるかは、凡そ旅をする程の人なら誰でもよく知つている。つまり例によつて例の如く、油性塗料を塗つた壁は上の方が煙草の煙で黝くすみ、下の方は種々雑多な旅客の背中にこすられて、てかてか光つていようといつた塩梅だが、旅客というよりも寧ろむし、土地の商人仲間の方が多し——というのは、市の立つ日には、きまつて商人仲間が六人づれ七人づれで此処ここへやつて来ては、お茶をお定りきまの二杯ずつ飲んで行くからである。それから、型の如く煤けた天井と、同じく煤けたシャンドリアで、それにはカッタグラスが沢山ぶらさがつていて、給仕が型の如く、海辺に集つどう鳥の数ほど夥おびただしい茶碗を載せた盆を、大胆に振り廻しながら擦りきれた油布の上を駈けまわるたんびに、跳ねあがつたり、ちりんちりん音を立てたりする。また壁じゆうには、型どりの油絵が幾つも懸け並べてある。つまり何もかもが何処どこにでもあるのと同じ調子で、ただ一つ異ちがうのは、中の一枚の絵に描かれた水精ニシフが、おそらく読者もついぞこれまでに見たことがないだろうと思われるような、すばらしく大きな乳房をもっているぐらいのものである。尤ももつと、こういった変態は、誰がいつ何処から我がロシア帝国にもたらしたのか見当もつかない。さまざまな歴史画の中にもしばしば発見されるが、どうかすると、我が帝国の頭官連けんかんれんや美術愛好者たちがイタリヤへ行つた際、案内人にそのかさされて買

こんできた絵の中にさえもちよいちよい見受けられる。紳士は被っていた無縁帽カルツースをぬぎすてると、虹色の毛編けあみの頸巻くびまきを解いた——こういう頸巻は、女房持ちの男には、細君が手ずから編んで、ちやんと巻き方まで教えてくれるものだが、独身者には一体、誰がそんなことをしてくれるやら、作者にはさっぱり分らないから、何とも申し上げ兼ねるが、とにかく、作者はまだ一度もそんな頸巻など巻いた覚えがないので。さて頸巻を解くと、紳士は食事を言いつけた。で、こういう宿屋ではお定まりのいろんな料理、例えば、わざわざ不時の客にそなえて幾週間も蔵しまつてあつた渦巻型の肉饅頭を添えた玉菜汁シチイだとか、豌えんど豆うをあしらつた脳味噌だとか、キャベツを添えた腸詰なんどきだとか、去勢鶏ブリヤルカの焙あぶりにく肉だとか、胡瓜きゆうりの塩漬しおづけだとか、お望み次第、いつ何時なんどきでも用意の出来ている、今もいう甘つたるい渦巻型の肉饅頭だとか——そう言つた料理の、暖めなおしたのや冷たいままのが次ぎ次ぎと運ばれる間に彼は宿屋の下男、つまり給ポロウオイ仕をつかまえて、この宿屋は前には誰が経営していたのか、今は誰が持っているのか、収益はよほど多いのかとか、お前たちの主人は酷い悪党じやないのかというような、つまらないことをいろいろ問ただい糺ただした。それに対して給仕は型の如く、『ええもう、旦那、ひどい悪党でございますよ!』と相槌を打つたものだ。近頃では文明開化のヨーロッパと同じように文明開化のロシア帝国でも、

旅館で食事をしたためののに、何か給仕と話をするか、時には面白そうに彼等をからかい  
 でもしながらでないかと、頓とんと物が美味しく食べられないという変わった御仁ごじんがざらにあるも  
 ので。とはいえ、この新来の客は、そういうたぐいだらない質問ばかり並べた訳わけではない。  
 彼は、この市まちにいる県知事は誰だとか、裁判所長は誰だとか、検事は誰だとかいうような  
 ことを、おそろしく綿密に訊ねた——つまり、主おもだつた役人のことは、一人残らず訊きも  
 らさなかつたのである。が、なお一層こまごまと、まんざら無関心でもなさそうな調子で、  
 目ぼしい地主たちのことを訊ねた——誰だれ々々は農奴を幾人もつていて、市まちからどのくらい  
 離れたところに住んでいるか、どんな性質の男で、市へは余程たびたび出て来るのか、な  
 どということ根掘り葉掘り訊ねた。それからまた、この地方の状態をいろいろと丹念に  
 訊いた——この県下に何か病気はなかつたか、つまり流行性の熱病とか、猛烈なマラリヤ  
 とか、天然痘といった風なものが流行はやらなかつたかなどということ、どうも矢張りただ  
 の好奇心とは思われぬような身の入れ方で根掘り葉掘り質問したものだ。紳士の態度に  
 は、何処いとなく厳いかつところがあつて、涙はなをかむのにもおそろしく大きな音をたてる。一体  
 どうしてやらかすのか分らないが、彼の鼻はまるで喇叭らっぱのような音をたてるのだ。一見こ  
 の何の罪もなさそうな仕草によつて、彼は旅館の給仕から多大の尊敬を贏かち得たものだ。

で、給仕はその音を聞きたんびに、髪の毛を振りあげるようにして、一層シャンと直立不動の姿勢をとり、遙かの高みから会えしやく釈やくをしながら、『何か御用でございましょうか？』と訊ねたものである。食事がすむと、紳士は珈琲を一杯のみほしてから、長椅子にどっかり腰をおろし、背中にクツションをあてがったが、それがまたロシアの宿屋のクツションというやつは中身にふんわりと弾力のある毛のかわりに、まるで煉瓦層か小石のようなものが詰めこんである。やがてのことに、欠伸が出はじめたので、彼は自分の部屋へ案内するように言いつけて部屋へもどると、いきなり横になって、ちょうど二時間ばかり眠った。こうして一休みしてから、旅館の給仕の求めるままに、然しかるべく警察へ届けるため、一枚の紙きれに官等や姓名などを書いて渡した。給仕は階段を降りながら、その紙きれに書いてある次ぎのような文字をたどしく拾い読みした。『六等官パーウエル・イワーノヴィッチ・チチコフ。地主、私用のための旅行』と。給仕がまだそれを一字々々拾い読みしている間に、パーウエル・イワーノヴィッチ・チチコフは市内見物に出かけて行ったが、この市まちが他の県庁所在地に比べて少しも劣っていないところを見て、どうやら満足がいつたらしい。石造家屋の黄いろい塗料は眩まぶしく眼を射、木造家屋の鼠いろの塗料はつましやかに黝くすんで見えた。家屋は一階建のも、二階建のもあり、また、地方の建築師の考えで

は素晴<sup>すば</sup>らしく美しいものとされている、相も変らぬ中二階つきの、一階半建というやつも  
 あつた。こうした家々が、ところによつては野原のようにただっぴろい通りと涯<sup>はて</sup>しもない  
 木柵<sup>もくさく</sup>の間にほつんぽつんと立っており、ところによつては蝟集<sup>かた</sup>まつてごちやごちやと立  
 てこんでいた。そういうところでは人間<sup>ひと</sup>の動きが目に立って、一層活気があふれていた。  
 殆<sup>ほと</sup>んど雨に晒されてしまったような、輪型固麵麩<sup>クレンデリ</sup>や長靴の絵を描いた看板が眼についた。  
 また青いズボンの絵を描いてワルシヤワの裁縫師<sup>なにがし</sup>何某というような名前を掲げているの  
 もあつた。無縁帽と海軍帽の絵を描いて、『外国人\*一ワシーレイ・フョードルフ』と名  
 乗りをあげている店もあつた。また二人の男が玉突をやっている絵看板もあつたが、その  
 男たちには、ちようど我が国の劇場で、よく大詰の幕に出る客人に扮した役者が著<sup>き</sup>ている  
 ような燕尾服が著せてあつた。その競技者たちは、キューを握った手を少し後ろへひいて、  
 立つた今ピョンと一つ跳躍したばかりだと言わんばかりに、足を斜にかまえて、玉に狙い  
 をつけているところである。こうした絵の下には必らず『これ即ち当店なり』と書き添え  
 である。また無雑作に通リヘテーブルを据えつけて、胡桃<sup>くるみ</sup>だの、石鹼だの、石鹼そっくり  
 の生薑餅<sup>しょうが</sup>だのを売っているところもあれば、丸々とふとった魚にフォークを突きさした  
 絵看板を出した煮売屋<sup>にうり</sup>もあつた。中でも一番多く眼につくのは、今でこそ『酒場』という

簡単な文字に変わってしまったけれど、その頃はまだ帝室の紋章たる\*2 双頭の鷲を看板につけていたのが穢きたなく黝くすんでしまったやつである。舗道は到るところ、でこぼこしていた。彼は公園もちよつと覗いてみたが、そこには細いひよろひよろした木が、まだ根も碌々ろくろく張つていないらしく、下の方に三角形に突支つつかいぼう棒を組んで植えてあるだけで、その突支棒がまた恐ろしく奇麗に緑いろのペンキで塗りたててある。それでも、こんな葦の背丈ほどもないような木立のことも、何かで町にイルミネーションの施されたことが新聞に出た折には、『市当局の配慮により、我が市は今や、樹木の鬱うつそう蒼そうと繁茂はんもせる公園によって飾られ、炎暑こうじうの候にも清涼の気を満喫し得るに至れり。』とか、また、『市民の胸の感激にあふれて打ち顫ふるえ、市長閣下に対する感謝の涙濟さんぜん然として下るを見るは誠にいじらしき限りなり。』などと書き立てられたものである。で、彼は巡査をつかまえて、教会へはどう行くのが一番ちかいか、官庁へはどう、知事の邸やしきへはどうといった風に、詳しく道を訊ねてから、市の中央を流れている河を見に行つた。その途中で木の柱に貼りつけてある芝居のビラを一枚はぎとつた。それは宿へ帰つてゆつくり見るためである。また、板敷きの歩道を歩いて行く見目みめうるわしい一人の婦人を、しげしげと見送つた。お仕着しきせの軍服をきて、手に小さい包みを持った少年が婦人のお供について行つた。彼はその場所の様子を一層は

つきり憶えておこうとでもするように、一と渉り四方を見まわしておいて、まっすぐに宿へ帰ると、給仕にちよつと軀からだをささえられながら階段を登って、さっさと自分の部屋へ入ってしまった。お茶を一杯のんでから、テーブルにむかつて腰をおろすなり、蠟燭を持って来させて、例のビラをポケットから取り出したが、それを蠟燭の灯に近づけると、右の眼をちよつと瞬しばたくようにしながら読みにかかった。別段そのビラには大たいしたことは書かれていなかった——\*3コツエブーの芝居がかかつていて、ロールの役をポプリヨーヴィンが、コーラの役をジャブロワ嬢がやるというだけで、その他の役者は一いつこう向名もない手合てあいばかりであった。それでも彼は残る隈なくそれに眼をとおして、平土間の料金まで調べあげ、おまけに、このビラは県の印刷部で刷ったものだということまで確かめた。それから裏にも何か出ていないかと思つて、引っくり返して見たが、何も書いてなかつたので、眼をこすつて、ビラをきちんと畳むと、それを自分の手箱の中へしまひこんだ。彼には何でも手あたり次第にこの手箱へしまひこむ癖があつた。さてこの日は、犢こうしの冷肉を一皿とクワス一本を平たいらげてから、広大無辺な我がロシア帝国の地方によつては、よく言い草にされている、謂いわゆる『鞆ふいごのような大おお 駟おびき』をかいて寝こんでしまうことで、どうやら幕になつたらしい。

翌る日はまる一日じゆう、諸方の訪問に費された。新来の旅人は先ずこの市のお歴々がたを訪問した。初めに県知事に敬意を表した。知事はチチコフと同様に、あまり肥つてもないければ痩せてもない人物で、頸にアンナ十字章をかけていたが、まだその上に、近く星大授章を貰うことになっているという噂であった。その癖、大のお人好しで、時には自分で紗の布に刺繍をしたりさえた。それから副知事のところへ顔を出し、検事のところへ行き、裁判所長のところ、警察部長のところ、徴税代弁人のところ、官営工場監督官のところ……いや、これ以上一々かぞえあげていた日には、世上の有力者を一人残らず網羅することになって、とてもできない相談だから、残念ながらこの辺でやめるが、とにかくこの旅人は、訪問ということにかけて異常な活躍を示したと言つても差支えなく、彼は医務局の監督から市の建設技師にまで敬意を表しに伺候したのである。それでもまだ、誰か訪問すべき人は残っていないかと考えながら、長いこと馬車のなかに坐つていたが、もうこれ以上、官吏らしいものは市にいなかった。こうした有力者たちとの談合のあいだに、彼は実に手際よく、その一人々々に取り入つてしまった。先ず知事にはそれとなしに、この県へ入るとまるで天国へ来たようで、道路という道路は到るところ、ピロードを敷きつめたようだ、それにこういう賢明な粒よりのお歴々を任用している当局はまことに絶大な

賞讃に値するなどと仄めかした。また警察部長には、市の巡査のことで何かたつぷりとお世辞を振りまき、副知事と裁判所長に対しては、二人ともまだ五等官に過ぎなかったのに、談話のあいだに二度までもわざと間違えて『閣下』と呼んだものだから、それがひどく彼等の御意にかなった。結果として、知事は早速その晩、自分の家の夜会に御来臨に預りたいと招待するし、他の役人連もそれぞれ、或る者は午餐に、或る者はポストン骨牌に、また或る者はお茶に招くという始末であつた。

この旅人は自分自身の身の上については、多く語ることをどうやら避けているらしく、話すにしてもひどく控え目がちな、どつちつかずの御座形で、そんな場合にはいつも判で捺したように、自分は世間的には誠につまらぬ蛆虫同様の者で、人様からかれこれ心配していただくほどの人間ではないとか、これまでにはずいぶん辛い目にもあい、職責上、正義のためには忍び難きをも忍び、自分の生命を狙うような敵をも多く持ったとか、しかし今はもう安穩に余世を送りたいと思つて、安住の地をもとめているとか、図らずもこの市へやつて来たので、何はさて一流のお歴々がたに敬意を表するのを第一の義務だと存じましてなどと述べたてるだけであつた。で、さつそく知事の夜会へ出席することを怠らなかつたこの新来の人物について、市の人々が知り得たのは以上が全部であつた。ところで、

その夜会に出席する支度に彼はたつぷり二時間の余もかかったが、この際彼が身じまいに  
払った入念さ加減は、ちよつと他に類のないものであった。食後に少し午睡をとった後、  
洗面の用意を命じた彼は、両方の頬を代る代る、中から舌でつつぱりながら、おそろしく  
長いこと石鹸で磨き立てたが、やがて給仕の肩からタオルをとると、相手の鼻の前でまず  
二度ばかりブルルつと鼻を鳴らしてから、耳の後ろから手始めに、その丸々した顔をまん  
べんなく拭きあげた。それから鏡に向つて胸当をつけ、鼻の孔からのぞいていた鼻毛を二  
本ひっこ抜くと、間髪を入れず、ピカピカ光る蔓苔桃つるこけももいろの燕尾服を著けていた。こん  
な風にして身装をととのえると、彼は自分の馬車に乗りこんで、まばらに灯影のさしてい  
る家々の窓の光りに照らされて、うつすらと見える涯しもなくだっ広い通りを揺られて  
行つた。知事の邸はしかし、まるで舞踏会でもあるように煌々こうこうと灯りがついていて、角  
燈ソタンをつけた軽馬車が幾台も並んでおり、玄関前には二人の憲兵が立っていて、遠くの方  
では馭者の喚き声が聞こえている——つまり、何もかもが注文どおり備わっていた訳だ。  
大広間へ足を踏み入れると、ランプや、蠟燭や、婦人連の衣裳が余りにもキラキラと光り  
輝いていたので、一瞬間チチコフは眼をそばめずにはいられなかった。何もかもがふんだ  
んに光りを浴びていた。黒い燕尾服があちこちに、塊まりになつたり離ればなれになつた

りして、ちらちらしながら揺れ動いていた——それはちようど、夏も七月の暑い日盛りひせいかに  
 開けはなつた窓の前で、年とつた女中頭が真白に輝いている精製糖せいせいとうの棒を打ち砕いて、  
 キラキラする破片かけらにしているとき、その上をまいまい飛び回っている蠅はのようだ。子供た  
 ちは皆そのまわりに集まって、槌を振りあげる女中頭の強張こわばった手の動きを、面白そうに  
 見まもっている。ところが、軽い空気かぜに乗った蠅くうぐんの空軍は、さも我われは顔がおに、遠慮会釈な  
 く舞いこんで来て、老婆が視力の鈍い上に、太陽の光りに悩まされているのをいいことに  
 して、この美味い御馳走の上に、或あるいは一匹いずつ離ればなれに、或はぎつしり塊たかまって集り  
 寄る。そうでなくても、往く先々で美味しい御馳走おのにありつくことの出来る豊饒な夏ほに飽  
うまん満した蠅うまんどもは、別にそれを食べるのが目的ではなく、ただ己おのれを誇示せんがために砂  
 糖の塊まりの上を往つたり来たりして、前肢なり後肢なりの片方の肢で他の肢をこすつた  
 り、その肢で自分の翼はねの下を搔いたり、二本とも前肢を伸ばして自分の頭をこすつたりし  
 て、ここできると向きを変えると、また何処かへ飛び去ってゆくが、再びうるさい大軍  
 となつて飛来するのである。チチコフはひと一わたりぐるりを見まわす暇もなく、はやくも知  
 事に腕をつかまれていた。そして早速、知事夫人に紹介された。新来の客はこんな場合に  
 も決してまごつくようなことはなかつた。彼は官等のあまり高くもなければ低くもない中

年の紳士として、極<sup>きわ</sup>めて妥当なお世辞を言った。それぞれ相手を決めた幾組もの踊りの組が、一同を壁ぎわへ押しつめた時、彼は両手を後ろに組んだまま、二三分のあいだ非常に注意ぶかくその連中を眺めまわした。大概の婦人連は立派な流行の衣裳をつけていたが、中にはせいぜい県庁所在地の田舎町で手に入る程度の品で間に合わせている向きもあつた。男の連中は、何処でも同じように、ここでも二つの種類に分れていて、その一方は瘦形の連中で、この手合いは絶えず婦人のまわりに付き纏い、中でも二三の者に至つては、ちよつとペテルブルグつ児<sup>こ</sup>と区別がつかない位で、非常に凝つて気のきいた型に頬髯をととのえているか、さもなければつるつるに剃りあげた体裁のいい卵形の顔をしていて、無遠慮に婦人連の側へ割りこんだり、フランス語で話したり、女共<sup>ども</sup>を笑わせたりするところは、ペテルブルグに於けると変りがなかつた。もう一方の手合いといえは、よく肥つた連中か、さもなければチチコフと同じような、つまりあまり肥つてもいなければ、そうかと言つて決して痩せてもない連中で。この手合いは反対に、婦人連を横目で見やりながら後ずさりをして、知事の従僕が何処かへ緑いろの骨牌台<sup>カルタ</sup>を出さないかと、あたりを見まわしながら、そればかり狙つている。この連中の顔は、肥えて丸々していて、中には疣の出来たものもあり、また薄痘痕<sup>うすあばた</sup>のものもある。髪の毛は、前髪を立てたり捲<sup>まき</sup>髪<sup>がみ</sup>にしているものもなけれ

ば、フランス人の所謂いわゆる なに構うもんか といった流儀もなく、一様に短かく刈りこんでいるか、さもなければびつたりと撫でつけている、従って顔の輪郭かたちが一層ずんぐりして厳いかつく見える。これがこの市の尊敬すべき役人連であった。噫ああ！ この世の中では、瘦や形せがたの連中よりも肥り肉しじの連中の方が確かに上手に物事をやり遂げてゆく。瘦形せがたの連中というものは、どちらかといえば、せいぜい囑託しよたつぐらいの勤めにありつくか、それともただ名目だけの役を当てがわれて、あちらへペタペタこちらへペタペタと、頓と尻が落ち着かず、妙にその存在がふわふわしていて、吹けば飛びそうで頼りないこと夥しい。肥った連中はそこへ行くと決して傍系的な地位などには止どまっていなくて、いつも重要な直属の地位を占め、そこに坐つたが最後、がっちり腰を落ちつけて構えこんでしまうから、寧むしろ椅子の方で悲鳴をあげてへたばってしまうけれど、彼等自身は敢てビクともすることではない。彼等はけげげした外見が嫌いで、著きている燕尾服も瘦せた連中のほど上手な仕立ではないが、その代り金箱の中にはお宝が唸うっているのだ。瘦形せがたの連中は、三年もすれば一人残らず農奴を借金かたの抵当かたに入れてしまうが、肥り肉の方は泰然と構えていながら、いつの間にか——何処か町はずれに、細君の名前で買った家がひよっこりあらわれる。また他の町はずれに別の家が建つ。それから市の近在の小村が手に入り、次いで地所や山林

の完備した立派な村が我がものになる。やがてのことに肥った男は神と国家への奉公を終え、世間的な尊敬を贏ち得て目出たく職を退くと、田舎へひっこんで地主になる——つまり、押しも押されもせぬロシアの旦那衆として納まり、お客好きの地主となつて、後生安樂に余生を送ることになる。ところがその死後には、またもや瘦形の相続人が現われて、ロシアの習慣にたがわず、忽ちにして親爺の全財産を撒き散らしてしまうのである。チチコフが一同を眺めまわしながら、ぎつとこんなようなことを胸に浮かべていたことは否み難い。その結果、彼はついに肥った連中の仲間へ入ったが、そこには、既に彼の見知り越の人物が、殆んど全部そろつていた。真黒な濃い眉をした検事は、まるで『おい、君、あちらの部屋へ行こう、ちよつと話があるから』とでも言うように、左の眼で絶えず眊せをしていような癖がある。けれどこの男は、至極真面目なむつとり屋なのだ。郵便局長は背丈のちんちくりんな男だが、しかし頓智があつて、なかなかの哲学者だ。裁判所長は非常に思慮分別のある愛嬌者だ——こういうた連中がみな、チチコフを古い知合いのように歓迎した。それに対して彼は、ちよつと気取つた会釈をしたが、それでも一々嬉しそうな顔つきをすることは決して忘れなかった。その場で彼は、ひどく愛想がよくて腰の低い地主のマニローフや、見たところ聊かがさつなソバケーヴィツチと知合いになつたが、

このソバケーヴィッチは、しょっぱなから彼の足をふんづけておいて、『やあ、御免なさい。』と言ったものだ。さつそくヴィストの札を押しつけられたので、彼は相も変らず慇懃にお辞儀をして、それを引き受けた。彼等は緑いろのテートルにむかつて陣取ると、そのまま晚餐の出るまで腰をあげなかった。何か真剣な仕事に身を入れるといつもそうであるように、会話ははたと跡絶えてしまった。郵便局長は非常に口達者な男であつたが、その郵便局長ですら、骨牌の札を手に取ると同時に、その顔に仔細らしい表情を浮かべて、上唇を下唇でかくしたまま、勝負がつづいている間じゆう、その容子ようすを変えなかつた。彼は絵札を出す時には、片手でトンとテートルを叩いて、それがクイーンなら『さあ行け、老耄おいほれの梵ほん妻さいめ！』またキングなら『行つちまえ、タンボフ県の土百姓め！』などと捨す台詞てざりふを言ったものだ。そうすると裁判所長がこんなことを言った。『じゃあ、僕がそいつの髭ひげつ面をこう切つてくれるわさ！ その女の髭ひげつ面もこう切つてな！』時にはまた、札がテートルへ叩きつけられるたびに、『えい！ 伸のるかそるかだ、他にないからダイヤと行こう！』などと掛声かこゑがかけられる、そうかと思うと、簡単に『そら、ハートだ！ ハートの虫むしつ喰くいだ！ スペ公こうだ！』とか、『スペード野郎やろうだ！ スペード女あまだ！ スペ子こだ！』とか、また、もつと簡単に『スペだ！』と呶どな鳴なつたりする。これは、この仲間

うちで各々の札につけ替えた名前である。一勝負かたづく、例によって例の如く、かなり騒々しく議論を闘わした。わが新来の客も同じように議論に加わったけれど、ひどく要領がよかつたので、一同は、この男は議論をしながら、それでいて気持の好い科白せりふを使うわいと思つた。彼は決して、『おいでなすつたね』などとは言わないで、『はあ、そうおやりになるのですね、ではこの二はひとつ切らせて頂きますよ』などといった調子である。何事かを自分の敵に一層よく納得させようと思つたと、そのたんびに彼はエナメルをかけた銀の嗅煙草かぎたばこ入を相手の前へ差し出した。その底には、香りをよくするために、董の花が二つ入れてあるのが眼についた。特にこの旅人は、前に述べた地主のマニローフとソバケーヴィツチに注意を向けていた。彼は早速、裁判所長と郵便局長をちよつと傍らへよんで、二人の身の上を訊き糺ただした。彼の持ちかけた若干の質問から、このお客の肚はらには単なる好奇心ではなく、何か下心があるのだということが領うなずかれた。というのは、彼はまず何より真先に、二人がそれぞれどのくらい農奴を持っているか、また領地はどんな状態に置かれているか、などということを、根掘り葉掘り訊ねてから、初めて、名前や父称を訊いたからである。彼は忽ちのうちにこの二人をすっかり俘虜とりこにしてしまった。地主のマニローフは、まだ決してそれほどの年配ではなく、砂糖のように甘つたるい眼つきをしてい

て、笑うたんびにその眼を糸のように細くする男であったが、このお客にすっかり夢中になってしまった。彼はとても長いことチチコフの手を握りしめながら、とても熱心に、是非いちど自分の村へも御来駕ごらいがの栄えいを賜りたいと懇願した。その村は彼の言うところによれば市の関門からほんの十五露ヴェルスト里しか離れていないとのことである。それに対してチチコフは、非常に鄭重に頭をさげ、心をこめて相手の手を握り返しながら、自分は大喜びでそのお招きに応ずるばかりでなく、貴村を訪問するのを最も神聖な義務と考えるなどと答えた。またソバケーヴィツチも、これは極めてあっさりとして、『僕の方へもどうぞ』と言って、途方もなく大きな靴をはいた足でがたりと足擦りあしずをしたものだが、だんだん豪傑というものが影をひそめてきた当節では、いかなロシアにも、こんな凶体の靴に合う足が果してあるかどうか疑わしい位だ。

翌る日、チチコフは警察部長のところの午餐と夜会に招かれ、午後の三時からヴィストをやり出して、夜中の二時まで勝負をつづけた。その間かん、ここで地主のノズドウリヨフと知合いになったが、それは年のころ三十ぐらいの、すばしっこい元氣者で、二言か三言、口をきいただけでもう、『君、君』と言うようになった。警察部長や検事に対して、ノズドウリヨフはやはり『君、君』で、極めてぎつくばらんに振舞ふるまっていた。けれど賭の大

きい勝負が始まると、警察部長も検事も非常に注意ぶかく彼の取り札を見張り、この男の出す札にいちいち眼を配っていた。その翌日、チチコフは裁判所長のところで一いつせき夕を過すごしたが、この人はお客に接するのに少し垢じみた寛衣へやぎを着きていた。然しかもそのお客の中には何でも婦人が二人もまじっていたのだ。ついでチチコフは副知事ふくちじの家の夜会やかいに出席しゅっせきしたり、徴税代弁人ていぜいだいべんじんの家の大午餐会だいちんちんかいに出たり、検事けんじの家のささやかな、とはいえ金のかかった午餐ちんちんに招かれたり、市長しやうじやうの催しにかかる、これも殆んど午餐ちんちんに等しいようなお茶の会ちやのかいによよばれたりした。一口ひとくちにいえば、彼は一時間として家にじつとしていることが出来ず、宿しゆくへは、ただ寝に帰るだけであつた。この新来の客は、どんな場合にも決してまごつくようなことがなく、いかにも世故せこに長けた人間であるという実じつを身みをもって示した。どんな話題たひだが出ても、いつでもそれに巧くばつを合わせる事が出来た。例えば馬の飼育かいよが話題たひだにののばれば、彼は馬の飼育かいよについて話し、優良な犬の話いぬのわたりが出れば、それにも極めて剗がいせつ切せつな意見いけんを述べ、県本金庫けんほんきんこの手で行われた審査しんさについて議論ぎろんがはじまれば、裁判上さいばんじやうのからくりにもまんざら無智むちでないことを示し、玉突たまづつの話わたりが出れば、玉突たまづつの話わたりでも決してへまなことは言いわなかつた。慈善じぜんのことが話題たひだにののぼると、慈善じぜんについても実に立派りつぱな意見を述べて、あまつさえ眼めがしら頭あたまに涙なみださえ浮かべたものだ。爛酒らんしゆのつくり方つくりかたについて話が出たら、爛酒らんしゆの

こつをちやんと知っており、税関の役人や監視人の話になると、まるで自分自身が税関役人か監視人でもあったような塩梅に、そういう連中の噂をしたものだ。しかも刮目かつもくに値するのは、必らずこういう話を一種嚴肅な調子で包み、その場に適ふわしい態度を保つ心得のあったことである。彼の話し声は高すぎもしなければ、低すぎもしない、ちやうど頃あいの声であった。一言にしていえば、どちらへ向けても、彼は実に申し分のない人間であつた。役人たちはこの新しい人物の出現に、一人残らず好感を抱いた。知事は彼のこゝとを、誠に心掛こゝけの好い男だと言ひ、検事は——道理を弁わえた男だと評し、憲兵大佐は——学者だと褒め、裁判所長は——なかなか物知りで、尊敬すべき人物だと持ちあげ、警察部長は——尊敬すべくまた愛すべき男だと讃え、警察部長の細君は——とても優しくて、愛想のいい方だと言つた。滅多めったに人のことを好く言わないソバケーヴィツチですら、市まちからかなりおそくなつて帰宅すると、すっかり着物をぬいで、痩せ萎びた細君の横へ入つて床につくなり、こう言つて話しかけたものだ。『なあ、お前、きようは知事んとこの夜会へ出たし、部長んとこで昼飯を食つたがな、パーウエル・イワーノヴィツチ・チチコフつていう六等官と知合いになつたよ。まったく氣持の好い男さ！』それに対して奥方は『ふん！』と答えて、良人おとこを足で小突いた。

こういつた我らの客にとつて誠に悦ばしい評判が、市じゆうにひろまって、それは、この客のある奇怪な本性と、企らみというか、それとも田舎でよくいう『やまこ』というやつが、殆んど全市を疑惑のどん底へ突き落とすに至るまで、ずっと続いたのであるが、その経緯いきさつについては、間まもなく読者の探知するところとなろう。

\*1 ワシーリイ・フョードルフ これは明らかに純然たるロシア名前であるのに、特に『外国人』と称しているところが滑稽である。

\*2 双頭の鷲のついた看板 当時、酒類は政府の専売となっており、酒場よりの収入が帝室の歳費に繰り入れられていたため、酒場の看板に帝室の紋章がつけてあったのである。

\*3 コツエプー アウグスト・フリードリッヒ・フェルジナンド (1761-1819) ドイツの劇作家。十七世紀末と十八世紀初頭の二期に亘りロシアに在住し、後にウィーンの帝室劇作家となったが、間諜の嫌疑によって死刑に処せられた。

## 第二章

旅の紳士は、もう一週間以上もこの市まちに逗留して、夜会だの午餐会だのといつて方々へ出歩きながら、まあいわば、面白おかしく時を過ごした。そこで今度はいよいよ訪問の銚先を市外に向けて、予かねての約束を果すために地主のマニーロフやソバケーヴィツチを訊ねることにした。こう彼が肚を決めてのは、どうやら他にもっと肝かんじん腎な理由があつてのこ  
とらしい——もつと真剣で、切実な問題が……。それは、しかし読者にこのさきを一通り辛抱して読んでいただければ、やがてだんだん分つて来るはずである。とにかくこの物語は頗すこぶる長くて、しかも華々しい大団円に近づくに随い、いよいよますます大規模になつて行くもののご承知ねがいたい。さて、馭者のセリファンは、朝早く例の半蓋馬車ブリーチカに馬をつけるように言いつけられた。ペトゥルーシカは宿に残つて部屋と旅行鞆トラフンクの番をしておれの命令だ。ここで、本篇の主人公に仕えている、この二人の農奴を読者に紹介しておくのも、あなたがち余計なことではあるまい。無論、こんな連中はそれほど重要な人物ではなくて、いわば二流、或は三流どころに過ぎず、この叙事詩の主なる発展や動機が決して彼等

に由来するのではないのだから、とどこどこで言及するにしても、極くあつさりあしらつておけばよい訳であるが、しかし作者は万事につけて几帳面なことが非常に好きで、この点では元来ロシア人であるにも拘らず、ドイツ人のように綿密でありたいと希うのである。と言つたところで大して時間も場所も費えることではない。それは、読者が既に御承知のこと、つまりペトウルシカが旦那のおさがりの、少々ゆるすぎる羊羹色のフロツクコートきを著ており、こういう階級の人間には得てありがちな、おそろしく大きな鼻と唇を持つていふことに、ほんの少しばかり附け足せばよいからである。彼の性質は、口数が多いというよりは寧ろしんねりむつりの方で、常に教養を高めようという誠に殊勝な心掛けさえもつていた。つまり、それは書物を読むのが好きなことであるが、尤もその内容の如何いかんなどはちつとも問題にしなかつた。恋に落ちた主人公の波瀾曲折の物語であるうと、単なる初等読本であろうと、乃至は祈祷書であろうと、彼にとっては全く何の変わりもなかつた——どんなものでも同じように注意を払つて讀んだ。で、もし彼に化学の本を宛あてがつたとしても、やはりそれを拒みはしなかつただろう。読む本の内容よりも、寧ろ何かものを読んでいふこと、更に的確にいえば、ものを読んでいふ経過が好きなので、なるほど字というものが寄り集まると何かしらきつと言葉が出来あがるが、時にはそれが

何のことだかさっぱり分らないわいと言った具合である。読書は大概、控室で、寝台の蒲団の上に寝そべってやったもので、その結果、蒲団がまるで煎餅のように固い薄っぺらなものになってしまったのである。この読書に対する熱情のほかには、この男にはもう二つ習性<sup>せ</sup>があつて、それが別の二つの特徴をなしていた。それは、着物をぬがないで、著<sup>き</sup>のみ著<sup>き</sup>のまま、例のフロックコートのままで寝ることと、妙に世帯染<sup>しよたいじ</sup>みたような一種独特な臭いのする特別な雰囲気<sup>ふんいき</sup>を始終身のまわりに漂わせていることで、それがために彼が何処かに自分の寝台を据えつけるなり、外套だの身のまわりの品だのを持ちこんだが最後、たといそれまでは人気<sup>ひとけ</sup>のなかつた空き部屋<sup>あひら</sup>でも、忽ち<sup>たちま</sup>十年も前から人の住んでいた部屋のようなになるのであつた。チチコフはおそろしく潔癖<sup>けつぺつ</sup>で、時には気難<sup>きなん</sup>かしいくらいの男であつたから、朝などその臭いがプーンと爽<sup>すがすが</sup>々しい鼻を見舞うと、たちまち眉をしかめて、首を横に振り振り、こう言つたものである。『おい、どうも堪<sup>た</sup>らなくお前は汗臭いぞ。銭湯へでも行けばいいのに。』それに対してペトウルシカは返辞<sup>へんじ</sup>一つしないで、壁にかかつている主人の燕尾服にブラシを掛けるとか、ただちよつとそこいらを片づけるとか、さつさと何か仕事に取りかかつたものである。こうして黙りこんでいる時には、いったい彼は何を考へているのだろうか？ 恐らく肚の中ではこんなことを呟<sup>つぶや</sup>やっていたのかもしれない。

『だがね、お前様だつて、ずいぶんお目出たいやな、よくもまあ倦あきもしねえで、おんなじことを繰り返し繰り返し、四十遍も言つてなさるだ……』だが、主人から訓戒を与えられる時、下男というものが一体どんなことを考えているか、それは神様にだつて分るものではない。だから、ペトウルシカについても、先まずさしあたりこの位のことしか言えない訳である。ところで馭者のセリファンとくると、これとはまるで別な人間で……。だが作者は、こういうつまでも読者諸子をこんな下等な人物の相手に引きとめておいては、甚はなはだ気が咎とがめる。というのは、これまでの経験から、読者というものが下層階級の人間と知合いになることを余り悦ばないことをよく知っているからだ。ロシア人という奴は兎角とかくそうで、自分より一級でも位の上の人間には、躍起やつきになつて接近したが、伯爵や公爵にちよつと会釈でもして貰える方が、仲間同士のどんなに親密な友情より嬉しいのだから仕方がない。作者は本篇の主人公がかつかつ六等官に過ぎないということが既に気懸きかりなのである。七等官あたりなら、まだしも彼と相識ちかづきになつてくれるかも知れないが、もう勅任ちよくに官んかんの位を贏かち得たほどの人物だつたら、おそらく、誰でも自分の足許あしもとに這いつくばうものに向つて傲然として投げつける、あの侮蔑に充ちた眼差まなざしをなげることだろう。いや、罷り間違まかえば、作者にとつては全くもつて致命的な、黙殺という憂目うきめに逢うかも知れない

のである。しかし、それやこれやが如何いかに辛くても、やはり主人公のことに話を戻さなければなるまい。で、もう前の晩に必要な指図を与えておいたチチコフは、翌あく朝とても早く眼を覚ますと、さつそく顔を洗い、水をしませた海綿で頭の天てっぺん辺から足の爪先まで軀からだをよく拭ぬぐつた——これは日曜日だけにだけすることであつたが、ちようどその日が日曜に當つていたのである——それから頬が本物の縺しゆす子のようにすべすべして光沢つやの出るまで丹念に顔を剃あり、まずピカピカ光る蔓つるこけも苔桃もいろの燕尾服を著きた上へ大きな熊の毛皮の裏をつけた外套を引つけて、旅館の給仕に、或は右側から、或は左側から腕をとられながら階段を降りて、例の半蓋馬車ブリーチカに乗りこんだ。ガラガラと音をたてながら、馬車は旅館の門をくぐつて通りへ出た。通りすがりの坊さんが帽子を脱とり、汚れたシャツを著た子供が四五人、一様に手を差し出して、『旦那みなしご、孤み児なに何かやつておくんな!』とせがむ。その中の一人がしつこく馬車の後ろの馬丁台ばていに乗つかつて来るのを見つけた馭お者が、いきなりそれを鞭でひつぱりたい。馬車は石ころに跳ねあがりながら駈けて行つた。だんだんに塗つた関門の柵が遙か彼方に見え出すと、これでようやく、他のあらゆる苦痛の終りと同じく、有難いことに、間もなく敷石道がしまいになることが分り、それからもう二三度、馬車の車体にかなりひどく頭をぶつけた拳句あけく、やつとチチコフは柔らかい土の上へ運び出されたの

であつた。市を後にすると同時に、例によつて例の如く両方の道端に、やれ丘がある、も縦み林みばやしがある、小松林こまつばやしの背の低いのや疎まばらなのがある、焼け残りの老木の幹がある、石し楠やくなげがあるといったような、凡およそ愚にもつかぬ有象無象の描写にからなければならぬのだ。紐のようにだらだらと長い部落にもさしかかた。その家々が、まるで古い薪を積みかさねて灰いろの屋根を被せたような恰好で、その屋根の下には、よく壁に掛けてある手拭てぬぐいの刺繡模様みたいに、木で彫刻をした装飾がついている。羊の毛皮の外套を著た二三人の百姓が、門の前の腰掛こしかけに坐つて、申し合わせたように欠伸をしている。上の窓からはちきれそうな顔をして、乳房をぎゅつとつつんだ百姓女が覗いておれば、下の窓からは、仔牛が顔をのぞけたり、豚が盲めくら滅法めつぽうに鼻面はなづらだけ突きだしている。要するに陳腐な光景である。チチコフは十五露ヴェルスト里の里程標をとおり過ぎながら、マニローフの言葉によると、この辺に彼の村がある筈だと思つた。けれど十六露ヴェルスト里の里程標も瞬またたぐ間にとおり過ぎてしまったのに、村らしいものはいっこう眼につかなかつた。で、もしそこへ二人の百姓が来あわせなかつたら、彼は満足に目的地へ達することが出来たかどうか、ちよつと怪しいものであつた。『ザマニロフカ村はまだ遠いかね?』という質問に対して、二人の百姓は帽子を脱とつたが、その中の一人で、少し利口そうに見える、楔形の顎鬚を生

やしたのが、『ザマニロフカじやござえめすめえ、おおかたマニロフカでござえましよう？』と答えた。

「そうさ、そのマニロフカだよ。」

「マニロフカですかね！ それなら、このままもう一露<sup>ヴェルスト</sup>里ばかり行かつしやると、ちようど右手にあたりますだよ。」

「右手かい？」と、馭者が鸚鵡返<sup>おうむがえ</sup>しに念をおした。

「右手だよ。」と、百姓が答えた。「そう行けばマニロフカへ出られるだよ。だが、ザマニロフカなんちゆう村はこけえらにやねえだ。あの村はそう称<sup>よ</sup>ぶだ、つまりその地名がマニロフカちゆうだ。ザマニロフカなんちゆうところは、こけえらにや頓<sup>とん</sup>とねえだ。で、そこへ行くちゆうとな、真直<sup>まっす</sup>ぐに、山の上に、石造りの二階建が見えるだ。それが地主様のお邸で、つまりそこに旦那が住んでござるだよ。そこが、お前さんのいわつしやるマニロフカで。だが、ザマニロフカなんちゆう村はこけえらにやありもしねえし、あつた例<sup>ため</sup>しもねえだよ。」

マニロフカを探し索<sup>もと</sup>めて馬車は駈<sup>ま</sup>けだした。二露里ほど走ると、村道へ外<sup>そ</sup>れる曲り角へ来たが、それからまた二露里どころか、三露里も、四露里も走つたけれど、その石造りの

二階建なんてものは、さっぱり見当らなかつた。ここでチチコフは、友達から十五露里ほどだと言つてその村へ招待されたら、てつきりそこまでは三十露里もあるのだ、ということとを想いだした。マニロフカはその位置の關係から、訪ねる人も至つて少なかつた。地主館やかたは一つだけぽつねんと四方を見晴らして立つていた。つまり高台の上にあつて、風があまり次第、どちらからでも吹き曝さらしになつていたのである。その邸のある丘陵の斜面は、きれいに刈りこんだ芝生に蔽おほわれていた。そこには、紫丁香花むらさきはしどいや黄いろい針金雀児はりえにしだの株を植えこんだ、イギリス風の花壇が二つ三つ散在し、五六本の白樺がここに小さい木立となつて、細かい葉をつけた疎こすえらな木梢こすえをもたげている。その中の二本の木蔭には、青い木の柱に平べつたい緑いろの円屋根まるやねをつけた四阿あずまやが見え、それには『静思庵せいしあん』と銘がうつてある。その少し下には、青い浮草で蔽おほわれた池があるが、しかしこれは、ロシアの地主連が持つているイギリス式の庭園には別に珍しいものではない。この丘の麓ふもとや、また一部はその斜面さかにかけて、灰色つぼい丸太造りの百姓家がべた一面に黒々と群がっていた。我々の主人公は、どういう理由わけか知らないが、それを一目見るなりその戸数をかぞえはじめ、二百軒以上あることを確かめた。家と家との間には一本として樹木らしいものも青いものの姿も見られなかつた。到るところ、見えるものはただ小屋組こやぐみの丸太ばかりであ

った。その光景に生氣をそえるように、二人の百姓女が、絵に描いたように着物をまくりあげ、くるりと裾を端折つて、膝まで水につかりながら、二本の木の竿に結びつけた破れた曳網をひっぱって池の中を歩いていた。網には、蛙が二匹ひっつかかっていたし、鯉も一尾網の中で光っていた。女たちは、どうやら喧嘩でもしているらしく、何かしきりに嗤みあっている。そこから少し片側へよつたところに、松の林が妙にくすんだような青さで黝んでいた。天気具合までが、まったくお詠えむきで、その日はからりと晴れているのでもなければ、曇っているでもない、一種の明るい灰いろを帯びていた。こういった色合いは、あの、ふだんは至っておとなしいが日曜だと間々酔っぱらう連中を見受ける衛戍兵の著ている古い軍服によくあるものだ。画面を補うために、雄鶏も一羽ちゃんと登場していた。謂ゆる天候の変化の予言者であるが、こいつは、言わずと知れた恋の意趣から他の雄鶏どもの嘴にかかつて、頭に脳味噌がとびだすほどの傷を負わされていたが、平気なもので、大きな声を張りあげてときをつくり、剩さえ古、蓆のように引き撈られた翼でバタバタと羽搏きをやらかしていた。邸に近づきながらチチコフは、入口のポーチの上で他ならぬ主人の姿を見つけた。マニーロフは緑いろのシャロン織のフロックコートを著て突つ立ったまま、眼の上に庇を拵らえるような恰好に片手を額にかざして、乗りこんで

来る馬車の正体を見届けようとしていた。半蓋馬車ブリーチカがポーチに近づくとつれて彼の眼はだんだん嬉しそうになり、相好そうこうが次第に崩れて行つた。

「パーウエル・イワーノヴィッチ！」と、彼はチチコフが半蓋馬車ブリーチカから降りた時、とうとう叫び声をあげた。「それでもまあ、よく手前どものことを憶えていて下さいましたねえ！」

二人の友人同士が非常に力をこめて接吻を交わしてから、マニローフはお客を部屋の中へ招しょうじ入れた。二人が玄関から控室を通つて食堂へと抜けて行くだけの間では、少し時間が足りないけれど、何とかその暇を利用して、この家の主人あるじについて少しばかり語つてみようと思う。しかし作者は、こういった企てが甚だ困難であることをここで告白しなければならぬ。もつと大人物の描写をするのだつたら、ずっとその方が楽で、それならただもう縦横無尽えいぐに絵具えのぐを画布へなすりつけてからに——黒い、射るような眼と、垂れさがつた眉と、皺しわの深く刻まれた額と、肩に投げかけられた真黒かまたは燃えるような緋のマント——そういったものを描きさえすれば、肖像はちゃんと出来あがる。ところが世の中には、どれもこれも似たりよつたりの顔をしているくせによくよく見ると実に微妙な特徴を多くそなえた人物がざらにあるもので——こういう人物の肖像を描く段になると、なかな

かおいそれとはゆかない。何しろ、そのデリケートな、殆んど眼にもとまらないような特色が残りなく自分の眼前がんぜんに髻髻ほうふつとして浮かび上あがるまでは、じつと精神を緊張させていなければならず、しかもあまり探求に凝つて過敏になつた眼というものは、とかく見当違いな深入りをするものだからである。

マニローフが一体どんな性格の男であつたかは、神より他には何とも言うことが出来な  
 いだろう。世間には、諺にもあるとおり、都の名士でもなければ、村のどん百姓でもな  
 い、どつちつかずの中ぶらりん という尊称あまねで普く知られている人種がある。マニローフ  
 も多分、この仲間に入れるべき人物だろう。見たところ風采も堂々としており、顔だちに  
 も氣持の好いところがあるけれど、どうもその氣持の好きには、ちと砂糖が利きすぎてい  
 るようだ。又その素振りそぶや物腰ものこしには何かしら相手の好意と知遇おもに阿ねるようなところ  
 ある。彼が笑うととてもチャーミングで、髪は薄色で、眼は蒼かった。この男と話を始め  
 ると、最初は誰でも、『なんて氣持のいい善良な人だろう！』と言わずにはいられない。  
 ところが次ぎの瞬間には、何も言うことがなくなり、それから今度は、『ちえつ、まるで  
 得體えたいの分らぬ男だ！』と言って引き退さがるより他はない。引き退らずにいたものなら、きつ  
 と死ぬほど退屈な思いをさせられるに違いない。誰だつて自分の氣にさわるようなことを

言われたなら、少しは生気のある、時には横柄おうへいな口さえきくものであるが、この男から、そんな思いきつた言葉を期待することは断じて出来ない。人間にはそれぞれ情熱というものがある。或る人は、それをボルゾイ犬に傾注する。また或る人は自分が大の音楽通で、どんな深遠な妙所でも聴き分けることが出来ると思い込む。そうかと思うと、恐ろしく巧者ぶった飯の食い方をしたがる人もあり、また自分に宛がわれた役割よりほんのちよつぴりでも上の役を演じたがる人がある。また或る人はずっとけちな望みしか抱いておらず、せめて侍従武官と一緒に散歩でもしていると自分の友達や知合いや、赤の他人にまで見せびらかしてやりたいなどと寢床の中で夢想する。或る人はまた、ダイヤの一か二の札を威勢よく打ち出してやろうなどという飛んでもない野心でうずうずしているような手を授かつており、そうかと思うと或る人の手は、ともすれば得手勝手えてかってを通そうとして、隊長や馭者の頭上へ飛んでゆく。——要するに、誰でも皆めいめい自分の個性を發揮したがるものだが、マニローフには全然そんなところがなかった。家では口数もあまりきかず、大抵たいてい、何か考えこんで物思いに耽ふけっているが、一体何をそんなに考えているのか、それは神様にだつて分ることじゃない。農事に携たずさわっているなどは、間違つても言うことが出来ない。第一、野良へなど出かけた例しが一遍もないのだ。それでも、どうやら仕事

の方で勝手にかたがついてゆくようだ。管理人が『旦那様、これこれこういう風にしたら  
 よろしいでしょう』と言えば、『うん、それも悪くならうね』と答えながら、いつも煙  
 管をすばすばやっているが、煙草は彼がまだ軍隊に勤めていて、誰よりも温和で、思いや  
 りが深く、教養のある士官だと思われていた頃から喫すいなれていたので。『うん、まっ  
 たくそれも悪くならうね』と彼は繰り返す。百姓がやって来て、頭を掻きながら、『且  
 那樣、済みましねえが、仕事を休ましておくんなせえ、税金を稼かせぎに行きてえだから。』  
 と言えば、『ああいとも』と、いつも例の煙管をスパスパやりながら許しを与えるが、  
 その百姓が酒を喰くらいにゆくのだなどは、夢にも考えたことがない。時おり彼はポーチ  
 の上から庭や池を眺めながら、ひとつ地下道をつくって家から真直ぐに行かれるようにし  
 たらいいとか、池の上に石橋を架けて、その両側に屋台店をひらき、そこへ商人あきんどを坐ら  
 せて、百姓に入用な細こま々ました雑貨でも売らせるようにしたら素敵すてきだなどと言ったりする。  
 そんな時、彼の眼はひときわ甘あまつたるくなり、顔にはさも満足らしい表情が浮かんだもの  
 だ。しかし、こうした計画はただ口先だけで、いつもそれなりになってしまふのだ。彼の  
 書齋には、一冊の本が四六時中、十四頁目のところに葉しおりをはさんだまま置いてあつたが、  
 それを彼はもう二年越し読んでるのである。彼の家では、いつもきままって何かしら欠け

ていた。例えば客間には素晴らしい家具が並んでいて、それには定めし高い金をかけたらしい、粋な絹布が張つてあつた。ところが二脚の安楽椅子には、その布が足りなかつたと見えて、粗い麻布を張つただけで並べてある。尤も主人は、この数年間というもの、お客のあるたんびに、『その椅子にはお掛けになつちやいけませんよ、実はまだ仕上げが出来ておりませんので。』と、前もつて断わりをいつた。また或る部屋には全然家具らしいものが具えてなかつた。ほんとうは、新婚早々、細君にむかつて『ねえお前、明日にもこの部屋に、たとえ一時しのぎにでも、家具を入れることにしようね』などと言つたものだ。晩になると、くすんだ青銅で三人の美の女神を象どり、しやれた真珠貝の火除をつけた、非常に優美な燭台がテーブルの上へ出されたが、それと並べて、脚がびっこで、一方へ傾き、おまけに蠟燭の滓が一面にこびりついた、粗末ながらくた同様の銅の燭台が置いてあつても、主人をはじめ、主婦も、召使たちも、一向それを異としない。彼の細君はといえ  
ば……、ところでこの夫婦は互いに満足しきつているのだ。二人が結婚生活に入つてからもうかれこれ八年の余にもなるのに、今だにどちらか一人が相手のところへ、そつと林檎の一切れだの、金平糖だの、胡桃だのを持って来て、水も漏らさぬ愛情を表わす、とろけるような甘つたるい声で、『さ、ああと口をおあきなさい、美味しいものを入れてあ

げますから』と言う。そうすると、いうまでもなく、相手の口はいともしおらしく開けられたものだ。誕生日などには、例えばビーズ刺繍の小楊枝入こようじいれといった風な、相手の思いもかけぬような贈物おくりものが用意される。又これは始終あることだが、二人が長椅子に掛けている時など、よく不意に、いったい何がきっかけになるのかまるで見当がつかないけれど、一方が煙管を手から離すと、片方も、その時手すさびにしていた仕事を傍らへ押しやって、二人は身も心も溶け入るような、長い長い接吻を交わしたもので、しかもその長いことといたら、細巻の葉巻なら一本は楽に喫のみ終ることが出来るくらい続くのである。要するに、円満な夫婦とはこんなものだといわんばかりであった。勿論こんな長つたらしい接吻や、相手を吃びっくり驚させるような贈物に耽たつていること以外に、家の中には他の用事がぎらにあつたり、またいろんな煩わづらわしい問題が次々と起こつてもくるのだ。例えば、どうして台所では、ああ無聞矢鱈むやみやたらに料理を拵こしらえるのか？ どうして蔵の中があんなに空からになつてゐるのか？ どうして女中頭はああ手癖てくせが悪いのか？ どうして下男どもはあんなに不潔で、いつも酔っぱらつてばかりゐるのか？ どうして召使たちはあんなにだらしなく、どうもこいつも寝てばかりいて起きてゐる間はいつも悪戯わるさばかりしてゐるのか？ といったようなことだ。しかし、こんなことはみな甚だ低級な問題だが、一方マニーロワ夫人は、実

に立派な教育を受けた御婦人ときている。ところで、立派な教育というやつは周知の如く寄宿女学校で授かるもので、その寄宿女学校ではこれまた周知のとおり、三つの主なる題目が婦徳ふとくの基礎となつてゐる。第一にフランス語で、これは家庭生活の幸福のために欠くべからざるもの、第二はピアノで、これは良人に愉快な時を過ごさせるため、そして最後に、ようやく本来の家事、つまり巾きんちやく着やくやその他いろんな贈物を拵こしらへることが挙げられてゐる。尤ももつとも、その教授法に種々の改善や変更の施こされることが、殊ことに現今に於いては甚だしく、これは主として、その寄宿学校を経営してござる女の校長先生の常識と伎倆ぎれうによつて左右されるものである。で、或る寄宿学校ではピアノを第一にし、それからフランス語、そして最後に家事という順序でやつてゐるところもある。またどうかすると家事、つまり贈物の手芸を第一に置き、次ぎにフランス語、最後にピアノというやり方のところもある。とにかく、いろんな方式がある訳だ。ところで、もう一つ、こんなことを指摘するのも妨げにはなるまい、つまりマニーロワ夫人は……だが、正直なところ、どうも御婦人がたについてかれこれ申しあげるのは甚だもつて心こころ許もと無い次第で、それに、もうそろそろ我々の主人公たちのことに戻らなければなるまい、というのは、もう二三分の間、二人は客間の扉口の前に立ったまま、互いに先を譲りあつてゐるからである。

「どうかまあ、そんな御斟酌ごしんしゃくには及びませんよ。手前は後から入らせて頂きますから。」と、チチコフが言うのである。

「いや、それあいけませんよ、パーウエル・イワーノヴィツチ、あなたはお客さまですもの。」そう言いながら、マニーロフが片手で扉口を指さした。

「まあ、まあ、そんなに仰おつしやらないで、どうかお先へ。」とチチコフが言った。

「いや、何と仰つしやつても、あなたのような実に氣持のいい、お偉いお客さまを差しおいて私風情ふげいがお先に立つなんて、断じて出来ることじゃありませんよ。」

「どうしてまた、手前が偉いなんて?……さあ、どうかお通りください!」

「まあ、とにかく、あなたからお先さききへ。」

「これは又、どうしてでしょうね?」

「どうもこうもあるんですか、さあ!」と、氣持の好笑を含みながらマニーロフが言った。

結局、二人は軀からだを振じ向けて一緒に扉口へ入ったので、互いに少し揉みあったものだ。

「では一つ、家内を紹介させて頂きましょう。」と、マニーロフが言った。「ね、お前!これがパーウエル・イワーノヴィツチさんだよ!」

チチコフはマニーロフと入口でお辞儀ばかりしあつていたので、それまで少しも気がつかなかつたが、この時はじめて一人の婦人の姿を認め<sup>みと</sup>た。なかなか美人で、顔に相應しい服装をしていた。白っぽい絹布の寛衣<sup>ガウン</sup>が彼女に大変よく似合つていた。細<sup>ほ</sup>つそりした可愛らしい手が、何か持つていたものを急いでテーブルの上へなげ捨てると、四隅<sup>よすみ</sup>に刺繡のついたバチスト麻のハンカチを握りしめた。彼女は腰かけていた長椅子から立ちあがつた。チチコフはまんざら悪くもなさそうな面<sup>おももち</sup>持<sup>もち</sup>で、彼女の差し出した小さい手に口を近づけた。マニーロフ夫人は、少し甘えたような口調で、御来訪にあずかつてとても嬉しい、殊に主人などはあなたのお噂をしない日は一日としてなかつたなどと言つた。

「そうなんですよ。」と、マニーロフもそれに相槌を打つた。「もう毎日のように彼女<sup>これ</sup>が訊くのです。 どうして、あなたのお友達はいらつして下さらないのでしょうか。 ってね。で、 まあ待つておいで、今においでになるから」と、いつも宥<sup>なだ</sup>めていたのですよ。ところが、とうとう望みが叶つて、お訪ねにあずかつた訳です。まったくこんな嬉しいことはありません——まるで五月祭りか……盆と正月が一緒に来たような気持ですよ……。」

とうとう話が盆と正月が一緒に来たなどというところまで発展しては、流石<sup>さすが</sup>のチチコフも少々てれてしまつて、自分は大して名声を博している人間でもなければ、どれだけ立派

な官等をもつ者でもない、慎ましやかに弁解した。

「いや、あなたにはどちらもおありです。」と、マニーロフが相も変らぬ気色のいい微笑をたたえながら遮った。「どちらもおありです。いや、それ以上ですよ。」

「市まちはいかがでして？」と、マニーロフが口を出した。「御愉快にお過ごこしになりました？」

「たいへん立派な市まちです、素晴らしい市まちですよ。」と、チチコフが答えた。「とても愉快に過ごしました。なにしろ社交界の方々が至って御親切ですからね。」

「あの知事さんをどうお思いになりました？」と、マニーロフが訊ねた。

「いや、まったく見あげた、また実に愛想のいい人物でしょう？」と、マニーロフが言い足した。

「まったく仰せのとおりで。」と、チチコフが言った。「この上もなく立派な方ですね。それに、御職ごしよくしやう掌しょうがびつたり板についていますよ！ ああいう人がもつと沢山あるといんですがねえ。」

「ほんとに、どうしてああ誰だれ彼かれなしに寄せつけながら、その癖、自分の振舞いにちゃんと節度を保つことが出来るのでしょうかね。」マニーロフはにこにこ笑いながら、そう言い

足したが、まるで耳の後ろをそつと撥くすくられる時の猫のように、いかにも満足らしく、糸のように目を細くしたものだ。

「実に親切で気持のいい人ですねえ。」と、チチコフはつづけた。「それに何という器用な人でしょう！ まったく私には思いもよらなかつたことですが、あの方は御自分で実に上手にいろんな紹ろさし刺せいをされるんですからねえ！ お手製の財布を見せて貰いましたがね、あんなに巧く刺ぬい繡いの出来る人は、御婦人がたにも滅多にありませんよ。」

「それから副知事も、なかなか好い人じゃありませんか？」と、マニーロフはまたしても眼をちよつと瞬いて、言った。

「いや、実に立派な方です。」と、チチコフが答えた。

「それじゃあ、あの警察部長をどうお思いになりますか？ まったく気持のいい人間じゃありませんか？」

「非常に気持のいい人です、それに実に利口で、博学な方です！ 私はあの人のところで、検事や裁判所長といつしよに、三番さんばんどり鶏どりの鳴く頃までヴィストをやりましたよ。実に、実に立派な人です！」

「では、あの警察部長の奥さんを、どう御覧になりました？」と、マニーロフが口をはさ

んだ。「ほんとお優しい方でございましょう？」

「ああ、あれは私の知っているかぎりの、最も立派な御婦人の一人ですよ。」と、チチコフが答えた。

それに次いで、裁判所長や郵便局長が話題にのぼった。こんな具合に、市の役人は殆んど一人残らず品定めをされたが、結局どれもこれも皆この上もなく立派な人物ばかりだということになった。

「あなた方は始終、村でお暮らしになっていらつしやるのですか？」と、やっと今度はチチコフの方から質問した。

「主に村にいますがね、」と、マニーロフが答えた。「でも、時には教育のある人たちに逢うために市へも出かけますよ。いつも井の中に閉じこもってでは、野暮くさくなりま  
すからね。」

「いかにも御尤もで。」とチチコフが肯いた。

「それあ尤も、」と、マニーロフは言葉をついで、「近所に好い友達でもあって、例えば、何かこう、世辞愛想や立派な応対ぶりの話をしたり、精神を目覚めような学問の話などの出来る相手でもあれば、また格別ですがね。それこそ、いわば天へも昇る心持になつ

て……。」「ここで彼は何かまだ言いたそうであつたが、少し法螺ほらを吹きすぎたのに気がついて、ただ宙に手を一つ振つただけで、こう言葉をつづけた。「そうなれば、無論、田舎の侘住わびずまいも、これでなかなか面白いものでしょうがね。ところが、そんな話し相手が頓とないのです……。で、時々\*1『祖国の子』を読むぐらいが関の山ですよ。」

成程、静かな田舎にひっこんで、自然の風物を楽しみに、時々なにか本でも繙ひもとく……といった生活ほど愉快なものは決してあるものでないと、チチコフは、すっかりそれに賛同した。

「だが、しかしです、」と、マニーロフが言い足した。「共に興きよう懷かいを分つような友人がなかつたとしたら……。」

「いや、まったくです、まさに仰つしやるとおりです！」と、チチコフが口を挟しろうがむ。「銀も黄金も玉も何かせんです！　金を持つより、善き友を持って　と或る賢人も訓おしえていますからね。」

「そうですよ、パーウエル・イワーノヴィツチ、」と、マニーロフはその顔に、ただ甘つたるいというだけではなく、世故にたけた如才ない医者いしやが甘くさえしてやれば患者が悦ぶと思つて矢鱈に甘味をつける水薬同様、しつこいと言つてもいいほどの表情を浮かべて言

うのだ。「いい友達に対すると、なにかこう、一種、精神的な喜びを感じますからねえ……。例えば現に今、凶らずもこうして、あなたとお話をしながら愉快的な御意見を拝聴してありますと、まったく世にも稀な、模範的といつてもいいような幸福を覚えますからねえ……。」

「とんでもない、愉快的意見だなどと仰つしやられては恐縮です……私はまったく詰らない、これつきりの人間ですからね。」と、チチコフが答えた。

「いや、どうしてどうして、パーウエル・イワーノヴィツチ！ 腹蔵なく言わせて頂けば、私はあなたが具そなえておいでになる値打ねうちの、せめて何割かを身につけることが出来るなら、この身代の半分くらい、悦んで投げ出しますよ……。」

「ところがその反対で、私の方ではまた、あなたこそ、この上もなくお偉い……。」

ここへもし召使が入って来て、食事の用意が出来たことを知らせなかったなら、この二人の友の心の丈の浴びせ合いが一体どう梟けりがついたかは、誰にもちよつと見当がつくまい。「それでは、どうぞ。」と、マニーロフが立ち上った。

「どうかまあ、とてもとても豪華なお邸や都で出るような料理はございませんけれど、それは幾重にもお許しを願つて、ほんの粗末なロシア式の玉菜汁シチイだけですが、まあ、心のこ

もっているのが取柄とりえでしてね。さあ、どうぞ。」

そこでまた二人は、どちらが先さきに食堂へ入るかということ、暫らく言い争っていたが、とうとうチチコフが横よこむき向になつて入つて行つた。

食堂にはもう、二人の男の子が待つていた。マニーロフの子供で、どちらも食卓つちに列つらなことは許されても、まだ高い子供椅子に掛けさせられるといった年頃だ。それに付き添つていた家庭教師は、にっこり微笑を含んで恭しくお辞儀をした。主婦が受持うけもちのスープ鉢の前に坐り、客が主人と主婦との間に坐らされると、召使が子供たちの頸にナプキンを捲まきつけた。

「実に可愛らしいお子さんたちですね！」と、チチコフが子供をちらと眺めて言った。

「お幾つですか？」

「上のが八つで、下のはやつと昨日、六つになりましたの。」と、マニーロフが答えた。

「フェミストクリュス！」と、マニーロフが、召使の捲まきつけたナプキンが顎に引つかかっているのを一心はに外はずそうとしている上の子に向つて声をかけた。チチコフは、マニーロフがどういふ訳かユスなどという語尾をつけて呼んだ、そのギリシヤ人くさい名前を耳にすると、ちよつと吃驚びっくりして眉を釣りあげた。が、直ぐにまた急いでいつもの顔にかえ

った。

「フェミストクリュス、さあ言つて御覧、フランスで一番いい市まちはどこだっけね？」

これを聞くと家庭教師は、全身の注意をフェミストクリュスに集注して、今にも真向まっこうから跳りかからんばかりの氣勢を示したが、フェミストクリュスが『パリ』と答えたので、やつと安心して、首を頷けた。

「それじゃあ、このロシアで一番いい市まちは？」と、マニーロフがまた訊いた。

家庭教師は又しても全身を緊張させた。

「ペテルブルグ。」と、フェミストクリュスが答えた。

「それから、もう一つは？」

「モスクワ。」と、フェミストクリュスが答えた。

「いや、お利口お利口！」と、それに対してチチコフが言った。「それにしても、まあどうです……」とここで彼は、さも驚いたような顔をマニーロフ夫妻に向けて続けた。「こんなお年で、よくそんな智慧がおりなんですねえ。いや、まったく、このお子さんは屹き度つと、素晴らしいものにおなりですよ！」

「いや、まだまだあなたはこいつのことをよく御存じないんですよ！」と、マニーロフが

答えた。「こいつは、なかなか頓智のいいやつでしてね。その小さい方のアルキッドは、あまり敏はしつこくありませんがね。こいつとききたら、何かもう、甲かぶとむし虫むしか黄金虫こがねむしでも見つけようものなら、忽たちまち眼玉をキョロキョロさせましてね、直ぐにそれを追かけまわして、もう夢中になつてしまふんですよ。こいつは一つ外交官にしてやろうと思つてますんで。

フェミストクリュス！」と、彼はまた上の子の方へ向つて、語をついだ。「どうだ、大使になりたかないかい？」

「なりたい。」そう、フェミストクリュスは、麵パン麩むしをむしやむしややりながら、首を左右に揺ゆぶつて答えた。

丁度ちやうどその時、後ろに立つていた召使が、未来の大使の鼻を急いで拭いた、拭いてくれたからよかつたが、でなかつたら、とんだものが一ひとしずく雫しずく、スープの中へ落ちるところであつた。食卓では平穩な生活の喜びについて談話が進められていたが、時々それを遮さえぎつて、主婦が市の劇場や俳優の話を持ち出した。家庭教師は、頻しきりに話し合っている人達の顔に注意を払いながら、彼等が笑いそうだなと思うと、逸い早く自分も口をあいて、骨身おしまず一緒に笑つたものだ。よほどこの男は、恩義に感じ易い人間だと見えて、そんな風にしてまで主人の知遇に報いようとしているらしかった。それでも一度だけ彼は険しい顔をし

て、自分と相向あひむかいに坐っている子供たちを屹きつと睨みながら食卓を厳しく叩いた。それはまったく機宜きぎに適した処置であつた。というのは、フェミストクリユスがアルキツドの耳に咬みついたため、アルキツドが眼をくしゃくしゃにして、口をあけて、さも情けなさそうな様子で、今にもわつと泣き出しそうだったからだ。が、しかし泣き出せば屹度、折角の御馳走も取りあげられてしまうと思つたので、口をもとのようにして、涙ながらに羊の骨をがりがりしやぶりはじめたが、骨が両方の頬つぺたにさわつてべたべたに脂だらけになつた。

主婦はもう、何度も何度もチチコフに向つて、『あなたは何にも召しあがつて下さらないじゃありませんか。ほんとに少しつきりしかお取り下さいませんで。』などと云つた。そのたんびに、チチコフはこう答えたものだ。『いや、大変御馳走さまでした。もう満いっば腹いなんです。愉快なお話が何よりの御馳走ですからね。』

一同はやがて食卓をはなれた。マニーロフは殊のほか満足らしく、お客の背中へ手をまわして、そのまま客間へ案内しようとしたが、その時、不意にお客がひどく意味深長な顔附をして、実は或る重要な問題についてちよつとお話ししたいことがあるのだが、と云い出したのである。

「それでは一つ、書齋の方へ御供おともいたしましょう。」そう言ってマニローフは、青々した森に向つて窓のついでにいるあまり大きくもない一室へと客を導いた。「これが私の隠れ家です。」と、マニローフが言った。

「気持の好いお部屋ですね。」とチチコフは、さつと辺りあたを見まわしてから言った。それはまったく、気持の悪い部屋ではなかった。壁は、ちよつと灰色がかつた空そらいろの塗料で塗つてあり、小椅子が四脚に、安樂椅子が一脚、それにテーブルが一脚あつて、その上には、先刻もちよつと述べたとおり、葉をはさんだままの書物と、何か書きちらした紙が数枚のついでいた。けれど、何より一番多く眼につくのは煙草であつた。それはいろんな風にして置いてあつて、紙袋へ入つたのもあれば、また剥きだしにテーブルの上に山と積まれたものもある。両方の窓の上には又、煙管から叩き出した灰の山が、さぞ苦心して並べたように、整然たる列をなして並んでいる。どうやら主人は時々ひまつぶしにこんなことをしているものらしい。

「どうか、こちらの安樂椅子にお掛け下さい。」と、マニローフが言った。「この方が少しはお楽ですから。」

「なに、私はこの小椅子に掛けさせて頂きましょう。」

「いや、どうかそう仰つしやらずに。」と、マニローフは微笑を浮かべながら言った。  
 「手前どもでは、この安楽椅子がお客様さま用ときめてありますのでな、否でも応でも、お掛けになつて下さらなきやなりませんよ。」

チチコフは腰をおろした。

「煙草を一服いかがですか。」

「いや、不調法ぶちょうほうでして。」と、チチコフは愛想よく、さも残念そうな面持で答えた。

「どうしてですか？」とマニローフも、やはり残念そうな顔をして、愛想よく訊ねた。

「飲みなれないものですから、怖こわいんですよ。なんでも、煙草を飲むと痩せると言うじやありませんか。」

「失礼ですが、そいつは偏見というものですよ、私にいわせると、寧ろ、煙管パイプたばこは嗅かぎ煙草などよりずっと身体に良いくらいですよ。私の連隊に中尉が一人おりましたね、これは実に立派な、また教養の高い男でしたが、この男ときたら、食事中ぐらいならまだしも、尾籠びろうな話ですがその、何処へ行つても、煙管を口から離したことがなかったものですよ。それが今ではもう四十を越していますがお蔭なことに、この上もなく達者でありますからねえ。」

チチコフは、成程そういうこともあり得ることで、この世には、どんな該博な知識をもつてしても説明のつかないようなことが間々見うけられるものだ、と言った。

「ところで、何はさて一つお願いがあるのですが……。」こう彼は、何か変な、もしくは殆んど変に聞こえるような調子の声で切り代したが、どうしたものか直ぐそれに次いで、ちらと後ろを振り返った。マニーロフも、やはりどういいうわけか後ろを振りむいた。「あなたは、もうよほど前に\*2戸口調査名簿をお出しになりましたので？」

「左様さ、もう随分になりますねえ、と言うより、殆んど憶えがなくないくらいですよ。」

「それ以来、余程あなたのところでは農奴が死にましたでしょうか？」

「さあ、ちよつと分りかねますが、それは一つ管理人に訊ねてみる必要があると思います。おうい、だれか！ 管理人を呼んでこい。今日はたしか来ているはずだから。」

やがて管理人が現われた。それは年のころ四十前後の、顎鬚をきれいに剃って、フロツクコートを着た、見たところ非常に気楽な生活を送っているらしい男であった。というのは、その顔がいやにぶくぶくと肥り、黄ばんだ皮膚の色と小さな二つの眼とは、彼が羽根蒲団や羽根枕の寝心地のよさを、知りすぎるほどよく知っていることを示していたからだ。また、普通お抱えの管理人がするだけの出世は、もうしてしまつたということが、一目で

それと領かれた——つまり、初め自家うちにいる間は、ただちよつと読み書きの出来る小倅に過ぎなかつたのが、やがてお邸の奥様お氣に入りの女中頭でアガーシユカとか何とかといふ女と夫婦いっしょになつて、自分は倉番になり、そのうち何時いつか管理人になつてしまつたのである。管理人になつてからは、いうまでもなく凡てすべの管理人と同じように振舞つて、村で小金でもためていそうな連中とは互いに交際ゆききをしたり、子供の名附親になつたりするが、貧乏人からは特定の小作料を勝手に増額してじゃんじゃん取りたてる。朝は八時すぎに眼をさまし、サモワールの沸くのを待つてお茶を飲むのである。

「ねえ、おい、この前に戸口名簿を出してから、うちの村では農奴ほどのくらい死んだだらうね？」

「さあ、どのくらいと仰つしやいますんで？ なんでもハア、あれから随分と死にましただよ。」こう言つた途端に吃しゃっくり逆さかが一つ出たので、管理人はまるで蓋でもするように、片手でちよつと口を塞いだ。

「うん、そうだろう、実は俺もそう思つてね。」と、マニローフは相槌を打つて、「まったく、よほど沢山死んでるね！」こう言つて、今度はチチコフの方へ向き直りながら、つけ加えた。「確かにかなり多勢、死んでおりますよ。」

「例えば、どのくらいの数で？」と、チチコフが訊ねた。

「そうだ、数はどのくらいだい？」と、マニーロフが質問を取り次いだ。

「さあ、数がどのくらいだと仰つしやいますんで？ 幾人死んだか、そいつあちよつくら分りかねますだよ。誰もそんなもの、勘定かんじょうしたことがありませんねえだから。」

「成程ね、」とマニーロフはまたチチコフの方へ向き直つて、「私も、死んでるにはかなり死んでると思いますが、果して幾人死んでるやら、それは皆目わかりませんねえ。」

「君、それを一つ調べてくれませんか。」と、チチコフが言った。「そして全部、名前を書きあげた詳しい表を作つてみて貰いたいんだが。」

「そうだ、一人のこらずだよ。」とマニーロフがつけたした。

管理人は、『かしこまりました！』と答えて、出て行つた。

「して、一体どういう理由わけで、そんなものが御入用なんです？」と、管理人の出て行つた後でマニーロフが訊ねた。

この質問がいささか客を当惑させたらしく、その面おもてには何かこう、緊張した表情が浮かび、それがために彼はちよつと顔を赧あからめたほどで、——どうも言葉では言いにくいことを口にしようとする時の緊張であつた。果せるかな、マニーロフが耳にしたのは、ついぞ

これまで人間の耳に囁かれたこともないような奇怪きわまる話であった。

「どういう理由わけでと仰おつしやるのですか？ その理由わけというのは、こうなんです。つまり、農奴を買いたいと思ひまして……。」「チチコフはそれだけ言つたまま、吃くつてしまつて、後がつづかなかつた。

「しかし、なんですか、」と、マニーロフが言つた。「一体どういう風にして買おうと仰おつしやるんで、つまり土地も一緒にですか、それとも、単に何処かへ移住させるといふ目的で、つまり土地とは別のお話なんですか？」

「いや、手前はその、あたりまえの農奴が欲しい訳ではないんでして。」と、チチコフは言つた。「実は死んだのが望みなんで……。」

「なんですつて？ いや御免ください……どうも私は耳が少し遠いもんですからね、何か奇態きたいなお言葉を耳にしたように思ひますが……。」「

「いや、手前が手に入れたと思ひますのは、死んだ農奴で、しかし戸口名簿の上では、まだ生きてることになつてゐるものこととして。」と、チチコフが言つた。

マニーロフはそれを聞くと、思わず長い羅宇らおにすぎた大煙管を床におとして、口をぽかんとあけたが、そのまま数分間のあいだは開あいた口もふさがらなかつた。あれほど親交の

悦びを論じあつた二人の友は、じつと向きあつたまま、ちょうど昔よく、どこの家でも鏡の両側に相向いにかけてあつた二枚の肖像画のように、互いに穴のあくほど相手の顔を見つめ合つていた。とうとうマニーロフは煙管をひろいあげて、下から相手の顔を見あげながら、この男は冗談を言つてるのではなかるうか、相手の口くちもと許に微笑の影でも浮かんでおりはしないかと、それを発見しようと骨折つたが、それらしいところは微塵もなく、それどころか反対に相手の顔はいつもより真面目に見えるくらいであつた。それから今度は、もしやこの客はどうかして不意に気でも違つたのではないかと思つて、こわごわその顔をじつと見まもつたが、相手の眼はしかし飽くまで澄みきつたもので、狂人の眼の中にちらつく、あの異様な、落着きのない閃めきなどは露ほどもなく、どこからどこまでもきちんとして、少しも乱れたところがなかつた。一体どうしたらいいのか、何と言つたものかと、幾ら考えてもマニーロフは、ただ残りの煙を口から糸のように細く吐き出すより他はなかつた。

「で私に、そういう実際には生きていけないけれど、法律的にはまだ生きておることになつている農奴を、売却とか、譲渡とか、それとも何か、これがいいとお考えになる形式で、一つお譲りねがえないかと思うのですが、如何いかがでしよう？」

マニローフはしかし、すっかり狼狽して、当惑のあまり、ただ相手の顔をきよときよと見つめるばかりであった。

「何か、ひどく御迷惑のようですね？」と、チチコフが言った。

「手前が？……いいえ、そうじゃありませんよ。」と、マニローフは弁解した。「ただ、どうもよく肚へ入らないのです……いや御免なさい……手前は無論、いわばあなたの一挙一動に現われているような、そういう立派な教育はうけておりませんものですから、どうもそういう高尚な言いまわし方が頓と出来ませんので……恐らくそれには……つまり、今あなたの仰っしゃったお話には……何か裏があるのでしよう……屹度あなたは言葉づかいを美しくするために、そんな風に仰っしゃったのでしよう？」

「いいえ、」と、チチコフは直ぐに応酬した。「そうじゃありませんよ。手前は全くありのままを申しあげているのです、つまり、ほんとに死んだ農奴のことを申しあげているのですよ。」

マニローフは全く当惑してしまった。彼は何か言わなければならぬ、何か訊かなければならないとは思ったが、いったい何を訊いたものやら、さっぱり見当もつかなかった。とどのつまり彼はまた煙を吐きだただけであったが、今度は口からではなく鼻の孔から

であつた。

「で、もしお差支えがなかったら、さつそく売買登記の手続きをして頂きたいのですが。」と、チチコフが言つた。

「え、死んだ農奴の売買登記ですつて?」

「いえ、そうじゃありませんよ!」とチチコフが言つた。「証書面には、ちゃんと戸口調査簿に載つているとおり、生きていることにして置くのです。手前は何事でも民法に背くようなことはしない習慣でしてね。尤も<sup>もつと</sup>そのために勤務中にもずいぶん辛い思いをいたしました、いや御免なさい、手前にとって義務は神聖で、法律——いや法律の前では手も足も出ませんよ。」

この最後の一句はマニーロフの氣にいったけれど、肝腎の話の意味は、やはりどうしても<sup>のみこ</sup>理解めなかつた。そこで彼は、返事をする代りに、精いっぱい煙管を吸いにかかつた、それがためにしまいには煙管が笛のように唸り声を立てた位であつた。まるで彼は、このような前代未聞の話に就<sup>つ</sup>いての何らかの意見を、その煙管から吸い出そうとでもしたものらしいが、徒ら<sup>いたらず</sup>に雁首が唸るだけであつた。

「あなたはひよつと、何か胡乱<sup>うろうん</sup>だと思ひになつてゐるのじゃありませんか?」

「おや、飛んでもない、決して決して！ 私は別段そういう風なことを、つまり、あなたのことをとやかくと批評がましく申す筋合すじあいは更さらさら々ないのです。しかし、そう言つては何ですが、この計画といえますか、それとも、取引といった方が当っているかもしれないが——つまり、その取引が、民法の規定に抵触し、ひいては将来のロシアの方針と両立しないようなことになりはしないかと思うんですがね？」

ここでマニローフは、首で妙な素振りをしてから、顔の隅々から、きつと結んだ唇にまで、恐ろしく深刻な表情を浮かべ、ひどく意味ありげにチチコフの顔を見つめたが、恐らくこんな表情はよほど賢い大臣かなんかが、それも極めて解決の困難な問題にでもぶつかった折に面へ現わす以外には、ちよつと人間の顔には見られないものであつた。

しかしチチコフは事もなげに、こういう風な計画、もしくは取引は、決して民法の規定に抵触したり、将来のロシアの方針と矛盾するものではないと断言して、それからちよつと間をおいて、国庫は正当な租税を徴収することが出来るから、却かえつて利益を得るくらいだと言ひ足した。

「あなたはそうお考えになるのですねえ？……」

「手前は善いことだと思ひますよ。」

「それが善いことだとすれば、話は別です。私は何もかれこれ言うことはありませんよ。」  
マニーロフはそう言つて、すっかり安心してしまつた。

「そうすれば、あとはもう値段を取りきめるだけですわね……。」

「何が値段です？」マニーロフはまたそう言つて、ちよつと言葉を跡切らした。「あなたは、そんな、孰れにしてもこの世にいない農奴に対して私が代金などを取るとお思ひになるんですか？ あなたがたとえそんな、いわば突飛なことをお考えになるにしても、私は無償でそんなものは差しあげますよ。それに登記だつて、費用はこちらで持ちますよ。」

ここでもしも、こうしたマニーロフの言葉を聞いて、客が異常な満足の情に駆られたことを書きもらしたなら、この事件の記述者はどんな非難を蒙つても仕方があるまい。チチコフが如何に沈着で思慮深い人間であつたにしても、流石にこの時ばかりは、今にも山羊のようにピョンピョン跳ねあがりそうであつた。これは誰でも知っているとおり、歓喜の絶頂に於いてのみ起こる現象である。彼が安楽椅子の上で無闇に軀をねじまわしたものだから、座褥の表の毛織の布が引き裂けたほどであつた。マニーロフの方も、すこし飽氣にとられた形で相手の顔を眺めていた。感謝の念に駆られたお客が、その場でお礼の百万遍をならべたてたので、主人はいよいよ面喰らつて顔を真赤にしてしまい、しきりに頭

をふつて否定の意を示し、しまいには、そんなことは全く何でもありません、私はすっかりあなたに惹きつけられてしまったから、どうかして、その心持を現わしたいと思つたまでであるが、しかし、どちらにしても既に死んでしまっている農奴などはまったく塵芥も同様ですからね、とまで言つた。

「なんのなんの、決して塵芥どころじゃありませんよ。」と、チチコフは相手の手を握りしめながら言つた。

ここで彼は非常に深い吐息をついた。どうやら彼は心情の吐露に駆りたてられたらしく、思いいれたつぷりに、とうとうこんなことを言いだした。『いや、その一見塵芥のようなもので、この親戚も身寄りもない人間がどんなに助かるか、それがあなたに分つて頂かれましたらなあ！ まったく私は実にいろいろな目にあつて来たのですよ。まるで荒波に揉まれる小舟みたいなものでした……。ああ、どんなに私が圧制や迫害を忍んで来たことでしょうか、どんな苦杯を嘗<sup>な</sup>めて来たでしょう！ それも何のためでしょう？ みんな、私が正義を守つたからです、良心に恥じたくなかつたからです、よるべない寡婦や哀れな孤児に手を貸そうとしたからなのです！……』ここで彼はハンカチをだして、あふれ落ちる涙を押えたほどであつた。

マニーロフはすっかり感動してしまった。二人の友は暫しのあいだ互いに手と手を取りあつて無言のまま、涙ぐんだ互いの眼にじつと見ittaたものである。マニーロフは我等の主人公の手を金輪際はなすまいとして、熱心に握りつづけていたので、こちらはどうしてもそれを振りほどいたらいのか、さっぱり分らなかつた位だ。それでも、ようやくのことに、その手をそつと引つこめると、彼は売買登記は一刻も早く済ました方がいいから、もしマニーロフが自身で市へ出かけてくれれば、なお結構であると言つた。つづいて、帽子をとつて、暇を告げにかかつた。

「ええ？ もうお帰りになるんですつて？」マニーロフは急に我れに返ると、殆んどびつくりしたように訊ねた。

ちやうどその時、マニーロフ夫人が書齋へ入つて来た。

「リザーニカ、」と、マニーロフが聊か悲しそうな顔つきをしながら、「パーウエル・イワーノヴィツチは、もうお帰りになるんだとさ！」

「屹度パーウエル・イワーノヴィツチには、あたしたちではお退屈なんでございましょうよ。」と、マニーロフが答えた。

「奥さん！ ここに、」と、チチコフが言つた。「そら、ここにですよ。」そう言いなが

ら、彼は片手を心臓の上にあてて、「そうです、ここに、私があなた方と御一緒に過ごした楽しい想い出がずっと、いつまでも残ります！　どうか信じて下さい、あなた方と御一緒に、たとえ同じ家ではなくても、せめて最寄りのお隣り同士としてでも住むことが出来ましたなら、私にとつて、それ以上の幸福はありませんよ。」

「まったくねえ、パーウエル・イワーノヴィッチ、」と、相手の考えに有頂天になって、マニーロフが言った。「実際、そんな風に、御一緒に一つ屋根の下で暮らしたり、または楡の木の木蔭かなんかで、何かこう哲学上の議論でもしたり、瞑想に耽ることが出来たら、まったく素晴らしいでしょうにね！……」

「ああ、それこそもう、天国ですよ！」と、チチコフは吐息をついて、言った。「ではお暇いとまします、奥さん！」と、マニーロフの手に口を近づけながら続けた。「それから、私の最も尊敬している友よ、さようなら！　どうか、お願いした件をお忘れにならないようにね！」

「ああ、大丈夫ですとも！」と、マニーロフが答えた。「私は二日以上あなただを放ほうつてはおきませんよ。」

三人は食堂へ出た。

「さようなら、可愛い坊っちゃん方！」とチチコフは、鼻も手もなくなった木製の驃騎ひょうき兵へいを持って遊んでいたアルキッドとフェミストクリュスを見つけて、言った。「さようなら、坊っちゃん方。今度は、何もお土産を持って来なくて御免なさい。だって小父おじさんは、ほんとうを言うとおなた方のいらっしやることは知らなかったのだからね。でも、この次ぎ来る時には屹度もって来ますよ。あなたには、サーベルを持ってこようね。サーベル要いらない？」

「欲しいや。」と、フェミストクリュスが答えた。

「そして、あなたには太鼓をね。太鼓がいいでしょう？」と、チチコフはアルキッドの方へ身を屈かがめて、言葉をついだ。

「ちやいこ。」とアルキッドは、首を垂れて囁やくように答えた。

「よろしい、じゃ、太鼓を持って来ましょうね。とても素敵な太鼓をね！　こんな風に、叩くといつも、トゥルルツル……ルツ……トウラタツタ……タツタツタツって鳴るやつをね。さようなら、坊っちゃん！　さようなら！」こう言うと、彼はアルキッドの頭に接吻して、マニーフと細君の方へ顔を向けてちよつと笑ったが、それは普通、子供の両親に向って、まったく子供の望みつて罪のないものですねと言うかわりにする笑顔であった。

「これあ、少しお待ちになった方がいいですよ、パーウエル・イワーノヴィッチ！」と、一同がもうポーチへ出た時、マニーロフが言った。「御覧なさい、あんな雲が出て来ましたよ。」

「いや、あれしきの雲は大したことありませんよ。」とチチコフが答えた。

「ときに、ソバケーヴィツチのところへいらっしやる道は御存じですか？」

「あ、それをお訊ねしようと思つていたところです。」

「じゃあ、さつそく、お宅の馭者に話しておきましょう。」そう言つてマニーロフは、馭者にその道順を話したが、それがやはり実に丁寧な言葉で、一度などは馭者に向つて『あなた』などと言つたものだ。

馭者は、曲り角を二つ通り越して、三つ目で横へ折れるのだと教えられて、『はい、氣いっけますだ、旦那様。』と言つた。そこでチチコフは出かけたが、それを見送つてこの家の主人たちはいつまでもお辞儀をしたり、爪先だちになつて、ハンカチを振つたりしていた。

マニーロフは長いことポーチに突つ立つたまま、だんだん遠ざかつてゆく半蓋馬車ブリーチカを見送つていた。それがもうすっかり見えなくなつてからも、彼はやはり煙管をスパスパやり

ながら立っていた。それでもとうとうしまいに部屋の中へ入ると、椅子に腰をおろして、いささかでも客に満足を与えたことを心で喜びながら、いろいろと物思いに耽った。やがて彼の想いは、いつの間にやら他の問題に移って、しまいには飛んでもないところへ落ちて行つた。彼は友情生活の幸福を思い、何処か河のほとりで友人と共に住んだらどんなに好いだろうと考え、ついには、その河に橋をかけ、モスクワまでも見えるような高い高い望楼ぼうろうのついた宏こうそう壮な邸宅を構え、そこで毎晩、爽すがすが々がしい外気を浴びながらお茶を飲んだり、何か愉快な問題について論じあう、それからまた、チチコフと一緒に立派な箱馬車に乗って何かの会合へ出かけてゆき、気持の好い応対たいぶりで一同をすっかり俘虜とりこにしてしまう、やがて、彼等のそうした細やかな友情が叡えい聞ぶんに達して、二人は勅任官の位を授けられるといった塩梅に、それからそれへと空想の糸が伸びて、ついには自分でも何が何やらさっぱり訳が分からなくなってしまう。が、チチコフの例の奇怪な頼みごとが不意に彼の空想を破つた。それは幾ら考えても、どうもよく肚へ入らなかつた。ああではないか、こうではないかと、いくら頭の中で考えてみても、さっぱり合点がてんがゆかず、しようことなしに彼は煙草ばかりプカプカ喫ふかしながら、夕飯までずっとそこに坐りこんでいた。

\* 1 祖国の子 一八一二年より満四十年間にわたり、ペテルブルクで発行されていた

文学・政治・歴史の総合雑誌。

\*2

戸口調査名簿 ピョートル大帝によって一七二二年に創始され、一八六〇年までに十回にわたって行われた一種の国税調査に、その都度地主から政府に提出した農奴数の届書とどけしよをいう。

## 第三章

一方チチコフは、もう大分まえに本街道へ出て、駈けてゆく半蓋馬車ブリーチカの中で、すっかり好い気持ちになっていた。彼の嗜好と性癖の主なる対象が何であるかは既に前章ではつきり分つている。従つて彼が忽ちたちまそれに身も魂も打ち込んでしまつていたからとて、少しも不思議ではない。その顔附から見て、彼の予測や見積りや思案は、どうやら上々の首尾であつたらしい、それというのも一々その思いが絶えず満足するような北叟笑ほくそえみの跡を残してゆくからである。こんな風に彼は物思いに耽つていたので、マニローフ家の召使連の接待もてなしにすっかり好い御機嫌になつていた馭者が、右側に繋がれた連銭葦毛れんせんあしげの測馬わきうまに、なかなか穿うがつた小言を浴びせていることにも、いっこう気がつかかなかつた。栗毛の轆馬なかうまや、何でもさる議員から手に入れたというので『議員』と呼ばれているもう一頭の測馬が眼にさも得意そうな色さえ浮かべて一生懸命に力を入れていたのに、連銭栗毛はとても狡いやつで、いかにも曳いているような恰好をしているだけであつた。『ずるける、ずるける！手前がずるをすれば、そら、おれもこうして仕返しをしてやるぞ！』セリファンはこう叫

びながら半身をおこして、その怠け者にピシリと一ひとむち鞭くらわせた。『自分の務めちうも  
 のを忘れるでねえだぞ、このひよろく玉め！ 栗毛を見な——奴あ見上げた馬で、ちや  
 んと自分の務めを果しているだ。そいでおらの方でも、奴にやあ一ひとます榭はがとこ余計に麦を  
 呉くれてやらあな、だつて見上げた馬やつだもの。議員の奴もどうして、感心な馬だ……。こら、  
 こら！ なんだつて耳を振りやあがるだ？ この馬鹿者め、おらが言うことをよく聴きく  
 されえ！ 手前みてえな田吾作野郎にや悪いこたあ教えねえだ。ちよつ、何処はへ匍はい出  
 やあがるだ！』ここで彼は又もやピシリと一鞭喰らわせて、こう言い足した。『えい、こ  
 の野蛮人め！ 忌いまい々ましいボナパルトめ！』それから今度は、三頭全体に向つて、『えい、  
 この野郎ども！』と呶鳴つて、それぞれ同じように鞭をくれたが、それはもはや罰として  
 ではなく、どれにも自分が満足していることを示すためであつた。こういう褒美ほうびを与えて  
 おいて、彼はまたしても連錢葦毛に向つてしゃべつた。『手前は自分のやつたことを誤魔  
 化せると思つてるちうのか。いんにや、お主ぬしも褒めてもらいてえと思うだら真ま実じつな生き  
 方をせにや駄目だぞ。おいらが今寄つてきた地主さまの家の衆は、みんな立派な衆ばかり  
 だつたでねえか。立派な衆とだら、おら喜んで話もするだしよ、立派な衆とだら、いつで  
 も友達になるだ、心安い仲間同士にもなるだ。おら、立派な衆とだら、すすんで一緒にお

茶を飲んだり、物を食ったりするだ。立派な人間はな、みんなが敬まってくれらるだよ。家の旦那さまだつてそうでねえか、みんながああ奉<sup>たてまつ</sup>るちうのものな、ええか、あれは旦那さまが国家<sup>くに</sup>のお役をちゃんと勤めあげさつした奏任<sup>そうにん</sup>官<sup>かん</sup>さまだからだぞ……。」

セリファンはこんな風に理窟をこねながら、しまいには途方もなく脱線したことを呟やいていた。で、もしもチチコフが耳を澄ましていたならば、いろいろ彼自身の内輪のことをこまごまと聴かされたことだろう。が、彼は彼で自分の考えごとに夢中になつていたので、激しい雷鳴が一つガラガラつと来た時、初めて我れに返つて、ようやく<sup>あた</sup>辺りを見まわした程である。見れば空一面に、すっかり叢<sup>むらくも</sup>雲がたちこめて、埃っぽい駅路は大粒の雨滴に叩かれていた。ところが、雷鳴がもう一つ、前のよりも激しく間近で鳴りはためくと共に、雨は急に、桶でもひっくりかえしたようにぎつとばかり降り出した。初め横なぐりに来た雨<sup>あま</sup>脚<sup>あし</sup>は、半蓋馬車の車体の片側を打つかと思つたと次ぎには反対側にまわり、それから今度は上から真直ぐに降りつけて、真面<sup>まおも</sup>に馬車の上をざんざん叩いて、ついには飛沫<sup>しぶき</sup>がチチコフの顔にまではねかかった。で、仕方なしに彼は、革の前蔽いをおろしたが、それには沿道の景色を眺めるための小さい丸窓が二つ開<sup>あ</sup>いていた。それを下ろしながら彼はセリファンに向つて、もつと疾<sup>はや</sup>くやれと呶鳴つた。おしやべりの途中で腰を折られたセリ

ファンも、同じように成程これはぐずぐずしている場合でない気がついて、さつそく馭者台の下から何やら灰色の羅紗の襪はくろをひっぱりだして袖をとおし、しっかり手綱つかを掴むなり、彼のお説教を聞きながら好い気持ちに疲れてよたよたと脚を運んでいた三頭立だての馬を、呶鳴りつけた。ところがセリファンは、いったい曲り角を二つ通り過ぎたのか三つ通り過ぎたのか、さっぱり憶えがなかった。頭をひねってやっと少しばかり途中のことを思い出して見ると、どうもうつかり通り過ぎてしまった曲り角が、ずいぶん沢山あつたような気もする。露助という奴は、いざという時になると、お先きまっくらに何でもさつさとやつつけてしまうものだが、セリファンも次ぎの四つ角へ来ると、いきなり右へ曲つて、『えい、野郎ども、しつかり頼むぜ！』こう叫ぶなり、その道を行けば一体どこへ出るのやら、そんなことはてんで考えもしないで、どんどん馬を駈けさせてしまったのである。

だが、雨はなかなか止みそうにもない。道にたまっている土埃は見る見る泥濘ぬいじに変わって、馬どもには馬車を曳くのが刻一刻と難儀になって来る。チチコフには、こういつまでもソバケーヴィツチの村の見えないのが、そろそろ心配になりだした。彼の心づもりでは、もうとつくに着いている頃でなければならなかった。辺りあたを見まわしてみたが、もう真暗で、一寸先きも見えないくらいである。

「セリフアン！」と、彼はとうとう馬車から半身を乗りだして声をかけた。

「何ですかね、旦那？」とセリフアンが答えた。

「ちよつと見てみな、その辺へんに村は見えないかい？」

「村なんて、旦那、からつきし見えましねえだよ！」そう言った後でセリフアンは、鞭を振りながら、歌とも何とも見当のつかぬ、何処までいってもきりのないような、ひどく長つたらしいものを唄いだした。その中には、ロシアの津々浦々、到るところで、馬を励ましたり、急ぎ立てたりする時に浴びせる、いろんな掛声かけごゑだの、滅多矢鱈めつたやたらな、あらゆる罵ののしりり声こゑだのが取り入れてあつた。彼はそんな具合にして、しまいには馬を『秘書官』などと呼んだりした。

そうこうするうちにチチコフは、馬車が前後左右に揺れて、自分の軀からだがあちこちにひどくぶつかるのに気がついた。どうもこれは馬車が道を外はずれて、すっかり耕やされた畠の中へ乗りこんだらしいと感づいた。どうやらセリフアンも、それと気がついたらしいが、一向そんなことは口に出さなかつた。

「こら、馬鹿野郎、貴様はいったい何処をほつつきまわってるんだ？」と、チチコフが言った。

「だちうて、旦那、どうもしようがありませんねえだよ、なにせこねえな時刻で、鞭の先も見えねえような真暗闇じゃあね！」彼がそう言った途端に、馬車がひどく傾いたので、チコフは思わず両手で箱に取りすがった。この時はじめて彼は、セリファンが酔っぱらっていることに気がついた。

「えい、支えないか、支えないか、ひっくりかえってしまうじゃないか！」と彼はセリファンに向つて呶鳴りつけた。

「なんの、旦那、ひっくりけえしたりなんぞしませんよ。」とセリファンが言った。「ひっくりけえすなんて、よくねえこんで、それあわつしもよく知つてまさあね。金輪際ひっくりけえしたりなぞしましねえだよ。」そう言つてから、彼は少しずつ馬車の方向むきを変えはじめたが、あちらこちらへ向け直している中に、とうとう馬車が横倒しにひっくりかえつてしまった。チコフはいきなり泥濘の中へ四つん這いになつてつんのめつた。セリファンはそれでも直ぐに馬をとめた。尤も馬の方もへとへとなつていたのでだから、とめなくても自然に立ちどまつたことだろう。この思いもかけぬ出来事にセリファンはすっかり仰天してしまつた。彼は馭者台から降りるなり両手を腰につがえたまま、ぼんやり馬車の前に突立つていた。その間じゆう主人は、泥濘の中をのたうちまわつて、そこから這いだ

そうとして一生懸命になつてもがいていたが、しばらく考えてから、『ちよつ、ほんとうにひっくりかえりやあがつたな!』と呟やいた。

「貴様は、靴直しみたいに酔っぱらつてゐるんだな!」と、チチコフが言った。

「なんの、旦那、どうしてわつしが酔っぱらつてなどゐるもんですかい! 喰らい酔うなんて、よくねえこんだちうことは、ちゃんと心得てまさあね。ただ、友達とちよつとべえ世間話をしただけでね。なにせ立派な人間とだら話ぐれえしたつてええこんだし——そうしたところで別に悪いことはねえだからね——それにちよつとべえ一緒に肴をつまんだだけで。肴をつまむちうことは何も恥かしいこんでねえだ、立派な人間とだら一緒に一口やるのも別に悪いことつてねえでがすからね。」

「この前、貴様が酔っぱらつた時、おれが何と言つた? あん? もう忘れたのか?」と、チチコフが言った。

「いんにえ、旦那様、どうしてそれを忘れてよいものですか? わつしはちゃんともう、自分の務めは弁わきまえていますだ。酔っぱらうのはよくねえこんだちうことは百も承知でさあね。ただ立派な人間と、ちよつとべえ世間話をしただけで、それも、つまりその……。」

「ようし、おれが貴様をうんとひよつぱたいて、立派な人間と話をする仕方を思い知らせて

くれるぞ！」

「どうなりと、それあ旦那のお心まかせでがすよ。」とセリファンは、すべてを観念して答えた。「ひつぱたくだら、ひつぱたいておくんなせえ、わつしにやあ何も文句はありましねえだ。それだけの理由わけがあるだら、ひつぱたいて悪い筈あねえでがしよう？ それあもう、旦那様のお心まかせのこんだからね。とかく百姓ちうものは増長し易いものだから、ピシピシひつぱたいてやんなくちやあなんねえでがすよ。ちやんと秩序しまりをつけておかにやなんねえだからね。それだけの理由わけがあるだら、どうぞひつぱたいておくんなせえ、どうしてひつぱたかねえだね？」

こういう屁理窟へりくつに何と答えたものやら、主人はまるで言葉を知らなかつた。けれど丁度その時運命の神が彼に憐みを垂れる気になつたらしく、遠くから犬の吠なき声こゑが聞こえて来たのだ。喜んだチチコフは、すぐに馬を駆り立てよと言いつけた。ロシアの馭者やうしやという奴は、眼がきかなくても感がいい。それで時には眼をつぶつたまま全速力で馬車を走らせても、必らず何処かへ辿り着くのである。で、セリファンはまるで盲ら滅法めつぽうに、村の方角へ一目散いちもくさんに馬を駈けさせたものだから、とうとう馬車の轆ながえが柵さくにぶつかつて、それ以上はもう一步も先へ進めなくなるまで、馬をとめることが出来なかつた位だ。チチコフは、篠し

突<sup>のつ</sup>く雨の濃いとぼりを透して、何か屋根に似たものをちらと認めることが出来た。そこでセリファンをやって門を探させたが、もしこれが門番がわりに猛犬ががんばっていて、思わず指で耳に栓をしなければならぬほどワンワンと人の来た時に吠えたてるロシアでなかつたなら、彼は屹度いい加減手間どつたに違いない。が、やがて一つの小窓から灯りがさして、ぼうつと烟<sup>けむ</sup>つたような光りが柵を照らして、我等の旅人に門の所在を示した。セリファンが門を敲<sup>たた</sup>きだすと、間もなく耳門<sup>くぐり</sup>があいて、上つ張りでも頭から被<sup>か</sup>つたらしい人の姿がにゅつと現われて、嗶<sup>しわ</sup>がれた女の声で『誰だね、門を敲<sup>たた</sup>いてるのは？ 何を騒いでるだね？』と言うのを主従は耳にした。

「旅のものだよ、小母<sup>おば</sup>さん、一晚とめて貰<sup>もら</sup>いたいでね。」と、チチコフが声をかけた。

「ちよつ、なんたら遠慮のないお人だね、」と老婆が言った。「えらい時刻<sup>とき</sup>にやって来たものだて！ ここは宿屋じゃありませんねえで、女地主の邸<sup>やし</sup>だがね。」

「だって、しようがないじゃないか、小母さん？ 道に迷ってしまったのだよ。こんな晩にまさか野宿も出来ないからさ。」

「そうさね、暗さは暗し、お天気は悪いし。」と、セリファンが傍から口を出した。

「黙つとれ、馬鹿野郎！」とチチコフが叱<sup>のの</sup>つた。

「いったい、お前さんがたはどういうお方だね？」と、老婆が訊ねた。

「貴族だよ、小母さん。」

この 貴族 という言葉に、老婆も少し考え直したらしい。『ちよつとお待ちなせえまし、奥様に申しあげて見るだから。』そう言ったかと思うと、二分ばかりして今度は角燈を手にさげて戻つて来た。門が開かれた。そしてもう一つの窓にも灯りがついた。馬車は庭へ入つて、あまり大きくない家の前で停つたが、どんな家だか暗いのでよく分らなかつた。ただその一端が、窓から漏れる光りに照らし出されたのと、その家の前に、同じ光りがまともに射している水溜りのあるのが見えただけだ。雨は喧ましく板屋根を敲きながら、さざめく小川のように傍らの天水桶へ流れ落ちてゐる。その間、一方では犬どもがあらゆる声を振りしぼつて吠え立てていた。一匹のやつは首を天へ向けて、何かそれに対して給金でも貰つてゐるようにな一生懸命に、長く声を引き伸ばしながら吠えた。すると次ぎのが早速後をうけて、まるで寺男のように吠え出す。その間にまじつて、まだ仔犬らしい奴のせわしないソプラノが、これは郵便馬車の鈴のように甲高く響きわたる。最後にそのすべてを完成ととのえるように、どうやら老犬らしい奴のバスが、こいつは犬としてもよほど音量をたつぷり恵まれてゐるらしく、音楽会が最高潮に達したおりの、歌手のコントラバ

スみたいに凄まじい声を立てたものだ。テノールの奴らが出来ただけ高い調子を出そうものと、足を爪だてて懸命に声を張りあげ、また他のどの犬もこの犬も、みんな首を仰向けて咽喉を振りしぼっているのに、こいつ一匹だけは鬚ぼうぼうの顎を頸飾の中へすつこめて、しゃがんだまま、地面につきそうなくらい身を伏せて、そこから件の声を立てているのだが、その物凄い声には窓ガラスがビリビリと震える位だ。こういう音楽的な犬の吠声を聞いただけでも、この村が相当なものであることは予測に難くなかったが、びしよ濡れになって、寒さに凍えている我等の主人公は、ただもう寢床のことより他は何も考えなかつた。馬車がまだしつかり降り切るのも待たないで、入口の階段へ跳び降りた彼は、よろよろとして、もう少しでころぶところだった。ポーチへまた一人、前のよりは少し若いけれど、大変よく似た女があらわれた。その女が彼を部屋の中へ案内した。チチコフはチラと辺りを一瞥しただけであった。部屋には鳥か何かの絵が懸けてあり、古ぼけた縞の壁紙が張りめぐらされて、窓と窓の間には、木の葉でぐるりを捲いた形の黝んだ枠にはめた古風な小さい鏡が二つ三つ懸つていて、どの鏡の後ろにも、手紙だの、古い一組の骨牌札だの、靴下だのといったものが押しこんである。それから文字盤に花を描いた懸時計……それ以上は、もう欲にも得にも一々注意して見る元気がない。彼は誰かに蜂蜜でも眼

になすりつけられたように、瞼と瞼がくつきあうような気がした。暫らくすると女主人が入って来た。かなり老年の婦人で、急いで被つたらしい頭巾ずきんをつけて、頸くびにフランネルの布きれを捲まいでいた。それはよく凶作のおりだの、何か損害を受けた時に、直ぐ泣きだしただり、いつも不景気らしく首を少し傾かげている癖に、筆筒ひきだしの抽匣ひきだしにあちこち分まけて蔵しまつてある幾つもの縞の財布には、それぞれ少しずつ小金を貯めていたといったささやかな女地主の婆さんの一人だ。まずその財布の一つには一ルーブリ銀貨ばかりが貯められ、次ぎのには五十カペーカ銀貨ばかり、その次ぎのには二十五カペーカ銀貨ばかり貯めてあるのだが、他からちよつと見ただけでは、筆筒の中には、下着だの、寝巻だの、糸の玉だの、ほどこいた婦人外套だのの他には何も蔵しまつてないように見える。その婦人外套もお祭りにいろんな煎餅菓子を焼くおり、どうかして不断着ふだんぎを焼き切きつてしまいか、または自然にぼろぼろになつてしまつた暁には、いずれ着物に仕立てかえられるのである。けれど不断着が焼けこけもせず、自然にぼろぼろになりもしなければ、儉約家しんまっやの婆さんのことだから、外套はほどこいたままで何時いつまでも蔵しまつておくことだろう、そして、しまいには、遺言によつて、いろんな他のがらくたと一緒に、復また従いとこ姉妹の姪まあたりの手へ渡るのが落ちであろう。

チチコフは、思いもよらぬ御迷惑をかけて 申もうしわけ 訳わけないと陳謝した。『いいえ、構まいま

せんよ!』と、女主人が言った。『それでもまあ、飛とんだ晩においてになりましたもので! ひどい荒れと吹き降りじやございませんか……。こんな道中をなすつた後では、さぞ何か召しあがりたいたいことでしょうが、何分この時刻では支度も出来ませんのでね。』

この時、女主人の言葉を遮つて、不意にシャーという奇態な音がはじめたので、客はぎよつとした。それはまるで部屋じゆうを蛇はが匍はいまわっているような音であつた。けれど眼をあげて見て彼はほつとした。というのは、懸時計が今まさに鳴り出そうとしているのだと気がついたからである。その音が間もなく咽喉を鳴らすような音に代ると、やがてありつた力の力をこめて時計は二時を打つた。まるで、破れた瓶を棒で敲くような音であつた。後はまたチクタクと振子が落ちつき払つて左右に振りつづけた。

チチコフは女主人に礼を述べて、自分は何も欲しくはないから、どうか御心配くださるな、だが寢床さえ拝借できればいいことはないと言つた。それからただ念のために、自分は一体どこへ迷いこんでしまったのか、又ここからソバケーヴィツチという地主のところへはよほど道程があるだろうかと訊ねた。それに対して老婆は、ついぞそんな名前は聞いたこともないし、そんな地主は全然ないと答えた。

「が、少なくともマニーロフは御存じでしょう?」とチチコフが言った。

「そのマニローフさんて、どういう方で？」

「地主ですよ、奥さん。」

「さあ、一向きかない名前ですなあ、ここいらにそんな地主はありませんよ。」

「じゃあ、他にどんな地主がありますかね？」

「ボブロフだの、スウイニインだの、カナパチエフだの、ハルパキンだの、トレパキンだの、プレシヤコフだのという人達ですよ。」

「それはみんな、よつぼどの大地主なんですか？」

「いいえ、あなた、大して大地主というほどの人はいませんよ。せいぜい農奴の二十人か三十人も持っているのが関の山で、百人と持っている者はありやしませんよ。」

チチコフは、飛んでもない僻地<sup>へきち</sup>へ迷いこんだものだど気がついた。

「では、その、市まではよほど遠いんでしょうかねえ？」

「さあ、六十露里ぐらいのものですかね。それにしても、なんにも差しあげるものがなくてほんとにお気の毒ですよ！　せめて、あんたさん、お茶など召しあがりませんかね？」

「有難うございます、奥さん。ただもう、寢床の他には、なんにも要りませんので。」

「ほんとにねえ、こんなお天氣に道中をなすつた後じゃ、よくおやすみになるのが何より

肝腎ですからね。それじゃあ、あんたさん、この長椅子の上で横におなりなさいませ。これ、フェチニヤ、羽根蒲団と枕と敷布を持っておいで、ほんとに、何という悪い天気になったものでございましょうね、ひどい雷かみなり鳴さまで——妾わたしは一晩じゆう聖像みぞうにお燈とうみよう明をあげていたんですよ。あれまあお前さま、まるで野豚のように、背中から脇腹が泥だらけじゃありませんかね、何処でそんなにお汚しなすつたので？」

「お蔭で着物を汚しただけで済みましたが、危なく肋あばらほね骨を折ってしまうところでしたよ。」

「おやおや、それは飛んでもないことでしたねえ！ では、何かで背中をお拭きにならないくつてもようございますか？」

「いや、どうも。その御心配には及びませんよ。ですがお宅の女中さんに、この着物を乾かして泥を落しておいて頂きましょうかな。」

「分ったね、フェチニヤ！」と女主人は、さつき灯りを持ってポーチへ出てきた女の方を向いて言ったが、その女は早くもそこへ羽根蒲団を運びこんで、両脇をパタパタ敲きながら、部屋じゆうに濛もうもう々と和毛にこげをたちあがらせていた。「お前、この方の外套とお召物めしものをあちらへ持つて行ってね、先まず初めに、亡くなつた旦那様によくそうしてあげたように、

火で乾かしてから、刷毛をかけて、はたいておくんだよ。」

「かしこま畏りました、奥さま！」とフェチニヤは、羽根蒲団の上に敷布をかけ終ると、枕をそこにおきながら、言つた。

「さあ、お前さま、寢床の用意が出来ましたよ。」と女主人が言つた。「では御免蒙りますよ、ゆつくりお寝やすみなさいませ！ それから何か他に御用はありませんか？ ひよつとお前さま、寝しなに誰かに踵を揉ませる習慣くせがありなさるんじゃないやありませんかね？ 亡くなつた良人やどは、どうしないとどうしても寝つかれなかつたものですよ。」

しかし客は、踵を揉んで貰うことは断わつた。女主人が出て行くや否や、彼は急いで着物を脱ぎすてて、上着から下着にいたるまで、そつくり衣裳をフェチニヤの手に渡した。するとフェチニヤも、ではお寝みなさいませと言つて、びしょ濡れの衣裳をかかえながら出て行つた。一人になつた客は、さも満足げに、殆んど天井につかえそうなほど堆うずたかく盛りあがつた寢床を見やつた。この通りフェチニヤは、羽根蒲団を敲くことにかけての名人であつた。彼が椅子を足台にして、その寢床へ這いあがると、今度は軀からだが床にとどきそうなほど凹んで、その重みで縫目からはみだした和毛が、部屋の四方八方へ飛び散つた。灯りを消して、更紗さらさの懸蒲団を引つ被ると、蝦のように軀を曲げて、すぐさま寝入つてしま

つた。翌る朝、彼が眼を醒ましたのは、もうかなり遅かった。窓越しに太陽が彼の顔へ真ま面に照りつけ、昨夜は壁や天井にとまって静かに寝ていた蠅が今や彼に向つて総攻撃を開始していた。一匹は彼の唇にとまり、また一匹は耳にとまっていた。もう一匹のやつは、彼の眼にとまってやろうと隙を狙っていたが、ついうっかり鼻の孔の入口へとまったものだから、チチコフが夢うつつでそれを鼻の中へ吸いこんで、思わずひどい嚏くきめをした――それが原因となつて彼はようやく眼を醒ましたのであった。部屋を一ひとわた渡り見まわした彼は壁に懸つているのが鳥の絵ばかりではないことに気がついた。その中には、\*1クトウーゾフ將軍の肖像や、\*2パーウエル・ペトロヴィツチ時代の服によくある袖口を赤く刺繍した制服を著きている一人の老人の油絵が懸つていた。時計が又シャーンという音を立ててから十時を打った。丁度その時扉口からチラと女の顔が覗いたが、すぐに隠れてしまった。というのは、なるべく具合よく寝ようと思つてチチコフは、まるつきり素すつ裸はだかになつていたからである。その覗いた顔が彼にはどうも見覚えがあるように思われた。いったい誰だつたのだろうか、彼はとつおいつ考えた挙句、やつとこの家の女主人であることを想い出した。彼はシャツを著た。着物はもうちゃんと乾かして、きれいにしして、寢床の傍に置いてあつた。着物をきおわると鏡に近づいて、彼はもう一度そこで嚏くきめをしたが、その

音があまり大きかったので、丁度その時、窓の下へ寄つて来た七面鳥がだしぬけに、その奇態な自分の言葉でもつて、何か恐ろしく早口にチチコフに囁やいた——尤もその窓は地面とすれすれなくらい低かつたのだが——どうやらそれは『やあ、御機嫌さん』と挨拶をしたものらしい。それに対してチチコフは馬鹿野郎と呶鳴った。窓際へ近よつて、彼は目の前の景色を眺めはじめた。窓から見おろしたところは、さながら鶏舎とりごやの観かんがあつた。少なくとも、その窓の下の狭い庭はあらゆる家禽かきんや家畜で一杯になつていた。七面鳥や牝鶏が数えきれないほどいた。その間を一羽の牡鶏が、鶏冠とさかを振り振り、まるで聴耳でも立てるように時々首を横へ向けながら規則ただししい足どりで歩きまわつていた。そこには家族づれの牝豚も一匹いたが、その牝豚は塵芥ごみの山をほじくり返ししながら、序ついででに雛ひなつこを一羽食つてしまった。そして奴さんやつこ、そんなことには一向頓着なく、あとはガツガツと西瓜の皮を食いつづけていた。この鶏舎といつてもいいくらいの小さな庭は板塀で区切つてあつて、板塀の向うには、甘藍キャベツや、葱や、馬鈴薯や、甜菜てんさいや、その他いろんな自家用の野菜のつくつてある広々とした菜園がつづいていた。その菜園には処々に林檎その他の果樹が植えてあつて、それには鶺鴒かささぎや雀を防ぐための網がかぶせてあるが、殊に雀は、雲でも垂れさがつて来るような大群をなして、あちらこちらへ渡り移つていた。雀の群をおどす

ために、長い竿のさきに両手をひろげた案山子が、何本もたてられていた。その中の一つには、この家の女主人の古い頭巾がかぶせてあった。菜園の向うにはずっと、てんでんばらばらに百姓家が建ちならんでおり、きちんとした家並にはなっていなかったけれど、チコフの観察したところでは、それらは村民の暮らし向きの悪くないことを示していた。というのは、いずれもちゃんちゃんと手入れが行きとどいていたからで、古くなった屋根板は克明に新しいのと取り換えてあり、門の傾いているような家は何処にも見当らなかつた。そればかりか、屋根のある百姓の物置小屋には、まだ殆んど真新しい、取つて置きの荷馬車が一台、ところによつては二台も備えてあるのが眼についた。『この婆さんの村もまんざら馬鹿にしたもんじやないぞ。』こう呟やくと、彼は早速この家の女主人といろいろ話しあつて、もつと近しくなろうと肚をきめた。彼は今しがた女主人が顔を出した扉の隙間からちよつと覗いてみて、彼女がお茶のテーブルに坐っているのを見とどけると、ニコニコと如何にも愛想のいい顔つきで、そこへ入つて行つた。

「おや、お早うございます。よくお寝みになれましたかね？」女主人は椅子から腰を浮かしながら言つた。彼女は昨夜ゆうべよりもいい服装なりをして、黒っぽい着物をきていたが、頭巾はもう被つていなかった。けれど、頸にはやはり何か巻きつけていた。

「ええ、よく寝<sup>やす</sup>ませて貰いましたよ。」チチコフはそう言いながら、安楽椅子に腰をおろして、「貴方は如何でしたか、奥さん？」

「どうも、妾はよく眠られませんのでね。」

「どうしてですか？」

「不眠症なんですよ。しじゅう腰が痛みましてね、それに脚が、この膝<sup>くるぶし</sup>節の上んところが疼<sup>ずきずき</sup>々々するのですよ。」

「なあに、そりやじきに癒りますよ、奥さん。何も御心配になることはありませんよ。」

「どうか癒つてくれればいいと思えますわい。それで妾は豚の脂をつけたり、テレピン油をぬつたりしてみたのですがね。それはそうと、お茶は何を入れて召しあがりますかね？」

この罫には果実酒が入っておりますが。」

「悪くありませんな、奥さん。その果実酒とかを頂きましょう。」

読者は、チチコフが如何にも愛想よくはしていたけれど、マニローフを相手にした時よりはずつと自由に話して、少しも固くなつていないことに、とつくに気づかれたことと思ふ。ここで一言しておかねばならないのは、我々ロシア人がまだ外国人に及ばない点が多あるにしても、応待の上手な点では、遥かに彼等を追い抜いていることである。ロシア

人のさまざまな応接の機微と輕妙さは、ちよつと数えあげることが出来ない位だ。フランス人やドイツ人にはとてもその特異性や使いわけのみこむことも理解することも出来ない。彼等は同じ声と同じ言葉で、百万長者にでも、けちな煙草商人にでも話しかける——勿論、前者に対しては、それ相応に内心でペコペコしているには違いないのだが。ところがロシア人になると大違いだ。ロシア人の中には、相手が農奴を二百人もっている地主と、三百人もっている地主とでは、話し方をすっかり変え、三百人もっている地主と、五百人もっている地主とでは、又まるで違つた話し方をし、五百人もっている地主と、八百人もっている地主とでは、これまた別な話し方をするといつた名人がいる。つまり、こうして百万までのぼつて行く間にも、それぞれ微細な差異をつけて話すことが出来るのである。例えばここに事務局があるとすると——いやここではない、何処か世界の涯の国にだ。その事務局に、局長があるとすると。その局長が下僚に向つてどつしり構えているところをちよつと見給え——<sup>みたま</sup>それこそ怖ろしくなつて、言葉も出ない位だ。威厳といい、上品ぶつたとところといい……<sup>やっこ</sup>奴さんの顔に何ひとつ不足しているものがあるだろうか？ 絵筆をとつて肖像を描いたら、\*3プロメシユースだ。手もなくプロメシユースそっくりだ！ 驚くのように辺りを睥睨しながら、<sup>へいげい</sup>輕快な足どりで悠然と歩きまわつてござる。ところが、

この他ならぬ鷺が一步その部屋を出て、自分の上役の部屋へ近づくと、たちまち鷓鴣しやこのようになつてしまい、書類を小脇にかかえたまま、鞠躬きつきゆうじよ如として伺候しこうするのだ。社交界へ出たり、夜会へ出席しても、もし下役の者ばかりなら、プロメシユースは依然としてプロメシユースでいるが、ちよつとでも自分より上役の者が居合わせたのが最後、このプロメシユース先生、たちま忽ち、\*4オヴィディアスでも思いつくことの出来ないような、ひどい変り方をする——蠅だ、いや蠅よりも更に小さい、砂粒ぐらいにちぢこまつてしまうのだ！

『いや、あれはイワン・ペトロローヴィツチじゃない。』こう、諸君は彼を見ながら言うだろう。『イワン・ペトロローヴィツチはもつと背が高いのに、この男は小柄こがらで痩せつぽだ。あの人なら太いバスの大きな声で話して、決して笑つたりなぞしないが、一体この男は何だろう、まるで小鳥のように小さな声で喋りながら、しよつちゆう笑つてばかりいるじゃないか』と。ところが傍へ寄つてよくよく見れば、確かにイワン・ペトロローヴィツチなのだ！『へへえ！』と諸君は内心で魂消たまげるだろう……。だが、しかし我々は、もうそろそろ本篇の登場人物の方へ戻るとしよう。で、チチコフは前述の如く、全然遠慮をしないことに決めたので、お茶の入った茶碗を手に取ると、早速それに果実酒を注ぎこんで、こんな風ふうに話を持ち出したのである。

「阿母さん、あなたは大変いい村をお持ちですねえ。農奴はどの位おありなんですか？」

「農奴は、かれこれ八十人ぐらいのもですがね、」と、女主人が言った。「因果と、この頃は災難つづきでしてね、去年なんぞの不作ときたら、おつ魂消るくらいでしたよ。」

「それでも、見たところ百姓たちは元気そうで、家並もしっかりしているじゃありませんか。失礼ですが、ときに御苗字はなんと仰っしゃいますか？ 昨夜は放心してしまっていて……何しろ、あんな真夜中にやって来たものですから……。」

「十等官の寡婦で、コロロボチカといえますんで。」

「どうも有難うございました。で、御名前と御父称は？」

「ナスターシャ・ペトロローヴナと申しますよ。」

「ナスターシャ・ペトロローヴナ？ いいお名前ですな——ナスターシャ・ペトロローヴナ。私の親身の叔母で、母の妹なんですが、やはりナスターシャ・ペトロローヴナというんですよ。」

「それで、あなたのお名前は何と仰っしゃいますかね？」と、女地主が訊いた。「あなたさん、ひよつとお役人じゃございませんかね？」

「いいえ、阿母さん。」と、チチコフは薄笑いを浮かべて、答えた。「決して役人なんか

じやありませんよ。ただ商用で旅をしているだけです。」

「それじゃ、あんたは仲買商人でしょう！ それあ惜しいことをしましたね、妾はただの商人あきんどに蜂蜜をほんとに安く売ってしまったのです。あんたに買って頂いたらよかったです。」

「いや、蜂蜜は買いませんよ。」

「じゃあ、何か他の品で？ 麻ですかね？ ところが、生憎と今、麻もほんの少ししかなくて、せいぜい半\*5プードもありますかね。」

「いや、阿母さん、私を買うのは、もつと他の品ですよ。どうです、あなたの村では、農奴は死んでいませんか？」

「死にましたとも、あんたさん、十八人も死にましたよ！」と老婆は、溜息をついて、答えた。「それも、死んだのは、みんな申し分のない、働き盛りの者ばかりですよ。尤ももつとそれから、生まれるには生まれましたがね、そんなものが何になるもんですか？ みんな小魚こばかりでね。それだのに役人がやって来ては、人頭税を払えって言いますだよ。農奴は死んでしまっているのに税金だけは生きているとおりに取りたてるのですよ。つい先週も、鍛冶屋が一人、焼けておつ死ちにりましたがね、なかなか立派な腕前の鍛冶屋で、錠前屋の仕

事まで心得ておる男でしたかね。」

「じゃあ、この村に火事があったのですか、阿母さん？」

「いいえ、お蔭とまだそんな災難は見ずにありますかね。火事なんぞだったら、尚更、堪ったものじゃありませんが、実は、お前さま、その鍛冶屋はひとりでに焼けておつ死んだのですよ。あんまり度外ずれな酒飲みだったもんで、お腹のなかに火がついたとでもいうのでしようよ、口から青い焰が噴き出しましてね、そのまま、だんだんからだ軀が爛ただれて、しまいには炭のように真つ黒になつてしまいましただよ。ほんとに腕の達者な鍛冶屋でしたが！お蔭で今じやもう、妾は馬車で出かける訳にもゆかないのですよ、馬の蹄かなくつ鉄を打つ者がありませんのでね。」

「何事も神様のお思ほしめし召ですよ、阿母さん！」とチチコフは、溜息を一つついてから言った。「神様の御心に逆らうようなことを言つてはなりませんよ……。じゃあ、それを一つ私に譲つて下さいな、ナスターシャ・ペトロヴナ！」

「それつて、あんたさん、一体なにをですかね？」

「つまりその、死んだ農奴を残らずですよ。」

「一体どうしますかね、そんなものを譲るつて？」

「どうもこうもありませんよ。なんなら、売って頂いてもいいんです。ちゃんと代金は払いますよ。」

「どうもね？ 頓とお話の意味が分りませんよ。まさか、土の中からそんなものを掘り出そうと仰つしやるのじゃないでしょうねえ？」

チチコフは、老婆がとんでもない勘違いをしていることに気がついたので、事の次第をよく会得させる必要があると考えた。そこで手短かに、この譲渡もしくは売買は、単に証書面だけのことで、しかも農奴を生きているものとして記載するだけだと説明した。

「そうしてお前さま、そんなものを何になさるだね？」と、老婆は彼の顔をまじまじと見詰めながら訊ねた。

「それは私の勝手ですよ。」

「でも、それはみんな死んでるのですよ。」

「生きていると誰が言いましたね？ 死んでいればこそ、あなたには損なんです——そんなもののために、みすみす税金を払ったりなんかしてき。で、私がそれを買取って、面倒や費えを無くして差しあげようと言ってるんですよ。分りましたかね？ そんな厄介ばらいをして差しあげるばかりか、まだおまけに、こちらから十五ルーブリさしあげよう

というんです。どうです納得が行ったでしょう？」

「どうも、とんと妾にや分らない、」と、女主人が休み休み言った。「ついぞこれまで、死んだ農奴なんて売ったことがありませんもの。」

「当たり前です！ そんなものを誰ぞにお売りになったら、それこそ奇怪な話ですよ。それとも、実際、そんなものが何か役に立つとも思っておいでですかね？」

「なんのなんの、そうは思いませんよ？ そんなものが何の役に立つもんですか？ 役に立つことは少しもありませんよ。ただ、どうも腑に落ちないのは、それが死んでしまっていることですよ。」

うん、どうして、なかなかの頑固女だわい！ と、チチコフは肚の中で考えた。「いいですかね、阿母さん！ まあよく考えて御覧なさいよ。あなたはみすみす損をしながら、そんなもののために税金を払ってなさるんでしょう、生きているものとして……。」

「ああ、阿父<sup>おとつ</sup>あん、もうそれは言わないで下さい！」と、女地主はすぐ話につりこまれて、「つい二週間まえに百五十ルーブリの余も払わされて、おまけに役人に心附までしたのですよ。」

「それ御覧なさい、阿母さん！ だから、せめてそんな役人への賄賂だけでも、しないで

済む工夫をしたらどうです、今夜、その分は私が払うことになるのですからね。——あな  
たじゃない、私が払うのですよ。納税の義務は残らず私が引き受けるのです。そのうえ、  
登記も自腹を切つて済ませようというのですよ。分りましたかね？」

老婆は考えこんでしまった。なるほど、この取引は確かに有利らしいが、ただどうもあ  
んまり突飛で先例のない話なので、何かこの仲買人に騙されているのではないかと、そろ  
そろ心配になりだした。それに第一、この男は、どこの馬の骨とも分らず、しかもあんな  
真夜中にやつて来たりしたのだから。

「それじゃあ、阿母さん、一つ手を拍つことにしてはどうだね？」とチチコフが言った。

「だかねえ、お前さま、妾やついぞこれまで死人を売ったことなんてありませんからさ。

それあ、生きてるのなら、二年前にもプロトポポフに売つてやりましたがね——一人百ル  
ーブリずつで女中を二人ね、そして大変喜ばれたものですよ、なにせ、とても申し分のな  
い働きもんになつて、ナプキンの布きれまで自分で織るつて言いますだよ。」

「いや、そんな生きた者のことじゃありませんよ、そんなものは、どうでもいいんで！  
私の訊いているのは、死んだ奴のことですよ。」

「実のところ、初めてのことだから、なんか損になるのじゃないかと、どうもそれが心配

になりましたね。ひよつとしたら、お前さまは妾を騙していなさるので、それがその……もつと値のいいもんじやないかと思ひましてね。」

「まあ、よくお聴きなさい、阿母さん……ええ、何という人だろう！ どうしてそんなものに値があるんです？ 積つても御覧なさい。屍灰はいじやありませんか。ね、いいですか？

それは屍灰はいにすぎないんですよ。どんな役に立たない、下の下げの代物、例えば、そこいらに落ちてゐる檻ぼろ褌ぼろつきれみたいな物でも、値段がありますよ——檻ぼろ褌ぼろだつて紙工場へ売れますからね。ところが死んだ農奴ばかりは、からつきし何の役にも立ちませんからね。それとも、何か役に立つとでも仰つしやるんですか？」

「それあもう、ほんとにそうですよ。まったく、何の役にもたちやしませんかね。ただ、どうも一つだけ肚へ入らないのは、死人を一体どうするのかということですよ。」

えい、くそ、なんて物分りの悪い婆あだろう！ とチチコフは、そろそろ堪忍袋の緒おを切らせながら、肚の中で呟つぶやいた。 どうして、ちよつとやそつとで説き伏せられたもんじやない！ すつかり汗をかかしゃあがつて、この糞婆おめ！ 彼は、ポケットからハンカチを取り出して、ほんとに額おでこににじみ出た汗を拭きはじめた。だが、チチコフが腹を立てるのは間違つていた。もつと偉い人物や、お上の役人の間にすら、どうかするとこのコロ

「ボチカと一體いっぺいなのがあるものだ。そういう連中は、噛んでふくめるように言い聞かせても、とんと納得させることが出来ず、どんなに明々白々な論拠もを以もつて臨んでも、まるで暖簾のれんと腕押しをすると同じで、さっぱり手ごたえがないのだ。で、チチコフは汗を拭くと、今度は何か別の方面から相手を口説きおとすことが出来ないものか、一つ試してみよう」と決心した。『ねえ、阿母さん、』と彼は言葉を改めて、「それでは私の言うことを故意ざいと理解しようとなさらないのか、それとも何か口から出まかせに、かれこれ言いなさるんだね……。私はあなたに金子かねを差しあげるのですよ、紙幣で十五ルーブリという金子かねを——分りますかね？ 金子かねですよ。往來で見つかる代物じゃありませんよ。じゃあ一つお訊ねしますが、蜂蜜は幾らでお売りになりましたね？」

「プードあたり十二ルーブリでね。」

「嘘をおしい、阿母さん。十二ルーブリになんて売れるものですか。」

「ほんとですよ、十二ルーブリで売りましたよ。」

「まあ、それならそれとして、よござんすかね？ それは蜂蜜です。それだけ貯めるには、恐らく一年の間、あれやこれやと心配や苦勞をして面倒を見たんでしょう——あちこち持ちまわったり、蜂を餓死させたり、長の冬じゆう土室つちむろへかこつてやつたりしてさ。とこ

ろが、死んだ農奴は所詮この世のものじやありませんからね。別に何の手数がかかった訳でもなし、そいつらがこの世を去つて、あなたの家計に損失を招いたのも神様の思召です。さて蜂蜜では、さんざん苦勞をしたり骨を折つたりして、やっと十二ルーブリお取りになりましたが、今度は何の苦勞もなしに、素手すてでもつて、あなたは十二ルーブリどころか、十五ルーブリ、それも銀貨ではなく、手の切れるような青紙幣あおぎつで受け取れるのですよ。「これほど有力な説得に会つては流石の老婆も今度は降参するに違いないと、チチコフは殆んどそれを疑わなかつた。

「成程ね、」と、女地主が答えた。「なにせ妾は、世間知らずの寡婦ごけのことだからね！ いつそ、もう少し待つてみますわい、ひよつとしたら、もつと他の商人あきんどがやつて来るかもしれないからもう一度値をあたつてみることにして。」

「馬、馬鹿な、阿母さん！ そんなことをいうのは恥ですよ！ まあ、何を仰つしやるのか、よく考えて御覧なさい！ いったい誰がそんなものを買いますかね？ 第一、そんなものが何の役に立ちますかね？」

「でも、どんなことで、家事むきに入用いりようなことがあるかもしれないからね……」と老婆は答えたが、言葉の途中で、口をほかんとあけたまま、相手が何と答えるかと、殆んど

びくびくしながら、客の顔を見まもった。

「なに、死人を家事むきに使うって！ こりや驚いた！ じゃあ、夜分、雀おどしに菜園はたけにでも立てておこうってんですかね？」

「ああ、桑原くわばらくわばら々々！ 何という怖ろしいことを言いなされるだね！」と、老婆は十字を切った。

「それじゃあ、一体、とつておいて何に使おうってんだね？ それに、骨こつだの墓かぶだのは、もとのまま、こちらに残るんですよ。取引は証書面だけのことでですからねえ。さあどうです？ どうするんです？ 何とか返事だけでもして下さいよ。」

老婆はまた考えこんでしまった。

「何を考えてるんですか、ナスターシャ・ペトロヴナ？」

「ほんとに、どうしていいやら分らないんでね。いつそのこと、麻を買って貰いましょうかね。」

「麻が一体どうしたっていうんです？ 飛んでもない、私は全然別のものをお願いしてるのに麻などを押しつけなされるんですか！ 麻は麻で、またこの次ぎ来ますからね、その時に頂きましょう。どうしますかね、ナスターシャ・ペトロヴナ？」

「それがねえ、どうも、まるで聞いたこともないような、おかしな商いだもんでね！」

ここでチチコフは、すっかり堪忍袋の緒をきらしてしまい、腹立ちまぎれに椅子を床に叩きつけざま、悪魔を引合いに出して老婆を罵った。

その言葉に、女地主はすっかり慄え上ってしまった。「ああ、どうぞそんな怖ろしいことを仰つしやらないで、鶴亀つるかめ々々！」と、彼女は真蒼になって喚いた。「ついでおととい昨日の晩も悪魔の夢を見ましたが、寝しなにお祈りをした後で、ふと思いついて骨牌カルタで運だめしなどしたので、たしかにその罰で、神様があんな悪魔をお遣つかわしになっただね。それあ、見るのも穢らわしい姿で、牡牛の角より長い角の生えた奴でしたよ。」

「ええ、お前さんなんぞ、そんな悪魔の十匹も夢に見なかったのが不思議なくらいさ。私はね、ただキリスト教徒としての博愛心から、あんたのためを思って言い出したまでのことさ。可哀想な寡婦ごけさんが胸も潰れる思いをしながら、貧苦にあえいでいる有様を見かねてさ……。えい、もう構うこつちやない、とつとと斃くたばってしまうがいい、お前さんの持む村らも一緒に滅びてしまおうがいいんだ……」

「まあ！ お前さまは、」と老婆は、怖る怖る相手の顔を見つめながら言った。「なんて酷い言葉づかいをなさるだね！」

「いや、お前さんにはもう何にもいう言葉がない！ まあ、せいぜいよく言つて、お前さんはちようど乾草ほしくさの上に寝ていながら、自分でそれを食うでもなければ他人に食わせもしない番犬みたいなものだからね。まだお前さんから、いろんな農産物を買うつもりだったけれど、仕方がない、私は政府おかみの御用達ごようたしも務めていきますからね……。」「ここで彼は、別に何の目的あてもなしに、ほんのちよつと嘘を吐いたのだが、それが思わぬ効果を表わした。御用達という言葉が、強くナスターシャ・ペトロローヴナの心を動かした。少なくとも彼女は、殆んどもう哀願するような声で言いだした。「どうして、そんなにぷりぷり腹を立てなさるだね？ お前さまがそんな短気な方だと初めから分っていたなら、決してかれこれ言うのじゃなかつたんですよ。」

「何も怒ることなんざありませんよ！ 中身のない玉子にも劣る、つまらないことで、腹を立てる私じゃありませんからね！」

「じゃあ、そういうことにして、お紙幣さつで十五ルーブリいただいて手離すことにしますよ！ ただね、あんたさん、その御用達の話ですがね、裸はだかむぎ麦まの粉こなだの、蕎麦粉そばこなだの、挽ひ割麦きわりむぎだの、または屠殺ころした家畜だのをお買い上げになる時は、どうぞ妾めかけに恥をかかせないで下さいよ。」

「いいとも阿母さん、恥をかかせやしませんよ。」彼はそう言いながらも、三筋みつじになつて顔を流れる汗を手で拭きはらつた。それから老婆に向つて、市まちに誰か代人なり、または知合いで、登記の手續てつづきやその他必要なことを全部委任することの出来る人はないかと聞き糺ただした。『ありますとも！ 祭司長のキリール神父とは懇意で、その息子さんが裁判所に勤めておりますだよ。』と、コローボチカが言つた。そこでチチコフはその人に宛てて委任状を書いてくれと頼んで、余計な手数をはぶくために、自分で文案を考えたりしたほどであつた。

この人がもし、うちの麦粉や家畜をずっと政府おかみの御用に買いあげてくれることになれば、ほんとに有難いよ。と、コローボチカはその間に、ひとりで考えた。この人を巧くまゐるめこんでおかなくちやなるまいて。そうそう、昨夜ゆうべの捏粉ねりこがまだ残つていた筈だから、フェチニヤに言いつけて、あれで薄焼フリンを焼かせよう。それから、あつさり卵だけ入れたパイを焼くのも悪くない。うちでは、あれをとでも上手に焼くし、それに大して手間も暇もかからないから。そこで女主人は、パイを焼こうという考えをさつそく実行に移すために部屋を出ていったが、どうやらそれに、うちの台所で出来た他の品をあしらうつもりらしかつた。一方チチコフは、自分の手箱から必要な書類を取り出すため、ゆうべ一夜を

過ぎした客間へ引つ返した。客間は疾うの昔に、すっかり片づけられ、例の豪勢な羽根蒲団も姿を消して、長椅子の前には卓布クロスを掛けたテーブルが据えてあった。その上へ手箱を持ちあげたまま、彼は暫らく息を休めた。というのは、まるで川へでもはまったように、軀からだじゆう汗だくになったような気持で、身につけているものは、シャツから靴下に至るまで、残らずびしよ濡れになつていたからだ。ちえつ、あの糞婆め、手を焼かせやあがつて！ と、彼は少し休んでから眩やいた。そして手箱をあけた。ところで、読者の中には定めし、手箱の構造から内部の仕組しくみまで知りたいと思うほど、実に物好きごしんな御仁ごしんがおられることと思う。よろしい、その望みを叶えて進すすめて悪わるかろう筈はずはない。さてそこで内部の仕組だが、先ずいちばん真中に石罅箱があつて、その向うに剃刀を入れる狭い仕切りが六つ七つある。それから、砂函とインキ壺を入れる正方形の枱たい穴があつて、その二つの枱穴の中間には、鷺がペンや封蝋などといった細長い物を入れる長方形の溝くが剝むいてある。それからまた、小物をいれる、蓋のあるのや蓋のない、いろんな仕切りがあつて、訪問用や葬式用の名刺や芝居の切符などが、ちゃんと心憶えにしまつてある。このいろんな仕切りのついた上置うわおきをそつくり取りのけると、その下には半切の用紙がぎつしり詰まつており、手箱の横腹には金子かねを入れておく、小さな秘密の抽匣ひきだしがついている。それはいつも、

引き出すと同時に大急ぎで押しこまれてしまうため、一体どのくらい金子が蔵かつてあるのやら、確かなことは分らなかつた。チチコフは、すぐさま仕事に取りかかり、先ず鷲ペンを削つて、書きはじめた。丁度そこへ女主人が入つて来た。

「あんたさん、いい手箱をお持ちですねえ。」と彼女は、傍へ腰かけながら言つた。「おおかたモスクワでお買いになつたのでしょうか？」

「ええ、モスクワでね。」と、チチコフは書きものを続けながら答えた。

「それあ、ちゃんと知つていましたよ。何でもあちらの物は出来がよろしいからね。一おと年も妾の妹があちらから子供の防寒靴を持つて来ましたがね、品が丈夫なもので、いまだとに履いていますだよ。おやまあ、お前さま、どれだけ証券用紙を持つておいでなさるだね！」と彼女は手箱の中を覗きこみながら、言葉をつづけた。実際そこには証券用紙がたくさん入つていた。「それ、一枚でもいいから、頂かれませんかね！　うちには、そういうのがありませんのでね、お上へ請願書を出すような時、ほんとに困るのですよ。」

チチコフは彼女に、この用紙はそういう種類のものではなく、登記の手續に用いるものだから請願書には使えないと説明した。けれど彼女を宥めるために、一ループリもする用紙を一枚やつた。彼は委任状を書きあげると、老婆に署名をさせて、農奴の名簿うっしの抄本を

貰てもといたいと言った。ところが、この女地主の手許てもとには、そんな名簿かきつけの書附かきつけなどは何ひとつなく、彼女は殆んど全部そら諳そらで憶おもえていた。そこでさつそく彼は、老婆あだなに一々その名前をあげさせることにした。その中の百姓の名前や、殊あだなにその綽名あだなに、ちよつと面喰あだならうようなのがあつたので、彼はそれを聞きくたんびに、ひと先おず筆おをひかえてから、やつと書きにかかるのであつた。中でも、槽おけかまわすのピョートル・サヴェーリエフ というのを聞きいて殊あだなに驚おどいた。彼は思おもわず、『こいつは長おつたらしいなあ！』と呟ささやいた。もう一つのは、名前に 牝牛おの煉瓦お という附録つけたりを頂戴あしており、また簡単に 車おのイワン と呼よばれているものもあつた。ようやく書きあげると、彼は少し鼻おをふくらませて空い気を吸いつたが、ふと何かバタで焼おいたものらしい、美味うまそうな匂においがプーンとした。

「どうぞ一つお撮つまみなすつて。」と女主人おが言いった。チチコフが振りかえつて見ると、いつの間にか、蕈きのこだの、肉饅頭おだの、早焼お麵めん麩ぼだの、パイだの、薄焼ぷりんだの、いろいろな物ものを入いれた厚レビヨシカ焼お、例おえば葱おを入いれたり、芥子おを入いれたり、凝乳おを入いれたり、石斑魚うぐいを入いれたり、その他あらゆる混おぜものを入いれた厚レビヨシカ焼おが、テーブルの上うずたに堆おかかく盛おりあげてあつた。「これは玉子入おりのあつさりしたピローグでござんすよ！」と女主人おが言いった。

で、チチコフはそのあつさりした玉子入おりのピローグに手てをつけて、いきなり半分よの余よ

も食つてから、それを褒めそやした。實際ピロークそのものも美味うまかつたが、殊に老婆を相手に、すつたもんだの一芝居うつた挙句なので、一ひとしお入美味しく思われたのである。

「薄焼プリンは如何で？」と女主人がすすめた。

それに答える代りに、チチコフは薄焼プリンを三枚いっしょに丸めて、それに溶かしたバタをべつとり塗まぶして口の中へ押しこむなり、ナプキンで唇と手を拭つた。それを三度ほど繰り返してから女主人に向つて、自分の馬車を用意させてくれと頼んだ。ナスターシャ・ペトローヴナは、早速フェチニヤをやつて命令を伝えさせたが、それと同時に、もつと薄焼プリンの熱いのを持つてくるように言いつけた。

「阿母さん、お宅の薄焼プリンは、大変おいしいですね。」とチチコフは、新らしく持ち出された焼きたてのに手をつけながら、言つた。

「ええ、うちじや、これを焼くのが自慢でしてね。」と女主人が言つた。「ただ残念なことに麦が不作で、粉の出来がかんばしくのうて……。それはそうと、お前さま、どうしてそんなにお急ぎになるんで？」と彼女は、チチコフが縁無帽カルツーツを手に取つたのを見て、言つた。「まだ馬車の支度も出来てやしませんよ。」

「なあに、阿母さん、支度はすぐ出来ますよ。私の馭者は、馬をつけるのが早いからね。」

「そいじやあ、どうか、御用達の節にはお忘れにならないで下さいよ。」

「忘れませんとも、忘れませんとも。」とチチコフは、玄関へ出ながら言った。

「それから豚脂ラードは買つて頂けませんかね？」と女主人は、その後を追いながら言った。

「どうして買わないことがあるもんですか？ 買いますとも、ただ、今じやなく後でね。」

「\*6 十二日節の時分には豚脂ラードも出来ますからね。」

「ええ、買いますとも、買いますとも。何でも買いますよ、その豚脂ラードもね。」

「おおかた、鳥の羽毛はねなんかも要ることがあるのでしよう。\*7 大齋期フライボフキの時分になると、

うちにも鳥の羽毛はねがたまりますよ。」

「ようござんすとも、ようござんすとも。」とチチコフが言った。

「それ御覧なさい、お前さま、まだ馬車の支度は出来てやしませんに。」こう女主人は二人がポーチへ出た時に言った。

「いや、もう直ぐ出来ますよ。ところで、本街道へ出るにはどう行ったらいいか、ひとつ教えて下さらんか。」

「さあ、どう教えて進しんぜたものかね？」と、女主人が言った。「口で話すのは、ちよつと難かしいんですよ、矢鱈に曲り角があるもんですからね。いつそ、女あまつ子を道案内につけ

てあげましょう。お前さまの馬車には、馭者台にその子に乗つける場所ぐらいおありでしょうがね？」

「それあ、無論ありますよ。」

「じゃあ、女あまつ子を一人つけてあげましょう。その子は、道をよく知っていますからね。ただ、いいかね、お前さま、その子連れて行ってしまわないで下さいよ。前にも一人、商人あきんどにつれて行かれてしまいましたからね。」

チチコフが、決してそんなことはしないと保証すると、コローボチカはやつと安心して、屋敷うちにあるいろんなものを見まわしはじめた。ちょうど倉の中から、蜂蜜を木の鉢に入れて持ち出した女中頭をじろりと眺めたり、門口へ顔を出した百姓に一瞥をくれたりして、だんだん、家事上のことに心を移していった。だが、どうしてこういつまでもコローボチカのことなどに関わっていることがある？ コローボチカだろうが、マニーロフだろうが、乃至は農事上のことであろうが、農事以外のことであろうが——そんなことはあつさり片づけておけばいいのだ！ この世で不思議と思われのはこんなものではない。どんな面白そうなものでも、少しゆっくりその前に佇たたずんでいると、忽たちまち悲惨なものに変わってしまう、果ては何とも言いようのない思いが胸に浮かんで来るのだ。恐らく諸君はこん

なことまで考え出すかも知れない。待てよ、果してこのコロポチカという婆さんは、人文開化の涯しない段階の、それほど低いところに立っているのだろうか？ 又この婆さんと、あの厳めしい壁に取りかこまれて、ちゆうてつ 鑄鉄の階段や、ピカピカ光る真鍮や、マホガニイや、絨毯で飾られたごうしゃ 豪華な邸宅の中で、読みかけの本に向って欠伸をしながら、誰か気のきいた訪問客でもやって来ないかと待ち侘びているような女性との間に、果してそれほどの大きな懸隔けんかくがあるだろうか？ えてそういう女性は、自分の智慧をひけらかしたり、うけ売りの思想を吹聴したりする場所ところばかり狙っているのだが——その思想も流行為の法則どおり、ほんの一週間ぐらい市を風靡するに過ぎない思想で、それも、邸の中や、御本人が農事にかけて無智なため恐ろしく乱脈を極めている領地が一体どうなっているかというような問題とは、凡そ縁およの遠い、やれフランスでは今どんな政治的変動が起きかかっているの、最近のカトリック教はどんな傾向をとっているのといったようなことばかりなのだ。だが、そんなことは、どうでもいいじゃないか！ 何だってこんな話を持ち出さねばならないのだろうか？ しかし何の気がかりもない、陽気でのんびりした気持の真只中へ、どうしてこんな、それとはまるで別な、変てこな気分が不意に浮かんで来るのだろうか？ 　まだ、すっかりこちらの顔から笑いの影が消え去らぬうちに、疾はやくも、同じ人々の間

におりながら、まるで自分が別人のようになってしまい、顔にはもう別な影がさしているのだ……。

「そら、馬車が来ましたよ、そら、馬車が！」とチチコフは、ようやく自分の半蓋馬車ブリーチカがこちらへやって来るのを見ながら、叫んだ。「馬鹿野郎、何をそんなにぐずぐずしていたんだ？ 貴様はまだ昨日の酔いがすっかり醒めきらないんだな？」

セリファンは、それには何の返事もしなかった。

「じゃあ、阿母さん、さようなら！ ところで、その女の子ってのは何処にいるんです？」  
「これ、ペラゲヤや！」と女地主は、ポーチの近くに立っていた十一ぐらいの女の子に向かって声をかけた。その女の子は手染てぞめの着物をきて、裸足のままだったが、新らしい泥をべつとりつけた足は、遠くから見ると長靴ばきのように見えた。「この旦那に道を教えてあげるんだよ。」

セリファンはその女の子に手を貸して、馭者台へ引っぱりあげてやったが、彼女は旦那の乗る階段へ片足をかけて、先ずそこを泥だらけにしておいて、ようやく上へ這いあがると、セリファンの傍に座ざをしめた。次いでチチコフが階段に足をかけると、重みで馬車はちよつと右側へ傾いたが、やがて席につくと、『さあ、これでよしと！ じゃあ、阿母さ

ん、さようなら!』と言った。馬は駈けだした。

セリファンは途中ずつと気難かしい顔をしていたが、それと同時に自分の役目には非常に注意を払っていた。これは、何か失敗しくじったり、酔っぱらったりした後で、彼がいつもやる癖であった。どの馬も驚くほど綺麗に磨きたててあった。頸くびわ圈も一頭のなどはこれまで、何時いつもボロボロになって、革の下から麻屑が覗いているといったひどいものがかけてあったのだが、いまはそれが立派に繕つてある。途中もずつと彼は黙りこくつたまま時々鞭をならすだけで、馬に向つても例のお説教をしなかった。いうまでもなく連銭れんせんあしげ葦毛などは、何か教訓的な言葉を聴かせて貰いたくて堪らないのだが、いつもはあれほどのお喋りの馭者が、今は手綱をだらりと握つたまま、ただほんの形式的に鞭で背中を撫でてくれるだけである。しかもこの際、馭者の不機嫌な口から聞かれるのは、ただ単調で糞面白くもない、『こら、間拔め! ぼやぼやするな!』という呶鳴り声だけであった。栗毛や『議員』の方も、いつこう『おい、大将』とも『この野郎』とも言つて貰えないので、心中甚だ穏やかでなかった。連銭葦毛は自分の肥つた大きな尻に、気持の悪い鞭づかいを感じた。ちよつ、恐ろしく御機嫌が悪いや! こう彼は、ちよつと耳をピクつかせながら肚の中で思った。でも、殴りどころはちゃんと知つてやがらあ! まともに背中は殴らないで

急所ばかり狙つて、耳を引っぱたいたり、肚へピシヤンと鞭をまわしたりしやがつてき。「あれを右へ行くのかい？」と、眼の覚めるような爽すがすが々しい緑の野良のらを、きのうの雨で黒くなつて横ぎつている道を鞭で指しながら、セリファンは自分の傍に坐つてゐる女の子に向つてぶつきら棒に訊ねた。

「ううん、おらがちゃんと教えてやるだよ。」と、女の子が答えた。

「さあ、どちらだい？」と、いよいよ二又まで来た時、セリファンが訊いた。

「此方こつちだよ。」と女の子は、手をあげて指さしながら答えた。

「なんだい！」とセリファンが言った。「やつぱり右じゃねえか。こいつ、右と左が分らねえんだな！」

天気は非常によかつたけれど、地面がひどく溼ぬかつていたため、泥が車の輪にへばりついて忽たちまちまるで毛氈フェルトでもかけたようになり、それがため馬車はぐつと重くなつた。おまけに土地が粘土質で、むやみに粘つこかつた。それやこれやで一行は、正午ひるまえに村道を出抜けることが出来なかつた。女の子でもいなければ、それすら覚束おぼつかなかつたことだろう。それというのも、いろんな道が四方八方へ、まるで袋からざりがに 蛄おぼつかを逃がしたように、矢やたら無性むしように伸びひろがつている始末で、これではセリファンがどんなに無駄道を喰つたと

ここで、決して彼の罪とは言えなかったからである。間もなく女の子が、遠くの方に黝くすんでいる一軒の建物を指さして、『ほら、あそこが本街道だよ!』と言った。

「あの建物はなんだい?」とセリファンが訊ねた。

「料理屋だよ。」そう女の子が答えた。

「それじゃあ、もう俺たちだけで行かれるよ、」と、セリファンが言った。「お前は家うちいけえりな。」

彼は馬車を停めると、女の子を助けておろしてやりながら、『ちえっ、なんて穢ねえ足をしてやがるんだい!』と、吐き出すように呟やいた。

チチコフが二カペーカ銅貨を一つやると、堪能するほど馭者台に乗せて来て貰った女の子は、ぶらぶらと家路をさして帰って行った。

\*1 クトウーゾフ將軍 公爵ミハイル・イラリオノヴィツチ (1745-1813) アレクサンドル一世時代の元帥で、かの有名な一八一二年の役にロシア軍総司令官としてナポレオンの率いるフランス軍をボロジノに迎え撃った名将。

\*2 パーウエル・ペトロローヴィツチ パーウエル一世 (1754-1801) のこと。ピョートル三世とエカテリーナ二世の間に生れた皇子で、一七九六年帝位に即いたが、

性疑い深く、政治上にも非常に過酷な点が多かった。

\*3 プロメシユース ギリシャ神話の神。粘土から人間を創造し、それに生命と幸福を賦与せんがため天より火を盗んだかどでコーカサスの山の岩壁に鉄鎖で縛められ、荒鷲に内蔵を啄まれながら苦悩に堪えた英雄。

\*4 オヴィディアス ナゾン (B.C.43-A.D.17) 西暦紀元前後に活躍したローマの詩人。初期の作にはエロチシズムのものが多かったが、後には神話的作品を多くも のした。

\*5 プード ロシアの重量単位。一プードは四貫三百八十匁に相当する。

\*6 十二日節 クリスマスの直後二週間を指し、異教スラヴ時代の冬送りの祭りと呼 合する。

\*7 大齋期 クリスマス前の精進期で、十一月十五日より十二月二十五日までをいう。

## 第四章

料理店の前へさしかかると、チチコフは二つの理由から、馬車を停めるように言いつけた。第一は馬を休ませるためで、第二には自分も何か少し食べて元気をつけるためであった。実際こういつた連中の食い気と胃の腑には、作者も羨望を禁じ得ない。ペテルブルグやモスクワに住んで、明日は何を食べよう、明後日あさっての昼飯は何にしようと、始終そんなことばかり考えていながら、さてその食事に取りかかる前には、まず用心に丸薬を服のんで、それから牡蠣だの、蟹だの、その他いろんな珍味をむしやむしややらかして、とどのつまりはカルルスバツトかコーカサスへ養生に出かけるといつた豪勢な紳士がたなどは、てんで物の数ではない。決してこういう紳士がたを羨ましいと思つたことはないのである。ところが、この二流どころの紳士がたに至つては、最初の宿場でハムを注文すると、次ぎの宿場では仔豚をとり、三番目の宿場でもちようぎめ蝶鮫の大切れか、それとも、葱を添えた焼腸詰ぐらいは平らげ、まだ、それでもいつこう平気なもので、時分もかまわず食卓について、小蝶鮫ウハの魚汁に鱈か白子をそえてガツガツやらかし、口直しに魚饅頭か、鯰の肉の入つた

パイを食うのだから、その健啖ぶりは他人ひとごとながら、まったく以つて空怖そらおそろしくなる——こういった連中は、いやもう羨ましい天恵てんけいを享受している次第で！ 大概の上流の紳士は、こういう中流どころの紳士が持つているような胃の腑もぢぬしの持主もちぬしになることが出来さえすれば、躊躇なく農奴や領地の半ばを犠牲に供きようするだろう。それが抵当に入つていようがいまいが、また外国式なりロシア式なりの改良が施されていようがいまいが、そんなことは問題ではない。ところが残念ながら、どんなに金子かねを積もうが、またどんなに改良を施した領地を犠牲にしようが、この中どころの紳士が持つているような胃の腑もぢぬしというのは決して決して手に入りっこないのである。

黝くすんだ木造の料理店は、古風な教会の燭台みたいな恰好に轆轤ろくろびき挽にした木の柱で支えられた浅い客好きのする庇の下へチチコフを招き入れた。料理店は、まあ、ロシア式の百姓小屋を少し大形にしたようなものであった。窓のぐるりや屋根底びさしについている新らしい木で彫り物をした蛇腹が、黝くすんだ壁にくつきりと浮かんでおり、鎧扉には、花をいけた壺の絵が描いてある。

狭い木の階段を這うようにして、広いポーチへ上ると、出會頭であいがしらにギーツと扉が開いて、絞染しぼりぞめさらさ更紗さらさの着物をきた、肥った婆さんが顔を出すなり、『こちらへ、どうぞ！』と言

った。部屋へ入ると、よくこういう街道筋すじに建っている小さな木造の料理屋では、誰でもぶつかるようないろんな古馴染ふるなじみが眼についた。他でもない、もう錆の出てきたサモワール、滑らかに鉋かんをかけた松板の壁、急須や茶碗を入れて隅っこに置いてある三角戸棚、聖像の前に、赤や青のリボンでぶらさげてある、鍍金めっきをした瀬戸物の卵、つい近ごろ仔を生んだばかりの猫、二つの眼を四つに映し、顔の代りに煎餅みたいなものを見せてくれる鏡、それから最後に、聖像の後ろへ束にして差しこんである香におい草と撫子なでしこだが、こいつはすつかり干乾ひからびているので、匂においを嗅くごうとしても、嚏くしゃみが出るだけという代物である。

「仔豚はあるかね？」こう言いながらチチコフは、突っ立っている老婆の方へ顔を向けた。

「はい、ございます。」

「山葵わさびと酸乳皮スメターナをつけたのもあるかね？」

「山葵わさびと酸乳皮スメターナをつけたのもございますよ。」

「じゃ、それを出しておくれ！」

老婆はあたふたとして出て行くと、やがて皿と、まるで乾いた木の皮のようにごわごわと糊のつてあるナプキンと、それから黄いろくなつた角つのの柄えをすげた、ペン小刀みたくに繊細きやしやなナイフと、二又のフォークと、塩壺しおを持って来たが、その塩壺はどうしても

食卓の上に真直ぐに立たなかつた。

例によつて我々の主人公は早速老婆をつかまえて根掘り葉掘り、この料理店は自分でやっているのか、それとも主人があるのか、またこの料理店からはどのくらい利潤があがるか、息子はあるのか、総領はまだ独身か、それとも嫁を貰つたのか、どんな嫁が来たか、持参金じさんきんはたつぷり持つて来たか、持つて来なかつたか、嫁の父親は満足しているのか、それとも結納が少なくて怒つてやしないのか、などと訊き糺ただした。一口に言えば、何ひとつ訊き漏らさなかつたのである。勿論、この界限にどんな地主があるかということも訊ねたのはいうまでもない。その結果、この辺には、プロヒン、ポチターエフ、ムイリノイ、チエルパコフ大佐、ソバケーヴィツチなどという地主のあることを聞き出した。『へえ！ソバケーヴィツチを知つてるのかね？』そう彼は訊ねたが、すぐに老婆から、ソバケーヴィツチだけじゃない、マニーロフも知つていると聞かされた。そして老婆はマニーロフの方がソバケーヴィツチよりぐつと上品な人だと言つた。マニーロフはやつて来るなり牝と鶏りを煮てくれと言いつけ、犢りの肉はないかと訊く、羊の肝臓があれば早速それも注文するが、どれにもちよつと手をつけるだけだ。ところがソバケーヴィツチときたら、何か一品より注文しない癖に、それをきれいに平らげて、まだその上におまけをよこせと言うのだ

そうだ。

彼がこんな風にお喋りをしながら、仔豚をむしゃむしゃぱくついていると、もうそれが一口でおしまいになるという時分に、ふと、こちらへやって来る馬車の音が耳についた。窓から覗いてみると、なかなか立派な三頭立の馬をつけた軽快な半蓋馬車ブリーチカが一台この料理店の前に停つたところであつた。馬車からは二人の男が降りた。一人は薄色髪の背の高い男で、もう一人は、それより少し背が低くて髪が黒かつた。薄色髪の方は、濃紺のハンガリー服きを着ており、髪の黒い方は、あたりまえの縞の韃鞄だたん外套を羽織つていた。遠くから、もう一台、四頭の毛の長い馬に曳かれた空の軽馬車からがガタゴトやって来たが、馬の頸くはびわぼろぼろで、馬具は荒縄だつた。薄色髪の男はさつさと階段を駆けあがつて来たが、黒毛の男はまだ後に残つて、何か半蓋馬車ブリーチカの中を掻き探しながら、下男と話しあつたり、同時に後から来た馬車に向つて手を振つたりしている。チチコフにはその声にどうやら聞き覚えがあるように思つた。彼が男の方をじろじろ眺めている間に、薄色髪の男は早くも手さぐりで扉をあけて入つて来た。それは背の高い、顔のげつそりした、謂ゆるいわすいつからしという型の男で、茶いろの口髭を立てていた。焼け焦げたような顔色から推してこの男が、焰えん硝しょうのけむりはともかく、煙草のけむりには相当お馴染になつてゐることが窺うかが

われた。彼はチチコフに向つて丁寧にお辞儀をした。で、チチコフも同じように会釈をかえした。こうして切掛きつかけが出来て、二人は殆んど同時に、いい塩梅に昨日の雨ですっかり街道の埃もおさまり、今日は馬車を駆かるにも涼しくて気持ちがよろしいなどと喋りだしたので、間もなく、大いに話しこんでお互いに近づきになるところであつたが、そこへ髪の毛をがむしやりに搔きたてた。それは骨組ほねぐみのがつしりした中背の好漢で、頬は丸々として血色がよく、歯が雪のように白くて、漆のように真黒な頬髯を生やしていた。この男はいかにも生氣澆刺せいきはつらつとして、健康そのものが面めん上じょうに躍動している観があつた。

「よう、よう、こりやどうだい！」と、彼はチチコフの姿を見ると、いきなり両手をひろげて喚きたてた。「不思議なところで逢うじやないか？」

チチコフは、それが検事の家で午餐ごさんを共にした、あのノズドリヨフだと気がついた。あの時も、ほんの二三分で馬鹿に馴々しくなつて、別段こちらから水を向けたわけでもないのに、すぐ君、僕でやりだした男である。

「何処へ来たんだね？」と言いながら、その返事も待たずに、ノズドリヨフはこうつぶけた。「僕はね、君、定期市ちへ行つて来たのさ。いやはや、すつからかんに負けて来たよ

！ まったくの話が、生まれてこの方、こんなにきれいに剥むかれたのは、初めてのこつたねえ。しようがないから、百姓馬をつけて、戻つて来たつてえていたら為らく体さき！ そら、ちよつと窓から見てくれよ！」そう言つて彼は、いきなりチチコフの頭をぐつと手で押えつけたものだから、チチコフはもう少しで窓枠に額をぶつつけるところだった。「ちえつ、なんちゆう駄馬だろう！ あん畜生どもつたら、ここまで来るのがえんやらやつとなんだよ。だから、仕方がないから、そら、この男の半蓋馬車プリーチカへ乗りかえて、やつて来たのさ。」そういうながら、ノズドウリヨフは連れの男を指さした。「あ、君たちはまだ知合いじやなかつたのだね？ 僕の妹婿で、ミジューエフつてんだよ！ 僕たちは今日も朝から君の噂うわさばかりしてたのさ。『なあおい、今にきつとチチコフに逢うぜ』つてね。だが兄弟、おれがどんなに洗いざらいすつちまつたか、君が知つてくれたらなあ！ まったくの話が、だくうま馬を四頭とも投げだしたばかりじやない——何もかもすつちまつたんだぜ。ね、時計も鎖も持つていないだろ……。」「チチコフがちらと眺めると、なるほどこの男は時計も鎖もつけていない。そればかりか、相手の片方の頬髯ほっほが、片方のより小さく疎らになつていするようにさえ思われた。「だが懐中ほっほに、せめてもう二十ルーブリあつたらなあ、」と、ノズドウリヨフは語を継いだ。「それより余計なくたつて、二十ルーブリで沢山だ。そうす

れば、何もかも取り返して見せたんだがなあ。つまりさ、取り返した上に、正直なところ、今頃はきつと、三万ルーブリぐらいはこの紙かみいれ入へねじこんでいたんだがなあ。」

「だつて、お前、あん時もそんなこと言つてたぜ。」と、薄色髪の男がそれに答えて、

「でおれが五十ルーブリ貸してやつたら、直ぐにまた奪とられちまつたじやないか。」

「奪とられる筈がなかつたんだよ！ 断じて、奪とられる筈はなかつたんだ！ おれがあんな失策へまさえやらなかつたら、まつたく、奪とられる筈はなかつたんだがなあ。あんなパロレー

の後で忌々しい七で鴨なぞ狙わなかつたら、おれは場銭を残らず搔かつさらつちまつたんだぜ。」

「ところが、搔かつさらつちまわなかつたじやないか。」と、薄色髪の男が言った。

「それあ、あんな拙い時に、鴨など狙つたから、搔かつさらえなかつたのさ。だがお前、あの少佐を、相当な打手うちてだとも思つてるのかい？」

「相当な打手か打手でないかは知らないが、とにかくお前はあいつに負かされたのだからなあ。」

「なあにを、つまんねえ！」と、ノズドウリヨフが言った。「あんなの、大丈夫おれは負かして見せるよ。なあに、あん畜生に一度ドウブレットをやらせて見るがいいや、そうす

れあ、彼奴がどんな打手かちやんと見抜いてやらあな！ だがね、チチコフ、初めの二三日はとても面白く遊んだぜ！ まったく素敵滅法も無い定期市ちだったからなあ。商人あきんどたちからして、こんなに沢山人の出たことはねえつて呆れていたよ。おれの村から持つて行ったものが、何もかも飛びきりの上値で売れつちまつてき。いや、どんなに景気よく騒いだと思う！ ほんとに、いま思い出しても……くそつ！ まったく、君のいなかったのが残念だよ！ まあ、思つても見たまえ、町から三露里ばかりのところりゆうきへいに龍騎兵の連隊が駐屯ちゆうとんしていたのさ。だもんだから、君、ありつたけの将校という将校が、そいつらだけでも四十人からいたんだが、それがみんな町へ乗りこんで来たんだ……。おれたちが、君、どんなに景気よく飲みだしたと思う……。騎兵二等大尉のポツエルーフつて……。素晴らしい奴でね！ 君、立派な髭を生やしてやがつてき！ ボルドーのことを濁酒どぶろくつて言やがるんだ。『こら、濁酒どぶろくを持つてこい！』とこうだ。それからクヴシンニコフつて中尉だがね……。こいつが君、とても面白い奴なんだ！ まず、どちらから見ても遊蕩ゆうとう児じだといえるねえ。おれたちは始終こいつと一緒だったんだ。ところで、ポノマレフの奴がどんな酒を飲ませたと思う！ だが奴は曲者くせもので、あん畜生の店では何ひとつ買えたもんじやないつてことを心得てなきや駄目だよ。酒ん中へいろんな混ぜものをしやがるん

だ、白檀びやくだんだの、焼いたコルクだのをいれたり、接骨木にわとこの実で色つけまでしやがるんだからさ。だが、その代り彼奴が、特別室と呼んでいる奥の部屋から何か罈つばを持ち出して来たら、それこそ君、極楽浄土へ行つたような気持になれるよ。おれたちの飲んだシャンパンといったら、まったく……あれに較べたら、知事んとこのなんざあ何だい？ まるでただのクワスじゃないか。まあ思つても見たまえ、クリコーというだけじゃなく、クリコー・マトウラドウーラつてやつさ、つまり二倍の強さのクリコーつて訳わけさ。それから、ボンボンつていうフランスの葡萄酒も一本のんだつけ。匂いかい？——こいつは薔薇ばらみたいな匂いもしたし、いろんな、望みどおりの匂いもするんだよ。いやとにかく、えらい騒さわぎさ！……何でも、おれたちの後へどこかの公爵こうくわくとかがやつて来てさ、シャンパンを持って来いつて、店へ使いをよこしたそうだがね、お生あいにく憎にくと、町じゆうどこを探しても一本もないつて始末しまつさ。みんな将校連が飲めじまつたんだよ。まったくの話が、食事めしの間におれ一人でもシャンパンを十七本から平らげたんだからね！」

「なにを、お前、十七本なんて飲めみやしないよ。」と、傍から薄色髪うすいろかみの男が注意ちゆういした。

「いや、おれは誓ちかつて、それだけ飲めんだと断言だんげんするよ。」と、ノズドウリヨフが言い返かへした。

「何とでも勝手に断言するがいいけれど、おれはお前が十本も飲みやあしなうと言っただけや。」

「じゃあ、おれが飲むか飲まないか、賭をしようか？」

「何のために賭などするんだい？」

「さあ、お前が町で買って来た鉄砲を賭けろよ。」

「嫌だよ。」

「まあ、試しに賭けてみるよ！」

「試しにだって、嫌だよ。」

「そうだろうて、また帽子を失くしたように、鉄砲も失くしてしまうところだからな。まったく、チチコフ、君のいなかったことが、返すがえすも残念だよ！ 君は屹度きつと、あのクヴシンニコフ中尉とは別れられなかったよ。奴さんと君がさぞ肝胆相照らしただろうになあ！ あいつは例の検事だの、市まちにいる、一カペーカの銭にもびくびくしてるような、県のしみつたれ役人とは、てんで柄がらが違うよ。あいつは君、ガリビツクでござれ、銀行バンクでござれ、そのほか何でもお好み次第なんだぜ。まったく、チチコフ、何だって君は来なかつたんだい？ 来ればよかつたのに、ほんとにしようのない野郎だぜ、君は！ さあ、おれ

を接吻してくれ、おれは死ぬほど君が好きなのさ！ どうだいミジューエフ、これこそ運命の引き合わせつてもものさ！ この野郎とおれとは縁もゆかりもない仲だろ？ 第一どこからやって来た男とも分りやしないし、おれはおれでこんなところに住んでいるしさ……。だが何にしても、兄弟、あすこにやあ、実にどえらく馬車がいたもんさ、まったく engros 《エングロス》（夥しい数）だったぜ。おれは玉ころがしをやって、ポマードを二罫と、瀬戸物の茶碗と、ギターをとったよ。ところがそれをもう一度賭けたら、畜生め、今度はみんな取られて、その上に六ルーブリもふんだくられちゃった。だがね、クヴシンニコフって奴がどんな女たらしだか、君が知ったものなら！ おれは奴と一緒に、舞踏会という舞踏会へ一つ残らず行つたんだよ。ところが、一人おそろしくでかど著飾きつた女がいて、レースや紗の裾飾りや、いろんなものを滅多矢鱈につけてやあがるのさ……。おれは、『糞くらえ！』と思つたね。ところがクヴシンニコフの奴は、ああいう恥知らずだから、その女の傍へ擦りすりよりやあがつて、フランス語なんかでジャラジャラおべつかを使やがるんだ……。ほんとに、彼奴ときたら、どんなつまらない女あまでも、見のがしつこないんだからなあ。彼奴はそれを、野苺のいちじを摘むのだって言つてやがるのだぜ。それから、素晴らしい魚や、蝶鮫の乾魚ひものをさらに売つていたつげ。おれは蝶鮫の乾物を一つ買つて来たがね、

まだ金のあるうちに気がついて、いいことをしたよ。時に、君はこれから何処へ行くんだい？」

「或る人のところへね。」とチチコフが答えた。

「ふん、何だい或る人なんて？ すつぽかしちまえよ！ 一緒におれんちへ行こうや！」

「いや、そうはいきませんよ。用事があるんでね。」

「ふん、用事があるとおいでなすつたね！ いい加減なことをいうない！ この\*1オポデリドツク・イワーノヴィツチめ！」

「まったく、用事があるんですよ、それも重大な用事で。」

「賭をしてもいいが、それや嘘だ！ じゃあ、言ってみろよ、いったい誰んどこへ行くのか？」

「言いますとも、ソバケーヴィツチのところへ行くんで。」

それを聞くとノズドウリヨフはからからと笑いだしたが、それは元氣澆刺たる健康人に特有な笑い方で、そういう手合いは砂糖のように真白な齒を残らず剥きだして、頬をやけに波打たせながら、恐ろしく大声をあげて笑うものだから、中ふたつ戸を距てた三番目の部屋に寝ていた男が夢を破られ、がばと跳ね起きぎま、眼を見張って、『ちえつ、どうか

したのかな!』と口走るほどである。

「何がそんなに可笑しいんです?」とチチコフは、そんな笑い方をされたので聊か気色を損じて、言った。

だがノズドウリヨフは、『おい、助けてくれ! まったく、おら、腹の皮が破れそうだよ!』と言いながら、大口をあけて笑いつづけた。

「何も可笑しいことなんかありませんよ。僕はあの人と約束をしたんだから。」とチチコフが言った。

「だって君、あんな奴のところへ行つたつて、ちつとも面白いことなんて、ありやあしな  
いぜ。あれあ<sup>しわ</sup>呑坊にすぎないんだ! おれは君の性質をよく知ってるがね、彼奴の家へ  
行つて、銀行の一番もやつたり、ボンボンの一本にでもありつけようと思つたら、それこ  
そ飛んでもない間違いだよ。ねえ君、だからソバケーヴィツチなんかすっぱかしまつて  
さ! おれんちへ行こうよ! 素<sup>すてき</sup>的な蝶鮫の乾物を御馳走するぜ。ポノマレフの畜生めが、  
いやにペコペコお辞儀をしやがつて『あんだだけにですよ。市<sup>いち</sup>じゆう探したつて、とても  
こんなのは見つかりつこありませんぜ』つてぬかしやあがるのさ。だが、あいつは途<sup>とてつ</sup>轍も  
ないペテン師だからなあ。おれは彼奴の眼の前でそう言つてやったよ。『貴様と、あの徴

税代弁人とは、天下一の大悪党だ！』ってね。そうすると、あの悪漢め、顎鬚をなでてニヤニヤしてやがるんだ。おれはクヴシンニコフと一緒に、毎日あいつの店で朝飯を食ったもんさ。あつ、そうそう、君に話すことを忘れていたがね、こいつは屹度、君も咽喉から手が出るにきまつてるんだが、一万ルーブリだすと言ったって手放さないから、前もつて断わっておくよ。えい、ポルフィーリイ！」と、彼は窓際へ近よつて自分の従僕を大声で呼びたてた。その従僕は片手にナイフを持ち、片手には麵麩の皮と、どうやら半蓋馬車の中から何かを取り出す序でに、まんまと切り取つたらしい蝶鮫の乾物を一切れ持つていた。「えい、ポルフィーリイ！」と、ノズドウリヨフは呶鳴つた。「仔犬をつれて来い！君、素晴らしい仔犬だぜ！」そう言いながら、彼はチチコフの方へ向き直つて、「こつそり失敬して来たのさ、持主の野郎めが、命にかけても手放そうとしやがらねえものだからね。おれはそいつに薄栗毛の牝馬をやるからと言つたんだよ。そら、知ってるだろ、あのフオストウリヨフのところ取り換えた馬さ……。」「だがチチコフは、そんな薄栗毛の牝馬にも、フオストウリヨフとかにも、生まれてこの方かたついでお目にかかったことがなかつた。

「旦那さま！ 何にも召しあがらないのでございますか？」とこの時、老婆がノズドウリ

ヨフの傍へ近よりながら、訊ねた。

「何にも要らない。いや君、まったく景気よく遊んだよ！　だが、ウオツカを一杯もらおうか。どんなのがあるんだい？」

「茴香酒アニソツワヤがございますよ。」と老婆が答えた。

「じゃ、その茴香酒アニソツワヤをくれい。」とノズドウリヨフが言った。

「うん、序ついででおれにも一杯くれ！」と、薄色髪カナリヤの男が言った。

「芝居へ行つてみたらね、一人の女優が、畜生め、まるで金糸雀カナリヤみたいに唄つてやがるのさ！　クヴシンニコフの奴はおれの傍に坐つていやがったがね、『どうだい、君、あの野

莓も摘んでやろうか！』なんてぬかしやがるんだ。見世物小屋だけでも五十ぐらいはあつたと思うなあ。フェナルデーとんぼがえりつていう奴は、風車みたいに四時間もとんぼがえり 翻筋斗をやつてやがるんだ。「ここで彼は、老婆の手から酒さかずき杯を受け取ったが、婆さんはそれに対して恭うやうやしくお辞儀をした。「ああ、ここへ連れて来い！」と、ポルフィーリイが仔犬を抱いて入つて来たのを見て、彼は叫んだ。ポルフィーリイは主人と同じように綿入の韃鞅服キを着ていたが、それは余計に垢じみていた。

「さあ、こちらへ貸せ、この床の上へ置くんのだ！」

ポルフィーリイが仔犬を床の上へおろすと、そいつは四肢ししをふんばって地面したを嗅ぎまわした。

「いい仔犬だろ！」とノズドウリヨフは、そいつの背中をつまんで差しあげながら言った。仔犬はひどく哀れっぽい鳴き声をたてた。

「だが貴様は、おれの言いつけたとおりにしなかったな。」とノズドウリヨフは、注意ぶかく仔犬の腹を調べながら、ポルフィーリイに向つて言った。「こいつにブラツシをかけてやらなかったらう？」

「いえ、かけてやりましたとも。」

「じゃあ、どうして蚤のみがいるんだい？」

「さあね。おおかた馬車からでもうつったんでがしよう。」

「嘘をつけ、ブラツシなんかかけてやろうともしなかったんだらう。馬鹿野郎、まだおまけに自分のをうつしたんだな。さあ見てくれ給え、チチコフ、どうだい、いい耳だらう、なあ、ちよつと手で触つて見給え。」

「どうして？ このままでもよく分りますよ、なかなかいい血統たねですなえ！」と、チチコフが答えた。

「いや、そう言わないで、ちよつと持つて見給え、この耳に触つてみるんだよ！」

チチコフは是非なく、相手の気がすむように、ちよつと耳に触つて見てから、『なるほど、これは好い犬になりますよ。』と言つた。

「それに、鼻がとても冷たいんだぜ。さあ、手で持つて見給えな。」

そこでチチコフは相手の機嫌を損じたくないばかりに、ちよつと鼻に触つて見て、『なかなか好い嗅覚かんですよ。』と言つた。

「純粹のブルドックだよ。」と、ノズドウリヨフは語を継いで、「おれは実のところ、ずいぶん前から、こういうブルドックを鶺鴒の目鷹の目で探していたんだよ。さあポルフィーリイ、あつちへ連れて行け！」

ポルフィーリイは仔犬の腹の下へ手をまわして抱きあげると、馬車の中へ持ち去つた。

「ねえ、チチコフ、君はどうしてもこれから、僕の家へやって来なくちゃいけないぜ。なあに、たった五露里しきやないんだから、一息で駆けつけられるよ。それからソバケーヴイツチのところへ行つたつていいじゃないか。」

さあ、どうしたものかな？ とチチコフは肚の中で考えた。一つ、ノズドウリヨフのところへ行つてやるかな。別に他の連中より悪い訳もないで、同じような並の人間で、お

まけに骨牌カルタですつからかんになるような男だ。どうも見たところ、どんなことでもやりかねない人間らしい。だから、まんがよければ、先生、無償ただでも譲ってよすかもしれないぞ。そこで彼は、「じゃあお邪魔しましょう。」と言つて、「しかし、あんまり引き留めないで下さいよ。時日ときがありませんからね。」

「よう、大将、そう来なくつちやならないや！ 素敵々々！ ちよつと待ちなよ！ 褒美に一つ接吻をしてやるから。」そこでノズドウリヨフとチチコフは互いに接吻した。「こりや面白くなつて来たぞ。さあ三人でぶつ飛ばそうや！」

「いや、僕はここで御免蒙るよ。」と薄色髪の男が言った。「家へ帰らなくちやならないから。」

「馬鹿な、そんなこと言つたつて、放しやしないぞ。」

「だつて、きつと女房が怒るからさ。君はもう、この人の馬車に乗つて行つて貰えばいいじゃないか。」

「駄目、駄目、駄目！ そんな馬鹿なこと考へるない。」

この薄色髪の男は、その性質に一見片意地らしいところのある人間の一人であった。こういう連中は、相手がまだ口を開かぬうちから、もう議論を始めようとしており、自分の

考え方と明らかに矛盾しているような事柄には決して賛成することが出来ず、馬鹿を利口と言ったり、とりわけ他人の笛におどらされるなどということには、断じて承服できないらしい。ところが、いつもしまいには自分の弱味で、初め反対したことにも賛成し、馬鹿を利口と言ひ、果ては他人の笛につれて、この上もなく上手におどりだす——要するに、龍頭蛇尾におわるのである。

「馬鹿をいうな！」とノズドウリヨフは、何か薄色髪うすいろかみの男がぐずぐず言いだしたのに一喝を喰らわせて、さつさと縁無帽を彼にかぶせてしまったので、薄色髪うすいろかみの男はしよることなしに、二人の後について立ちあがった。

「旦那さま、あの、ウオツカのお代をまだ頂きませんが……。」と老婆が言った。

「ああ、よし、よし、婆さん。おい、義兄弟きょうだい！ 済まないが払っておいてくれ。おれの懐ろには一文もないんだから。」

「いくらだね？」と妹婿が訊ねた。

「ええ、なんの、旦那さま、みんなで二十カペーカでございますよ。」と老婆が答えた。

「嘘をつけ。その半分もやつときや、沢山だよ。」

「それじゃあ少のうございますよ、旦那さま。」と老婆は言ったが、それでも有難そうに

錢を受け取ると、大急ぎで扉を開けに駆けよつた。彼女はウオツカの値段の四倍も吹つけたのだから、少しも損はしなかつたのだ。

一行は馬車に乗りこんだ。チチコフの半蓋馬車ブリーチカは、ノズドウリヨフと妹婿が乗つた半蓋馬車イチカと並んで駆けて行つたから、途々みちみちずつと彼等三人は自由に談話を交わすことが出来た。その後ろからは、痩せた百姓馬に曳かれたノズドウリヨフの小振りな軽馬車が、ともすれば遅れがちに、ついて行つた。それにはポルフィーリイが、仔犬と一緒に乗つていた。一行が途々とり交わした会話は、読者にとつては余り面白くもなさそうだから、いつそ、ここでノズドウリヨフの一身上について若干お話ししておこうと思う。というのは、この男は、おそらくこの叙事詩に於いて、決して端役はやくしかつとめない人物ではなさそうだからである。

恐らくノズドウリヨフの人物については、読者はもう幾分お馴染のことであろう。こうした人物には誰でもよく打ぶつかるものである。こういう連中は、手のつけられない奴と呼ばれて、まだ子供のころや、学校へ行っている時分から、餓鬼大将として名は通つているが、それだけにまた、ずいぶんこつぴどい目にも逢わされているのだ。その顔には常に真ま率んそつで腹蔵のない、豪胆なところが現われている。誰とでもすぐ懇意になつて、相手がま

だけろつとする暇もない中に、もう『君、僕』で話しだす。永久の友誼ゆうぎが続きそうできて、そのくせ、親交を結んだ相手と、その晩近づきになった記念の酒席で大抵いつも喧嘩をやらかしてしまふのが落ちだ。たいがい彼等は饒舌家おしゃべりで、道楽者で、勇み肌で、堂々たる恰幅をしている。ノズドウリヨフは三十五歳にもなっていないながら、まるで十九か二十の青年と変りがなく、至つて遊蕩あそびずきであつた。結婚してからも彼は少しも変らなかつた。その細君が間もなく二人の子供を残して他界してしまつたので尚更であるが、子供に至つては全く彼には無用の長物であつた。だが、その子供のことは、渋皮しぶかわの剥けた保姆が面倒を見ていた。彼は家に一日以上じつとしてゐることがどうしても出来なかつた。鋭敏な鼻で、数十露里も離れたところに定期市が立つて、いろんな集まりや舞踏会のあることを嗅ぎつけると瞬く暇に彼はもう其処そこへ駈けつけて、骨牌台カルタの前で早くも議論をおつ始めたり、大騒動を演じたりしてゐるのだつた。それというのも、こういつた連中にはありがちのことで、彼は骨牌カルタが三度の食事より好きだからである。既に第一章に於いて我々が一瞥したように、彼は骨牌カルタをする段になると、いろんな札の抜き換えや、あらゆるいんちきを心得ていて、どうもまともな勝負をやらなかつたので、大抵の場合、しまいには勝負が別な立廻りに變つてしまい、長靴でぶん殴られたり、房々ふさふさとした実に見事な頬髯を撈り取られ

たりするのだ。それで時々彼は、頬髯を片方だけにされて、それもひどく疎らにして家へ帰ることがある。しかし健康で丸々と張りきった彼の頬は、よほど巧く出来ていて、おうせ旺盛な繁殖力を包蔵ほうぞうしていると見え、髯は間もなく新らしく伸びて、あまつ剩さえ前より立派になる位だ。そのうえ何より奇態なことに、これはひとりロシアだけにしか見られない現象であろうが、暫くして、自分を袋叩きにした仲間と落ち合うと、まるで何事もなかったような顔で応対して、謂いわば、こちらも先せんぼう方も何らの蟠わだかまりを持っていないのである。

ノズドウリヨフは或る意味に於いて事件屋であつた。彼が顔を出したかぎり、どんな会合でも無事におさまつた例しがない。何かしら必らず事件を持ちあげて、或は憲兵に腕うでを扼やくして大広間からしよびき出されるか、さもなければ、自分の友達に否応なしに撮つまみ出されるのがお定まりなのである。よし、そんなことのない場合でも、尚なわかつ且、彼以外の者には及びもつかぬような醜態を演じて、食堂でただもう人の物笑いになるような酔っぱらい方をしたり、またあられもないことを口からすべらかして、しまいには自分でも恥かしくなつてしまうのである。そして全然なんの必要もないのに、飛んでもない嘘をつき、藪やぶから棒に、自分のところには青い馬がいるの、薔薇色の馬がいるのといった風な出鱈目を並べだすものだから、聞いている方でも、しまいには『おや、大将、また駄だ法螺ぼらを吹きはじ

めたな』と呟やいて、さつそく退散してしまう。よく、まるでなんの理由もないのに身辺の者を傷つけるという、けちな料簡りようけんの人間があるものだ。例えば立派な官等を持ち、外見もなかなか上品で、胸には星勲章をつけているような人物でありながら、初め諸君の手を握って、いかにも深遠な沈思黙考に誘うような題目について語っているかと思うと、忽ち面たちまと向って諸君を罵倒ばとうするのだ。それも、胸に星勲章をつけて、今の今まで沈思黙考に誘うような深遠な題目について語っていた人とはまるで似ても似つかぬ、せいぜい十四等官風情のやり口なので、ただただ呆れて、肩をすくめながら突っ立っているより他はない始末だ。ノズドウリヨフもそういう奇妙な料簡の持主であった。誰か特に彼と親しくない者があると、真先まっさきに彼はその男に恥をかかせる。つまりそれ以上の馬鹿げたことは考え出すことも出来ないような嘘八百を撒きちらして、婚礼に水をさしたり、商取引をぶちこわしたりするのだ。しかも決して自分では諸君に悪いことをしているとは考えないのだ。それどころか、再び諸君と落ち合うようなことがあると、またしても彼はさも親しげに振舞って、ぬけぬけと、『君はちつとも僕のところへやって来ないで、ひどいじゃないか。』などと言うのだ。またノズドウリヨフはいろんな点で実に多方面な、つまり口も八丁手も八丁という人間である。彼はもう忽たちまち諸君に向って、どここなしに、世界の涯へでも一

緒に行こうとすすめたり、どんな計画でも好きな計画に乗ると言ったり、また何でも手あたり次第に、諸君の望みの物と交換しようと申し込んだりする。鉄砲でござれ、犬や馬でござれ、何でもみな交換の対象となるが、しかしこれは別に欲得ずくでしようというわけではなく、ただ一途いちずに罷やみ難がたい彼の性分のせかせかした落着きのなさがさせる業である。もし定期市でいい鴨でもひっかけて、しこたま儲けるようなことがあると、彼は前からそこいら中の店で眼をつけておいた品物を矢鱈無性に買いこんだものだ——馬の頸くびわ圈、香錠、保母にやるハンカチ、種馬、乾葡萄ほしぶどう、銀製の洗面器、オランダ織の麻布、上等の小麦粉、煙草、ピストル、鯨にしん、絵、研磨機、壺、長靴、陶製食器といったものを、有ありがね金はたいて買い集めるのだ。ところが、それを無事に家へ持って帰ることは稀れで、大概はその日の中に、すっかりそれを運の好い骨牌カルタ仲間に捲かきあげられてしまえばかりか、時には、まだその上、おまけに自分の煙管パイプを、煙草入や吸すい口くちごと奪とられることもあり、罷まかり間違えば、四頭立の馬に一切の附属品——つまり軽馬車から馭者までつけて献上してしまうこともある。そんな時、当の御本人は、つんつるてんのフロックか韃鞨服にくるまって、誰か自分を馬車に乗つけて行ってくれる友達はないかと、うろろうろ探しに出かけるのである。さて、ノズドウリヨフとはこんな男であった！ 若もしかすると、それはもう過去の一性格で、も

はや現代にはノズドウリヨフ的な人間は存在しないと云う人があるかも知れない。噫！そんな説をなす人たちこそ間違っている。ノズドウリヨフは、まだまだこれから先きも永くこの娑婆から姿を消しはしないのだ。彼は到るところ我々のあいだにいたのであるが、恐らくは、ただ別な衣裳をつけているのに過ぎない。しかも皮相浅薄な人々の眼には、衣裳さえ変つておれば全然別な人間に見えるのである。

さて、この間に三台の馬車はもうノズドウリヨフ家のポーチの前へ横づけになった。家の中には一行を迎える準備は何ひとつ出来ていなかった。食堂の真中には木の踏台が立ててあつて、それに二人の百姓が乗つかつて、何かまるで果てしもない歌を口ずさみながら、壁を白く塗つており、床には一面に白ペンキが飛び散っていた。ノズドウリヨフはさつそく百姓に踏台を片づけさせて次ぎの間へ駆けこむなり、何か指図をしていた。二人のお客は、彼が料理番に食事の支度を言いつけている声を聞いた。もうそろそろ空腹を感じていたチチコフは、この模様では、とても五時より前には食卓につけそうにないと悟つた。ノズドウリヨフは戻つて来るなり、自分の村の様子を残らず紹介するからと言つて、お客を引っぱり出したが、二時間と少しかかつて、もうそれ以上は何ひとつ見せる物がないというくらいに、すっかり何もかも見せてしまった。まず第一に彼等は厩うまやを見に行った。そこ

には二頭の牝馬がいて、一方は斑ふちのある灰色あおで、一方のは鹿毛であった。それから栗毛の種馬が一頭いた。これは見たところ余り立派な馬ではなかったが、ノズドウリヨフはそれに一万ルーブリ出したと言いはった。

「一万ルーブリなんて出ちやいないさ。」と、妹婿が聞き咎めた。「こんなもの千ルーブリもしやしないや。」

「誓つて、一万ルーブリ出したよ。」と、ノズドウリヨフが言った。

「それあ、幾らとでも勝手に誓うがいいさ。」と、妹婿が応酬した。

「よし、じゃあ賭をしようか？」とノズドウリヨフが言った。

妹婿も、さすがに賭まではしなかった。

それからノズドウリヨフは、やはり以前まえには素晴らしい馬が入れてあったという、空からの厩を見せた。今そこには山羊が一匹いたが、この山羊というやつは、昔からの迷信で、ゼヒ馬と一緒に飼つておかねばならないものとされており、それにどうもこいつは馬と仲が好いらしく、まるで自分の家にもいるように、平気で馬の腹の下をくぐって歩いているものだ。ノズドウリヨフは客を案内して、鎖につないである狼の仔を見せに行った。『それら、これが狼の仔さ！』と彼は言った。『僕は、わざわざ生の肉でこいつを育ててるんだ

よ。野生のとおんなじ奴に仕立てあげようと思つてね。』それから今度は池を見に行つたが、ノズドウリヨフの言葉によると、前にその池には、とても大きな魚がいて、そいつを曳きあげるのに、大の男が二人がかりでやつとだつたとのこと。しかしその話にも妹婿は疑いをさし挟むことを忘れなかつた。『チチコフ、君にひとつ素敵もない犬の番いを見せようか。』と、ノズドウリヨフが言つた。『筋肉の固く引き緊つてることといつたら、まったく吃驚するくらいで、鼻面が——針のように尖つてるのだよ!』そう言つて二人を、非常に瀟洒な小さい小舎へと案内したが、それは四方に垣根をめぐらした、広い庭の真中に建つていた。庭へ入ると、そこにはあらゆる種類の犬がいた——ロシア種のボルゾイもおれば、純原種のボルゾイもあり、また毛色からいっても多種多様で、鳶いろのや、黒に茶の斑のあるのや、白黒の斑のや、鳶いろに斑の入つたのや、赤に斑の入つたのや、耳の黒いのや、耳の白いのもいた……。それには又あらゆる呼号、あらゆる命令が名前としてつけてあつた——『射て』だの、『罵れ』だの、『飛びまわれ』だの、『火事』だの、『薙ぎたおせ』だの、『書きなぐれ』だの、『焼け』だの、『焦がせ』だの、『北風』だの、『愛い奴』だの、『褒美』だの、『見張り』だのと……。この犬どもにとってノズドウリヨフは、さながら一家の慈父そのままであつた。忽ちどれもこれも、所謂『犬の舵』と

呼ばれる尻尾を高々とあげて、驀まつしぐら地に駈けよつて、お客を迎えようと、一同に向つて挨拶を始めたものである。その中の十匹ばかりがノズドウリヨフの肩へ前肢をかけた。

『罵れ』はチチコフにまで同じような親愛の情を示して、後肢で立ちあがりぎま、彼の唇をペロリと舐めたので、チチコフは慌あわててペットと唾を吐いた。吃びつくり驚するほど筋肉にくの引き緊つた犬というのも見たが、なかなか良い犬であつた。それから一行はクリミヤ産の牝犬を見に行つた。ノズドウリヨフの話では、それはもう盲らになつていて、間もなく斃くたばるに違いないけれど、二三年前までは実に素晴らしい牝犬めすだつたとのこと。その牝犬は、検分したところ成るほど眼が見えなくなつていた。その次ぎには水車場を見に行つたが、水車の軸についてぐるぐる廻転する、例の、ロシアの百姓たちの奇妙な表現に従えば、矢鱈やたらに跳ねまわっている。あの上臼を支える杵が無かつた。『まだ、すぐそこに鍛冶場もあるんだよ』と、ノズドウリヨフが言つた。なるほど少し行くと鍛冶場があつたので、一同はその鍛冶場も見物した。

「そら、この原つぱにはね、」と、ノズドウリヨフは野原を指さしながら、言つた。「野兎が、まるで地面も見えないほど、わんさといやあがるんだぜ。いつか僕は一匹、後肢を掴んで手どりにしたことがあつたつけ。」

「ふん、お前、野兎を手どりになんて出来るもんかい。」と、妹婿が聞き咎めた。

「ところが捕つかまえたのさ。ちゃんと捕まえたんだからね！」とノズドウリヨフが答えた。

「さあ今度は一つ、」と彼は、チチコフに向つて言葉をつづけた。「僕の地所のはずれになつているところへ案内しよう。」

ノズドウリヨフは、到るところに丘陵が散在している野原をとおつて客人を案内して行った。客は荒田こうでんと近ごろ犁すきを入れた畠との間を、拾うようにして進まなければならなかつた。チチコフはそろそろ疲れを覚えはじめた。ともすれば足の下からじくじくと水の浸み出すような箇所ところが多かつた。それほど土地が低かつた訳である。初めのうち、彼等は大事をとつて、そういうところは用心深く跨いで通るようにしたが、後にはそんなことをしても何にもならないことが分つたので、もう泥濘ぬかるみの大小などはお構いなしに、さつさと真直ぐに歩いて行つた。かなり進んだと思うと、なるほど境界らしいものが眼についたが、それは木の杣くいと細い溝で出来ていた。

「そら、これが境界だよ！」とノズドウリヨフが言った。「これから手前にあるものは、みんな僕のものさ。それに彼方あちらがわの、あの青く見えている森と、森の向うにあるものも、みんな僕のものだよ。」

「へえ、一体あの森はいつお前のものになったんだい？」と、妹婿が訊いた。「近ごろあれを買ったとでも言うのかい？ あれは、お前のものじゃなかったからさ。」

「うん、あれは近ごろ買ったんだよ。」とノズドウリヨフが答えた。

「そんなに早く、一体いつ買いこんだのだい？」

「いつって、まだ一昨日おととい買ったばかりさ。籠べらぼう棒ぼうに高い金を出したものよ。」

「だつてお前、一昨日おとといは定期市いちちにいたじやないか。」

「ちえつ、この\*2ソフロンめ！ 定期市いちちへ行くのと地所いを買うのとは一緒にやあ出来ないともいうのかい？ それあ、おれは定期市いちちへ行ってたさ、だがおれの留守いちゆうに、うちの管理人いが買っておいしたのさ。」

「なるほど、管理人いがね。」そうは言ったが、妹婿はやはり腑いに落ちないらしく、首を振った。

客はまた同じ悪い道をとおつて戻つて来た。ノズドウリヨフは二人を自分の書齋へと案内したが、そこには普通、書齋にある、書類とか書物とかいったようなものは、何ひとつ見あたらず、長サーベル剣ベルと二挺の鉄砲が懸いつていてだけで、一挺は三百ルーブリ、一挺は八百ルーブリ出したものだと言う。妹婿はちよつと見て、ただ首を振っただけであつた。それ

から、トルコ製だという短剣を見せられたが、その一振ひとふりには、どう間違つたのか 刀工サヴェリイ・シビリヤコフ というロシア名の銘が刻んであつた。それに次いでお目見得をしたのは\*3 紙腔シヤルマンカ琴であつた。ノズドウリヨフは早速、二人の前で把手ハンドルを廻して見せた。紙腔琴はなかなか好い音で鳴りだったが、内部なかで何か故障を起こしたらしく、マズルカが途中で、 \*4 マルボローは軍いくさに門出せり という歌にvari、その マルボローは軍いくさに門出せり が不意にまた或る古くから知られているワルツに転じたものである。ノズドウリヨフは、もうとつくに廻すのをやめていたが、紙腔シヤルマンカ琴の内部に甚だ勇ましい笛管ふえが一本あつて、それがいつかな鳴り止もうとしないで、いつまでも一つだけで鳴りつづけていた。さてその次ぎには、木や陶器や海泡石かいほうせきの煙管パイプがお目どおりをした——すっかり燻いぶしのかかつたのも、まだ燻しのかからないのも、鞣革なめしがわに包まれたのも、包まれないのもあり、つい最近に骨牌カルタでとつた、琥珀の吸口のついたトルコ煙管もあれば、どこかの宿しゆくえき 駅で彼に首つたけ惚れこんだ、さる伯爵夫人が刺繍をしてくれたのだという煙草入もあつて、その伯爵夫人の可愛らしい手は、彼の言葉によると世にもいみじき『シユベルフリ物』ユだつたとのこと——おおかた彼の語彙ごいでは、この言葉が最高度の完璧を意味しているのであろう。前菜に蝶鮫の乾物ひものを撮んでから、三人は五時ちかくになって食卓についた。

ノズドウリヨフの家では、どうやら食事というものが、生活の主なる要素とはなっていないらしく、料理にも大して意が用いられていなかった。焦げついたものがあるかと思えば、まだ生煮えのものがあるという為ていたらく体ていであった。恐らくは料理番が、主として靈感にまかせて、何でも手当り次第に放りこんだものと見える——胡椒が傍にあれば、胡椒を振りかける、キャベツが眼につけば、キャベツを突っこむ、牛乳でも、ハムでも、豌豆でも、お構いなしに叩きこむといった調子で——要するに、滅多矢鱈に捏こねませたもので、それでも温かい中うちなら何とか味があるだろうという代物なのである。その代りノズドウリヨフは酒にかけては眼がなかつた。まだスープも出ないうちから客の大きなコップへなみなみとポルトワインを注ぎ、また、別のコップへは擬まがいの\*5ソーテルンを注いだ。というのは、そんな県や郡の田舎市まちに、本物のソーテルンなどある筈がないからである。それからノズドウリヨフは、マデラ酒を一本もつて来させて、『これ以上の酒は、元帥だつて飲んだことあなからうぜ』と言った。成程そのマデラ酒は咽喉に焼けつくようだった。何しろ商人たちは、こういう途轍もないマデラ酒がお気に召す地主連の味覚を百も承知で、遠慮会釈なくラムで味をつけたり、時にはロシア人の胃の腑なら、この位のことは大丈夫と見越して、\*6王水まで注ぎこんでおくからである。それからノズドウリヨフは、もう一本、

特殊な酒罎を取り出させたが、それは彼の言うところでは、\*7ブルガンデイであつて同時にシャンパンでもあるとのことだ。彼は右に左に、チチコフと妹婿とへ、どちらのコツプへもしきりに酒を注いだ。ところがチチコフはふと、彼が自分のコツプへはあまり注がないことに気がついた。それがチチコフに警戒の念を起こさせた。それで彼はノズドウリヨフがどうかして話に夢中になつたり妹婿のコツプへ酒を注いだりしている隙に、急いで自分のコツプの酒を皿へこぼしてしまつた。間もなくテーブルへ清涼酒リヤビノフカが出た、それはノズドウリヨフの話では、まるでクリームそのままの味だとのことであつたが、豈あにはか図らんやツンツンと焼酎の臭いが鼻を刺した。次ぎに、何か芳香酒のようなものを飲んだが、それにはとても覚えにくい名前がついていて、主人でさえ二度目には別の名前で呼んだくらいだ。食事はもう疾とづくに終り、酒も一と通り吟味が済んだけれど、客はやはりまだ食卓を離れなかつた。チチコフも、妹婿のいる前では、例の重要な問題をノズドウリヨフに切り出す気にはどうしてもなれなかつた。妹婿とはいい条じょう、局外者には違いなく、然もこの問題は、こつそり二人だけでしんみりと語りあう必要があつたからだ。ところが、その妹婿も大して危険な人物ではなさそうだった——というのは、もうすっかり酔つぱらつてしまつたと見えて椅子に掛けたまま、頻しきりにこくりこくり居いねむ睡りをしていたからである。

そのうちに自分でもどうやら足腰あしこしの確かでないことに気がついたらしく、とうとう家へ帰ると言いだした。が、その声がまた、ロシア式にいうと、まるで釘くわ抜で頸くび圈わを馬につけるような、恐ろしくまどろっこく、懶ものうげな調子であった。

「いや、駄目々々！ 放しやあしないぞ！」とノズドウリヨフが言った。

「そんな、お前、無理をいうなよ、おらあ、ほんとに帰るよ。」と妹婿めいごが言った。「お前はまた、えらくおれに無理をいうじやないか。」

「何いってやがるんだい！ 今から直ぐに一ひと勝負やろうつてのに。」

「うんにや、兄弟、やるならお前、勝手にやるがいいよ。だがおらあ駄目だ。家内がまた、えらく憤むくれるからなあ、まったく。おれは彼女あれに定期市いの話をしなくちやならないのさ。

いや、兄弟、こうしちやあいられないよ、彼女あれを悦あばせにやならないからな。どうか、そう引き留とどめないでくれ！」

「ふん、彼女あれだの、家内だのと、そんなものあ糞くそくらえだ！ なるほど、ほんとに大事なことを二人でやろうつてのかい！」

「そうじゃないよ！ 兄弟！ 彼女あれあ、ほんとに好い女房にやうぼうだもの。まったくのところ、模範もはん的な、実に立派りっぺいで貞淑ていしよな女にやうめだよ！ いろいろとよく尽つしてくるからなあ……お前ほ

んとにするかい？ おらあ、涙がこぼれるくらいなんだよ。いや、もう引き留めないでくれ、おらあ正直な人間らしく、帰るんだ。これはまったく嘘偽りのない話なんだよ。」

「まあ、帰しておあげなさい。この人を引き留めておいたって、しょうがないじゃありませんか？」とチチコフが、小声でノズドウリヨフに言った。

「成程、それもそうだな！」とノズドウリヨフが答えた。「おれは、こういう愚図ぐずが死ぬほど嫌いなんだ！」そして、今度は声を張りあげて、こう言い足した。「じゃあ、勝手にしろよ、家へ帰って女房とさんざいちゃつくがいいや、助平野郎め！」

「いや、兄弟、おれを助平だなんて言っちゃいけないよ。」と妹婿が答えた。「おらあ、まったく家内には、いろいろ世話になつてゐるんだからな。ほんとに、氣立てのやさしい、親切な女で実意をつくしてくれることといたら……有難涙がこぼれるくらいだよ。屹度きつとまた、定期市ちでは何を見ていらつしやいましたなんて訊くだろうから、何もかも話してやらなくちゃならない……まったく可愛い女だよ。」

「じゃあ、さつさと帰つてつて、嬢かかあに出鱈目を聞かせるさ！ そら、お前の帽子だよ。」

「いんにや、お前、決してそんな風に彼女あねのことを悪く言うもんじやないよ。それあ、お前、いわばおれを侮辱することになるんだぜ、彼女あねはまったく可愛い女だもんな。」

「ふん、だからとつとその嬢んとこへ行けてんだよ。」

「うん、じゃあ帰るよ。で、おつきあい出来ないことは、まあ勘弁して貰うぜ。心底しんそこそれあ面白からうけどさ、生憎そうはいかんのだよ。」こんな風に妹婿は先に帰るいいわけ弁解を、いつまでもいつまでも繰り返していたが、自分が疾とうの昔に半蓋馬車ブリーチカに乗って門の外へ出たことにも、もうずっと前から彼の眼の前にはがらんとした野原がひろがっているだけだということにも気がつかなかった。従つて細君も、定期市の話をあまり詳しくこの男から聞くことは出来なかつたに違いない。

「碌でもない野郎さ！」と、ノズドウリヨフは窓際に突つ立つたまま、遠ざかり行く馬車を見送りながら呟わさうまやいた。「あの、だらしない恰好はどうだい！ だが、あの側馬わきうまは悪くないなあ。大分まえから、あれをまきあげてやろうと思ってるんだがね。ところがどうして、あいつはひとすじなわ一筋縄で行く野郎じゃないんだ。助平だよ、まったくの助平野郎だよ！」

それから二人は部屋へ戻つた。ポルフィーリイが蠟燭を持って来た。その時チチコフは、何処から取り出したのか知らないが主人あるじが手に一組の骨牌カルタを握っているのに気がついた。

「さあ、一つどうだい、」素晴らしいながらノズドウリヨフは、骨牌の両端をぎゅつと指で

挟んで少し曲げるようにしたため、札が分れてパラパラと前へ飛び出した。「ほんの暇つぶしに、僕が三百ルーブリぐらいで筒どうもと元を開こうや！」

しかしチチコフは相手の言うことがまるで聞こえなかったような振りをしてしながら、急に思い出したように、『あ！　そうそう、実は一つお願いがあるんだが。』と言った。

「どんなさ？」

「第一、きつと承知するって、約束して欲しいんだがね。」

「だが、頼みって、一体、なんだい？」

「まあ、いいから約束をして下さいよ！」

「じゃ、そういうことにしておこう。」

「屹きつと度ですな？」

「屹きつと度だとも。」

「そのお願いというのはこうなんで。君のお宅にも、多分、死んだ農奴でまだ戸籍簿から抹消けずってないのが相当あるでしょう？」

「うん、それがあるが、それが一体どうしたというんだい？」

「それを一つ譲って頂きたいんで、僕の名義に。」

「へえ、一体そんなものを君はどうするんだい？」

「まあ、ちよつと必要があつてね。」

「だが、一体なんのためにさ？」

「さあ、ちよつと必要なんで……そんなことはどうだつていいでしょう——要するに、必要なだけですよ。」

「うん、さては何か意図はらがあるんだな。白状し給え、何だか？」

「意図はらがあるんですつて？ 冗談じゃない、そんな詰らないもので、なにが目論もくろめるものですか。」

「じゃあ、なんだつて君はそんなものが欲しいんだい？」

「おやおや、君もよつぽど物好きな人ですなあ！ くだらないことを一々手で触つて見たり、鼻で嗅いでみなくては承知が出来ないなんて！」

「それじゃあ、どうして君は、それが言えないんだい？」

「そんなことを聞いたつて、何の得にもならないじゃありませんか？ まあ、ほんの空想みたいなことなんですよ。」

「ようし、じゃあ、それを君が言わないうちは、おれもうんと言わないぞ。」

「そうら、ね、それじゃあ君の方が卑劣ですぜ。ちゃんと誓っておきながら約束を違えるなんて。」

「ああ、何とでも言うがいいさ。だが僕は、君がその理由を話すまでは、うんと言わないからね。」

こいつは何と言ったものかな？ とチチコフは考えたが、ちよつと思案をした後、実は世間的に貫禄を示すため、死んだ農奴が欲しいのだ、自分は領地もあまり持っていないから、当座のあいだ、せめて死んだ農奴でも持っていたいので、と言った。

「嘘だ、嘘だ！」と、相手に皆まで言わさず、ノズドウリヨフが呶鳴った。「嘘だ、大将！」

チチコフは、どうもこれは拙い思いつきだった、口実としても甚だ頼りないものだと自分でも認めた。「ではまあ、打ち明けて話しますがね。」と、彼は言葉を改めて、「ただこれは他人に話して頂いては困りますよ。実は結婚をしようと思ってるんです。ところが、相手の女の両親というのが、おそろしい野心家です。まったく、どうも難物なんです！僕も今更こんな連中に関りあって後悔してるんですがね、どうしても娘の婿には、三百人以上の農奴を持った人間でなければいけないと言うんです。ところが、僕の持つてるの

だけでは、殆んど百五十人ぐらい不足なんで……。」と言った。

「ふん、嘘を言え！　嘘を！」と、ノズドウリヨフがまた喚き出した。

「いや、今度こそは、」とチチコフが言った。「まったく、これんばかりも嘘はないんですよ。」そう言つて彼は、親指で小指の頭を極めて小さく区切つて見せた。

「おれは首でも賭けるが、そりや嘘だよ！」

「だつて、そりや無理ですよ！　じゃあ、僕は一体なんですか？　どうして、そう僕が一々嘘をつかなきゃならないと言うんです？」

「それあ、君という男を見抜いているからさ、君がどえらい山師だつてことをね——まあ心安だてに言わせて貰えばだよ！　おれがもし君の上官だったら、第一番に槍玉にあげてやるところだよ。」

チチコフも、そんなにまで言われると、流石にむっとした。彼は少しでも粗野な言葉づかいや礼儀にそむく口のきき方をされるのが嫌いだった。彼はどんな場合でも、相手が非常に高貴な人物でない限り、自分に馴々しい態度で接しられるのさえ好かなかつた。そんな訳で、今もすっかり腹を立ててしまつたのである。

「断然、槍玉にあげてやるんだがなあ。」と、ノズドウリヨフは繰り返した。「おれがこ

う言うのも、別に君を侮辱するつもりではなく、心安だてに、ぎつくばらんに言ってるんだがね。」

「だが、物には限度というものがありますよ。」と、チチコフは自尊心をもって言った。

「そんな言葉づかいで見栄が張りたいのなら、兵営へでも行くがいいでしょう。」そう言うってから、こうつけ足した。「もし無償<sup>ただ</sup>ではお嫌なら、ひとつ売って下さいな。」

「なに売れ！　だが、ちゃんとおれは知ってるぞ、君は酷い野郎だから、どうせ沢山<sup>たんと</sup>は出しやすまいが？」

「へっ！　成程お前さんも相当なもんだ！　よく考えて御覧なさい！　そんなものがお前さんとここでは、一体なんです、ダイヤモンドほど高価<sup>たか</sup>いものだともいいますかね？」

「うん、そのとおりだよ。おれはちゃんと君を知ってるからなあ！」

「馬鹿な、ねえ君、どうしてそんなユダヤ人根性を出すんだろう！　そんなもの、無償<sup>ただ</sup>でくれたっていいんだのに。」

「うん、ではね、おれが決してそんな吝<sup>たか</sup>ん坊じやない証<sup>あかし</sup>拠<sup>た</sup>に、代金<sup>だい</sup>なんて鑿<sup>び</sup>一文もとらないよ。その代り、あの種馬を買い給え、そうすれば、景品につけてやらあ。」

「冗談じゃない、種馬なんか買ったって僕はしようがないじゃないか？」とチチコフは、

まったくその申し出に面喰らって、言った。

「どうして、しょうがないものか？ おれはあの馬に一万ルーブリだしたんだぜ、それを君には四千ルーブリで売ってやろうってんだよ。」

「だって、僕が種馬なんか何にするのです？ 牧場を持っている訳じゃなし。」

「まあ、話を聞き給え、君はよくのみこめていないんだよ。いいかね、僕は君から今、三千ルーブリだけ貰えばいいんだよ、残りの千ルーブリは、後で結構なのさ。」

「ところが、種馬なんか僕には要らないんだから、どうもこうもありませんよ！」

「じゃあ、薄栗毛の牝馬めすを買い給え。」

「牝馬だって要りませんよ。」

「その牝馬とさ、さつき君が見たあの灰いろの馬とで、たった二千ルーブリに負けとくよ。」

「だが、僕は馬なんか要りませんよ。」

「要らなきや売つたらいいじゃないか。今度の定期市いぢちで三倍は儲かるぜ。」

「じゃあ、自分で売つたらいいでしょう、確かに三倍にもなる見込みがあるのなら。」

「儲かることは分つてるがね、君にも儲けさせてやりたいからさ。」

チチコフは、その御好意は有難いが、灰いろの馬も薄栗毛の牝馬も要らないと、きつぱり断わった。

「それじゃあ、犬を買い給え。君にひとつ、素晴らしい番いつがを売ってやろう——まったく、ぞくぞくして震いつきたくなるようなやつだぜ！ 髭の生えた\*8ブルダスタヤで、毛が針のように上へ突つ立っていてさ、肋骨あばらの張りぐあいと言ったら、ちよつと考えも及ばないくらいで、蹠あしのうらだつてまんまるこくつて、歩いても地面じべたにつかないような逸物なんだぜ！」

「どうしてまた犬なんか僕に要るんです？ 僕は猟師じゃありませんよ。」

「でも、君が犬を飼つたらいいと思うからさ。じゃあね、犬はどうしても要らないというのなら、僕の紙腔琴シヤルマンカを買わないかい。ありやあ素敵な紙腔琴だぜ！ 正直な話、僕はあれに千五百ルーブリでしたがね、君だつたら九百ルーブリで手放すよ。」

「また僕に紙腔琴シヤルマンカが何になるんです？ 僕は、あんなものを肩にかけて門附かどづけをして歩くドイツ人とは違いますからねえ。」

「ところが、君、あれはドイツ人なんかが持つて歩く紙腔琴シヤルマンカとは、品しなが違うんだぜ。あれあ、立派なオルガンだからね。まあ、よく見てくれよ、すっかりマホガニ製なんだぜ。さあ、もう一度見せてやろう！」ここでノズドウリヨフはチチコフの手を掴んで隣りの部

屋へ曳つぱりこもうとした。で、チチコフは足を踏んばつて、自分はもうその紙腔琴のことならよく知っているからと言いはつては見たけれど、結局もう一度、マルボローの出征を歌つた曲を聴かなければならなかつた。「どうしても金子かねを出すのがいやならねえ、こうしようじゃないか、僕はこの紙腔琴シヤルマンカと、それから死んだ農奴をありつたけ君にやるから、君はあの半蓋馬車ブリイチカに三百ルーブリだけ追銭おいをうつてくれ給え。」

「まあ、よして下さいよ！ それじゃあ、僕はいつたい何に乗つて行くんです？」

「僕が別の半蓋馬車ブリイチカを君にやるよ。さあ物置へ一緒に来たまえ、そいつを君に見せるからさ！ 塗替ヌカさえすりゃあ、素晴らしい馬車になるぜ。」

ちえつ、この野郎、どこまで諄くどいことを言やがるんだらう！ こう、心で思つたチチコフは、どんなことがあつても、馬車だろうが、紙腔琴だろうが、また頭では考えも及ばないような肋骨の張つた、どんな蹠あしのうらの丸い犬だろうが、いっさい御免を蒙ろうと肚をきめた。「だつて君、馬車も、紙腔琴シヤルマンカも、死んだ農奴も、みんな一緒に手に入るんだぜ。」

「いやです！」と、チチコフはもう一度いつた。

「どうして、いやなんだね？」

「ただ、いやだから、いやなんで——もう沢山です。」

「ふん、君も変な男だねえ、まったく！ どうも君みたいな人間とは、好い友達同士の交<sup>つ</sup>際は出来かねるよ……そういう男さ、まったく！ 君が二重人格だつてことが、初めて分つたよ！」

「えつ、馬鹿な、僕が何だというんです？ 自分で判断してみたらいいでしょう——では、どうしてそんな、自分に全然必要のないものを僕は買わなきゃならないんです？」

「もういいや、そんな話は止せよ。今こそ君つて男がよく分つたよ。君はまったく、ひどい悪党さ！ じゃあどうだい、一番、銀行をやるうじやないか？ 僕は死んだ農奴をすっかり賭けるよ、紙腔<sup>シヤルマンカ</sup>琴も一緒に。」

「いや、銀行などで事をきめるのは、運否天賦<sup>うんぶてんぷ</sup>というものですからね。」チチコフはこういいながら、同時に、ノズドウリヨフの手にある骨牌をじろりと横目で眺めた。二つに分けた札がどうもいかさま臭く思われたし、裏の模様からしてひどく怪しい。

「どうして運否天賦なんだい？」と、ノズドウリヨフが言った。「ちつとも運否天賦なんてことはないぜ！ 君の方に運があれば、どれくらい大儲けになるのじやないか。そら、どうだ！ 何ちゆう好い札だい！」こういいながら、彼は相手の競争熱を煽るために、札を一枚々々めくりはじめた。「何ちゆういい札だい！ 何ちゆういい札だい！ そうらね、

いいのばかり行くじやないか！ そら、こいつはおれが何もかもすつちまった忌々しい九だ！ どうもこいつは、おれを裏切るような気がしたて、それで、じつと眼をつむって心ななかで思ったよ。畜生！ 裏切るなら裏切りやあがれ！ 碌でなしめ！ ってな。」

ノズドウリヨフがこんなことを言っているところへポルフィーリイが酒罈を持って来た。だがチチコフは、骨牌も酒もきつぱり断わった。

「どうして君は骨牌をやらないんだい？」とノズドウリヨフが言った。

「どうしてって、気が向かないからですよ。実のところ、僕は骨牌なんかで好きじやありませんからね。」

「どうして好きじやないんだい？」

チチコフは肩をすくめて、「好きじやないから、好かないんですよ。」と言い足した。

「くだらねえ男だなあ！」

「どうも仕方ありませんね。そういう生れつきだから。」

「なあに、君は助平野郎さ！ おれは初め、君をもう少しましな人間かと思つたのに、まるで君は人づきあい一つ弁わきまえていないんだ。君のような人間とは、友達として話すことなんて金輪際できつこない……なんら虚心坦懐なところも、誠実なところもありやしない！

まるでソバケーヴィツチそつくりの、碌でなしだよ！」

「どうしてそんなに僕を悪く言うんです？ 骨牌をやらないからって、僕が悪いんですかね？ 君がそんな詰らないことでがみがみ言うような人なら、死んだ農奴だけ売って貰えば沢山ですよ。」

「くそ喰らえだ！ おれは、無償ただでもやろうかと思つてたのだが、もう断じて、やらないぞ！ 帝国を三つよこしたつて、呉れてやるもんか。この大山師の、穢しみない吝しつたれ野郎め！ おれはもうこれからさき君みたいな男とは、いっさい、つきあわないよ。おい、ポルフィーリイ、馬丁のところへ行つてそう言え、この男の馬には燕麦なんぞやつちやいけないつて、乾草だけ食わせておけば沢山だよ。」

チチコフは、まさかこんな話になろうとは、夢にも思つていなかった。

「君みたいな男は、もう顔を見るのも嫌だよ！」と、ノズドウリヨフが言った。

だが、こんな争いをした癖に主人は客と一緒に晚餐をしたためた——もつと尤も、今度はもう食卓へ例のいろんな凝つた名前をつけた酒は一本も出なかった。ただ、\*9サイプラスかなんかの罌いが一本きり立っていたが、それはどのみち酸っぱいものと言われている代物に違いなかった。夕食が済むとノズドウリヨフは、チチコフのために寢床の支度が出来

ている横手の部屋へ彼をつれて行って、『そら、これが君の寢床だよ！ おれは君に、ゆっくりお寢みなどとは言いたかないのさ。』と言った。

ノズドウリヨフが出て行くと、チチコフはこの上もない不快な気持で後に残った。彼は内心で我と我身を忌々しく思い、またこんな男のところへやって来て無駄に時間を潰したことが腹立たしくて自分で自分を罵った。だが何より例の一件をノズドウリヨフに漏らしたことが口惜くやしかった。まるで赤ん坊か馬鹿者のように無分むぶんべつ別なことをやったのである。実際この一件は、決してノズドウリヨフ輩はいに打ち明けるべき性質のものではなかったのだ……。ノズドウリヨフって奴は人間の屑だ、出鱈目な嘘をついたり、大袈裟なことを言つて、飛んでもないことを吹聴して廻りかねないから、どんな悪い噂を立てられるやら、分つたものじゃない……。いけない、いけない。『おれは、ほんとに馬鹿だった！』と彼は一人で呟つぶやいた。その夜、おちおちと彼は眠れなかった。何か小さな、その癖おそろしく素敏すばしつこい昆虫むしめが、とても我慢が出来ないほどチクチクと彼の軀からだを螫さすものだから、手を一杯にひろげて彼は螫さされた箇所ところをポリポリ掻きむしりながら、思わず、『えい、畜生ども、ノズドウリヨフの野郎と一緒に鬼にでも食われてしまやがれ！』と口走つたものだ。朝はやく彼は眼を覚ました。彼の第一番の仕事は、寝巻をはおり、長靴を突っかけぎ

ま、庭をとおつて厩へ行き、セリファンにすぐ馬車の支度をしろと言いつけることだった。また庭をとおつて戻つて来ると、ぼったりノズドウリヨフに出会った。この男もやはり寝巻のまま、煙管パイプをくわえていた。

ノズドウリヨフは馴々しく挨拶をして、昨夜はよく眠れたかと訊ねた。

「まあ、どうにかね。」とチチコフは、ひどく無愛想に答えた。

「ところが僕の方は、君、」と、ノズドウリヨフが言うには、「夜よつびて、話をするのも胸糞の悪い、いやな夢を見たんだよ。それに昨日からの崇りで、口の中に、まるで騎兵の一個中隊も泊つてやがるような気持さ。ね、とろとろつとすると、夢でおれをひつ叩たたきやあがるんだよ、まったく！ 然もそいつが誰だと思う？ とても君なんかに見当がつくもんか。例の騎兵二等大尉のポツエル―エフとクヴシンニコフの野郎とだよ。」

そうさ、とチチコフは、肚の中で考えた。手前なんざ、夢でなしに本当にぶん殴られたらよかつたのに。

「まったくだよ！ それあ、とても痛かつたねえ！ 眼を覚ましてみると、畜生、ほんとに何かむずむずしやがるのさ——きつと蚤の畜生だよ。じゃあ、君は行って着物を着替えて来たまえ。僕もすぐ後から行くからね。実は、ちよつと管理人の悪党を怒鳴りつけてく

れなくちやならないのだ。」

チチコフは部屋へ帰つて、顔を洗い、着物を着替えた。そうした後で彼が食堂へ出て行くくと、テーブルにはもうお茶の道具が出ており、ラムが一本そえてあつた。昨日の昼飯と晩飯の名残りが部屋に残っていた。どうやら箸の先きがまんべんに行届かなかつたらしい。床には麵麩パンの片かけらが散らばっているし、卓布には煙草の灰までくつついている。別に手間どらなかつたと見え、主人も間もなく入つて来たが、寝巻の下に何ひとつ著つけていないので、はだけた胸から黒々とした胸毛が覗のぞいていた。この男が長い煙管パイプを手に持つて、茶碗からお茶を啜すっている恰好は、理髪店とこやの看板みたいに髪をびったり撫でつけたり、きれいにウエーヴをかけた紳士や、きちんと髪を短かく刈きつた紳士などの恐ろしく嫌いな画家にとつては、正に好個の画題であつた。

「さあ、一つどうだね？」とノズドウリヨフは、暫らく黙っていた後で言つた。「農奴を賭けて一勝負やろうじゃないか？」

「僕はもう骨牌は御免だと言つておいたでしょう。売つて頂けるのなら、買いますかね。」  
「売るなんて、いやだよ。第一、水臭いじゃないか。おれはそんな訳の分らないことに手は出さないよ。だが、銀行バンクは——別だからね。ほんの一番、手合わせをしようじゃないか

！」

「何度も言うとおりに、それは御免を蒙りますよ。」

「じゃあ、交換しちやどうだね？」

「いやです。」

「うん、それじゃあ、将棋を指そうや。君が勝てば、みんな君のものさ。何しろ、おれんところにやあ、戸籍簿から削らなきやならんやつが、うんとあるからね。えい、ポルフィーリイ、将棋盤を持って来い！」

「駄目ですよ。僕はやりやしませんから。」

「だって、これは銀行と違つて、運も誤魔化しもあつたものじゃない。腕前だけの話さ。第一、おれは碌すつぽ指し方も知らないんだから、幾手か先手を指させて貰わにや駄目だよ。」

やつて見るかな、と、チチコフは肚の中で考えた。奴と一番さして見よう。おれも将棋なら相当に指したものだし、奴さんも、将棋でいかさまはちよつと難かしからうかな。

「じゃあ、仕方がない、ひとつお相手しましょう。」

「それじゃあ、おれは死んだ農奴を賭けるから、君は百ルーブリ賭けるんだぜ！」

「どうして？ 五十ルーブリ賭けたら沢山ですよ。」

「駄目だい、そんな五十ルーブリなんて賭があるもんか？ よし、じゃあその百ルーブリに対して、中ぐらいの仔犬か、それとも時計につける金の印形いんぎようでも添えることにしようじゃないか。」

「じゃ、そういうことに。」とチチコフが言った。

「で、先手は幾手やらせるね？」ノズドウリヨフが言った。

「そりゃ、どうしてですか？ もちろん平手ひらてですよ。」

「せめて二手ぐらいは先きにやらせ給え。」

「駄目ですよ。僕だつて下手なんですから。」

「ふん、どんなに君が下手だか、ちゃんと知ってるさ！」そう言いながら、ノズドウリヨフは駒を一つ進ませた。

「ずいぶん永らく駒を手にしませんからね！」そう言って、チチコフも駒を動かした。

「下手だなんて仰つしやつても、ちゃんと知ってますよだ！」そう言って、ノズドウリヨフはまた駒を進めた。

「ずいぶん永らく駒を手にしませんからね！」同じことを言つて、チチコフも駒を動かした。

「下手だなんて仰つしやつても、ちゃんと知つてますよだ！」そう言いながらノズドウリヨフは駒を動かしたが、それと同時に、袖口でもう一つ別の駒を進めた。

「ずいぶん永らく駒を手にしませんから！……おや、おや！これは一体どうしたんですか？ 後へ返して下さい！」とチチコフが言つた。

「何をさ？」

「駒をですよ。」とチチコフは言つたが、それと同時に、すぐ自分の鼻の先きに、もう一つ別の駒がすでに女王を狙っているらしいのに気がついた。一体そいつが何処から飛び出して来たかは神様でも御存じないだろう。「駄目です。」と、チチコフはテーブルから立ちあがつて、言つた。「君とは、とても勝負なんか出来ませんよ。こんなやり方つてあるもんじゃない——一度に駒を三つも動かすなんて！」

「どうして、三つなんて言うんだい？ こいつは、間違いだよ。知らない間に動いていたのだ。これを引っこめれば、いいんだろう。」

「じゃあ、もう一つの方は、何処から来たんです？」

「もう一つの方って、どれのことだい？」

「そら、それですよ、この、女王を狙ってるやつはどうしたんです？」

「おや、おや！ 君は憶えがないんだね！」

「いや、僕は初めから、ちゃんと手を数えて、何もかも憶えていますよ。君はたった今それをここへ持って来たんです。そいつは、ほら、ここにあるべきです！」

「ここにある筈だつて？」と、ノズドウリヨフは真赤になって言った。「ふん、して見ると君はいんちきだな！」

「いや、そう言う君こそいんちきでしょう。ただそれが旨く行かなかつただけで。」

「なに、おれを一体、何だというんだ？」とノズドウリヨフが言った。「おれが、いかさまをやるとも言うのか？」

「僕は君なんだとも言やしませんかね、ただ今後はもう一切お相手をしませんからね。」

「いいや、今更やめることは出来ないぞ、」とノズドウリヨフは、赫つと急きこんで言った。「勝負は始まったのだから！」

「君の方で正直な人間にふさわしい指し方をしない以上、僕は止める権利がありますよ。」  
「嘘をつけ！ 君にそんなことは言わせないぞ！」

「いいや、君の方こそ嘘をついているのです！」

「おれはいかさまなんかやらなかったのだから、君も今更やめるって法はない。どうしても勝負をつけなきゃならないぞ！」

「そんなことを言つたつて、無理にやらせることは出来ないでしょう。」こうチチコフは冷然と言い放つて、将棋盤に進みよるなり、駒を引つ掻きまわしてしまつた。

ノズドウリヨフは烈火のようになって、チチコフに詰めよつた。その劍幕に、こちらは思わず二三歩、後へさがつた。

「是が非でも指させずにおくものか。駒を掻きまぜたつて、なんにもなりやしないぞ！順序はちゃんと憶えている。もう一度、もどおりに並べかえるだけだ。」

「いや、もうお仕舞しまいですよ。僕はもう君とは指しませんからね。」

「じゃあ、君はどうしても指さないというんだな？」

「君と将棋なんか指されないことは、分りきつてるじゃありませんか。」

「いんにや、さあ、はつきり言い給え、どうしても指さないんだね？」こうノズドウリヨフはなおも詰めよりながら言つた。

「指しません。」そうは言つたもののチチコフは、事態がいよいよ急迫して来たので、万

一の場合にそなえて両手を顔の近くへ持つて行った。この用心は確かに時宜しぎを得たものであった、というのは、その時ノズドウリヨフが力まかせに手を一つ振りまわしたからで……危く、我等の主人公のふつくらした気持の好い片類に、消しがたい汚辱あとしの痕が残るところであった。けれど幸いにも彼は殴打を免がれて、ノズドウリヨフの激げきした両手を掴んで、しっかりと押えつけた。

「ポルフィーリイ！ パウルーシカ！」と、ノズドウリヨフは手を振りほどこうとして躍起になりながら、狂気のように喚きたてた。

この声を聞くとチチコフは、こんな大人げない場面を召使どもに見られては工合ぐあいが悪いし、それに、ノズドウリヨフを捉まえていたところで所詮無駄だと思つたので、掴んでいた手を放した。ちようどそこへ、ポルフィーリイがパウルーシカと一緒に入つて来た。殊にパウルーシカというのは頑丈な若者で、こんな奴と事を構えては、全然勝味かちみがなかった。「それじゃあ、君はどうしてもこの勝負をつけないというんだな？」と、ノズドウリヨフが言つた。「そうならそうと、はつきり返事をし給え！」

「勝負をつけようにも、つけられませんよ。」そう言つてチチコフは、ちらと窓の外を見やつた。すっかり用意の出来ている自分の半蓋馬車ブリーチカが眼についた。セリファンは合図のあ

り次第、馬車をポーチへ寄せようと待ち構えているらしい。しかも、如何ともこの部屋から外へ逃げ出しようがない。扉口には二人の頑丈な鈍物が立ちはだかっているのだ。

「じゃあ、どうしても勝負をつけないというんだな？」とノズドウリヨフは、火のように顔をほてらせながら繰り返しかえした。

「君がもし、正直な人間らしくやればですが……しかし、もうお相手は御免です。」

「ああ、それじゃあ指せないってんだな、悪党！ 自分の方に勝味がないものだから、それで指さないんだな！ さあ、こいつを殴しつけろ！」こう彼は、ポルフィーリーとパウルーシカに向つて、無我夢中で喚きたてた。そして自分でも長い桜の煙管を握つて屹と身を構えた。チチコフはサツと布のよう顔色を変えた。彼は何か言おうとしたが、唇がブルブル顫えるだけで声は出なかった。

「こいつを殴しつけろ！」ノズドウリヨフはこう叫びながら、桜の煙管を振りかざして、まるで難攻不落の城塞へでも攻め寄せるように、全身を火のようにはてらせて、汗ぐっしよりになりながら前へ詰めよつた。「殴しつけろ！」と彼は、ちょうど、向う見ずな蛮勇のために大会戦の時には、その手を扼して動かさないようにと特別な命令の出ることで有名になっている無鉄砲な中尉が大突撃の時、自分の小隊に向つて『突貫ッ！』と叫ぶ、あ

れと同じような声をあげて喚いたものである。ところがその中尉はもうすっかり戦闘熱にうかされて、彼の頭は旋風つむじかぜのように混乱してしまい、眼の前に\*ゴスヴォロフ將軍の姿でもチラつくように勇躍ゆうやくして、巧名手こうみやうてがら柄に向つて突進するのだ。彼は自分の猪突猛進が総攻撃の作戦を台無しにしてしまうことも、雲に聳ゆる要害堅固な城塞の銃眼じゆうがんから数限りなき銃口がこちらを狙つていることも、自分の率いる無力な一小隊などは木葉こはば微塵みじんに吹き飛ばされてしまふだろうことも、彼の喚き叫ぶ咽喉をハタと閉ざしてしまおうとして、宿命的な敵弾がもうヒューンと唸り声を立てながらこちらへ飛んで来つつあることも、てんで考えようとはしないで、遮二無二しやにむに突進しながら、『進めえツ、進め！』と喚おめくのである。ところが、ノズドウリヨフの方が、城塞に向つて突貫する、向う見ずな、逆上した中尉であつたにしても、彼が攻め寄せて行つた城塞そのものは、いっこう難攻不落でもなさそうだった。それどころかこの城塞ときては、すっかり怖気おしげづいてしまつて、魂も身に添そわぬ為て体いたらくであつた。彼がそれで自分の身を防まもごうと思つた椅子は、逸いちちはやく二人の奴隸によつて彼の手から挽もぎ取られてしまつたので、今や彼は觀念の眼をつぶつて、生きた心地もなく、この家の主人のチエルケス製の煙管パイプを真まっ向こうから受けようと待ち構まへていた。まったく彼の身がどうなることやら、神様にだつて分らなかつたが、計らずも運

命の神が我等の主人公の脇腹や、肩や、きちんと整った軀からだのあらゆる部分を救つてくれたのである。思いがけなく、まるで天からでも降つて来たように、不意にリンリンと鳴る鈴の音が聞こえ出すと、やがてこの家の玄関へ乗りつけるらしい馬車の車輪くるまの音がはつきり聞こえて、それから、ついに停つたらしい三頭立トロイカの癩かさねの立つた馬の荒い鼻嵐と重苦しい息切れが部屋の中まで響いて来たのである。一同は思わず窓の外を見た。誰か、半ば軍服がかったフロツクを著きて口髭を生やした男が馬車から降りた。その男は玄関で案内を乞うと、ちようどチチコフがまだ先刻の恐怖から我れに返る暇もなく、人間がかつて際さい会かいした最も哀れな状態にあるところへ、つかつかと入つて来た。

「ちよつとお尋ねしますが、ノズドウリヨフさんと仰つしやるのは何方どなたですか？」その見知らぬ男は、長い煙管を驚掴みにして突つ立つているノズドウリヨフと、ようやく不利な情勢から立ちなおりかけたチチコフを、やや訝いぶかしげに見やりながら、訊ねた。

「そう言う君は誰ですか？ それから先うけたきに承うけたわりたい。」とノズドウリヨフは、その男の方へ近寄りながら、訊き返した。

「郡の警察署長です。」

「それで、どんな用があるんですね？」

「私は、或る事件の決定するまであなたが起訴されておいでになる旨、報告に接したことをお伝えに参つたのです。」

「何を馬鹿な、或る事件って、いったい何だね？」と、ノズドウリヨフが言った。

「あなたは酩酊のあまり、地主マクシーモフに棍棒をもって個人的な侮辱を加えたという事件に関係しておられるのです。」

「嘘をつけ！ おれは地主のマクシーモフなんて見たこともないのだ。」

「お黙りなさい！ 私は役人ですぞ。そういう言葉は御自分の召使に向つて仰つしやるべきで、この方ほうに対してはお慎みなさい。」

ここでチチコフは、ノズドウリヨフがそれにどう返答をするか、そんなことは聞こうともしないで、急いで帽子を掴むと、そのまま警察署長の後ろをすり抜けて玄関へ飛び出し、半蓋馬車ブリーチカへ乗りこみざまセリファンに向つて、全速力で馬を走らせよと言いつけたのである。

\*1 オポデリドック パーウエルをもじつて故意わざとこんな滑稽な名前なまえで揶揄からかつたのである。

\*2 ソフロン 古代ギリシアの道化劇作者の名前。

- \* 3 シャルマンカ 紙腔琴 長方形の箱の中に音を発する装置があり、楽譜を刻んだ紙を函の中央部に並んだ簧列こうれつの間におして把手を廻すと自動的に音楽を奏する楽器。
- \* 4 マルボロー ジョン・チャーチル (1650-1722) イギリスの名将で政治家。ヨーロッパ侯(後のヤコフ二世)に重んぜられ、女帝アンナにも仕えて、スペイン戦争その他では英国軍の名声を全世界に轟かした。
- \* 5 ソーテルン 産地ソーテルン市の名を冠したフランス産の白葡萄酒。
- \* 6 王水 強硝酸と強塩酸との混合液で、通常の酸に溶解せぬ金、白金を溶解し得る強烈な作用を有する。
- \* 7 ブルガンデイ フランス産の赤白の葡萄酒、渋味が強い。
- \* 8 ブルダスタヤ フランス種の猟犬。グリッフォンともいう。
- \* 9 サイプラス 英領サイプラス島産の酒の名。
- \* 10 スヴオロフ将軍 伯爵アレクサンドル・ワシーリエヴィッチ (1730-1800) 元帥。七年戦争に勇名を馳せた将軍。ポーランドやトルコの軍を破り、プガチョフの乱を平定し、後、フランスのイタリア侵略を阻止した功によりイタリア政府より公爵を授かる。



## 第五章

我々の主人公は、しかし、いいかげん怖気づいてしまっていた。馬車が全速力で駈けて、ノズドウリヨフの村はもう野原や傾斜地や丘に遮られて、とっくに影を没してしまつたにも拘らず、今にも追手がかかりはせぬかと、なおも彼はびくびくしながら、絶えず後ろを振り返り振り返りした。呼吸いきをするのも苦しく、胸に手を当ててみると、籠に入れた鶉うずらのように心臓が躍っていた。『畜生、酷い目にあわしやあがつて！ ちえっ！ なんちう野郎だろう！』そこで、ノズドウリヨフに対して、ありとあらゆる残酷な、思いきつた呪詛じゆそが浴びせられ、ずいぶん聞き苦しい毒舌も吐きちらされた。だが、どうしようがあるろう？

ロシア人で、然もかんかんに怒っている際だ！ それに、これは決して冗談じゆうざんごとではないのだ。『何と言つたつて、』と、彼は独り呟ささやいた。『あすこへ、ちようど折よく、警察署長が来てくれなかつたものなら、おれはあのまま二度とお天道さまも拝めなくなつてしまつていたかも知れないぞ！ まるで水の上のあぶくのように跡形もなく消えうせてしまつて、おれは子孫も残さねば、未来の子供のために、財産も、歴乎とした名前も残して

やることが出来なかつたに違いない！』我等の主人公は、ひどく自分の子孫のことを気にかけていた。

飛んでもねえ業突張りごうつくばりな旦那さ！ と、セリファンも肚の中で考えた。 ついぞこれまで、あんな旦那は見たこともねえや。ほんとに、唾でもひっかけてやりたいくらいだ！ それあな、人間ひとに物を食わせねえことは、まあいいとしてもさ、馬にはたつぷり食わせなきやあなんねえだよ、馬は燕麦が好きだからよ。それがあいつらの飯米はんまいなのさ。言つてみれば、ちちとらの給金に当るものが奴らには燕麦なんだからなあ。それがあいつらの飯米はんまいつて訳さ。

馬どもも矢張り、ノズドウリヨフのことをよく思つていなかつたらしい。栗色や『議員』だけではなく、連銭れんせん葦毛あしげまで甚く機嫌が悪かつた。彼は何時もきまつて二の次の燕麦しか宛あてわれず、然もセリファンは『えい、この獄道め！』と言わないことには、決してそれを秣槽へ入れてくれなかつたけれど、それでもやはり燕麦は燕麦で、決してただの乾草などではなかつた。だから彼は結構それで満足してモグモグやりながら、時々、それも特にセリファンが厩舎にいないような時に限つて、自分の長い鼻面を隣りの相棒の秣槽へ突っこんで、一体どんな御馳走を宛あてわれているのかと、ちよつとお塩梅を見たりしたものだ。

ところがあの家では、まるつきり乾草ばかりじゃないか——馬鹿にしてやがる！　つてんで、どの馬もみんな不服であつた。

しかし、こうした一同の不平不満は、まったく思いもかけぬ不意な出来事のために間もなく途中で吹っ飛んでしまった。馭者をはじめ一同は、先方から来た六頭立の軽馬車にばつたり打つぶかつて、殆んどすぐ頭の上で、軽馬車に乗っていた婦人連の悲鳴と、『やい、この馬鹿野郎！　おれが声をからして、よけろつ、阿呆、右へよけろつて、あんなに嘸鳴つたでねえか！　手前てめえ、酔よつぱらつてやがるのか？』と威猛いたげだか高に罵る先方の馭者の喚き声を聞いて、初めてハツと我れに返つた。セリファンは自分のうっかりしていたことに気がついたが、ロシア人の癖でこちらが悪かつたと他人の前へ頭をさげることが出来ず、すぐに彼も虚勢を張つて、『なにをつ、手前こそ何だつてこんな無茶な駈け方をさらしやあがるんだ？　眼のくり玉を居酒屋へ抵当かたにでもおいて来やがつたのかい？』こう言つてから彼は、先方の馬から引き離そうとして馬車を後へ戻しにかかつたが、どっこいそうは行かないで——いよいよ纏もつれるばかりだつた。連銭葦毛の奴は自分の両側へひよっこり姿を現わした新らしい友達を、さも物珍らしげに嗅ぎまわしている。一方、軽馬車に乗っていた婦人連は、恐怖の色を顔に表わしながら、始終の様子を眺めていた。一人は老婆であつ

たが、もう一人の方は十六七の娘で、金色の髪を小柄な頭こがらに大変手際よく、綺麗に撫でつけていた。その可愛らしい瓜実顔うりぎねがおは新しい玉子のような円味まるみをもち、またちようど生みたての玉子を女中頭が浅黒い手で陽ひに透かして検査する時にキラキラ光る太陽の光線にほんのりとそれが透けて見えるような白さであった。華奢きゃしゃな耳もまた同じように暖かい光りを受けてぽっと赤らんで同じように透きとおって見える。おまけに吃驚びっくりして軽く開けたままぼんやりしている口つきといい、涙ぐんだ眼もとといい——何もかもがまたなく可愛らしく見えたので、我等の主人公は、馬や馭者たちの間に起こった悶もんぢやく著などはすっかり他所よそにして、しばらくはうつとりと娘に見惚れていた。『後へさがらねえかい、このニジエゴロドの鴉め！』と先方の馭者が呶鳴った。セリファンは手綱をぐつと後ろへ曳っぱった。先方の馭者も同じようにした。すると馬はお互いに少し後ずさりをしたが、今度は挽革ひきがわを踏んづけて、又こんぐらがってしまった。その最中に連銭葦毛の奴は、よほど新らしい友達が気に入ったと見えて、思いがけない運命ではまりこんだ轍わだちから、いっかな抜けようとはしないで、その新しい友達の頸へ自分の鼻面をのつけて、相手の耳へ何やら囁いているようだったが、恐らく馬鹿げきったことを喋ったのに違いない、先方の馬が絶えず耳を振り動かしていたから。

が、幸か不幸かすぐ近くに村があつたので、早速この騒ぎに百姓どもがわんさと集まつて来た。百姓たちにとってはこういつた見世物が、ちようどドイツ人にとつての新聞や俱樂部と同様に、誠に有難い天の恵みであつた。で、馬車のぐるりには見る見る黒山のような人集りひとたかがして、村に残っているのは、老婆や赤ん坊だけという有様であつた。挽革がほどかれた。連錢葦毛は鼻面を二つ三つぶん殴られて、たじたじと後もどりをした。つまり相思の馬なまきが生木を裂くように無理矢理ひき離された訳である。ところが折角の友達との間を裂かれて、むかつ腹を立てたのか、それともただの我儘わがままからか、先方の馬どもは、どんなに馭者が鞭打つても、まるで根でも生えたように頑としてその場を動かかなかつた。百姓たちは、まるで信じ難いがたほど躍起になつた。彼等は先きを争つて、めいめい要らぬおせつかいをした。『おい、アンドリユーシカ、お前、右側の傍馬わきうまを曳つぱれよ。それからミチャイ小父おじ、お前は轆馬なかうまに乗っかりねえ。さあ、乗っかりねえよ、ミチャイ小父！』すると茶いろの顎鬚を生やした、痩せこけて背のひよる長いミチャイ小父が轆馬の背中へ這いあがつたが、その恰好はまるで村の鐘楼しょうろうか、否それよりも、井戸の撥釣瓶はねつるべそつくりだつた。そこで馭者が馬どもをピシピシひつぱいたが、なかなかどうして、旨くはゆかなかつた。一向ミチャイ小父も役には立たないのだ。『待つた、待つた！』と百姓た

ちが叫んだ。『ミチャイ小父、お前は傍馬の方へ乗っかりねえ、そうして轅馬にや、ミニヤイ小父を乗っからせるんだよ！』ミニヤイ小父は漆のように真黒な顎鬚を生やした、肩幅の広い百姓で、寒さに凍えた市場じゅうの連中に飲ませるに足るほどの蜜湯スレデニでも沸かせるような、あの途轍もなく大きなサモワールそっくりのどてっ腹をしていたが、彼が喜んで轅馬の背に跨がると、その重みで馬の方が危く地面じべたへへたばりそうになった位だ。

『今度は旨くいくぞ。』と百姓たちが叫んだ。『さあ、そいつを思いつきりひつぱたくんだよ、思いつきり！ うんと鞭で責めるんだよ、そら、そっちの雲雀毛ひばりげのやつをさ、—— 一体どうしやがったんだい、まるで蚊ががんぼ姥まんぼみてえに足を突つぱりやあがって？』しかし、それでも一向首尾よく行かないし、いくらひつぱたいても何の役にも立たないことが分つたのでミチャイ小父とミニヤイ小父とが轅馬に乗り、傍馬にはアンドリユーシカを乗つけた。だが、とうとう馭者は我慢がなくなつて、ミチャイ小父もミニヤイ小父も二人とも馬の背から追つぱらつてしまった。これはまったく時宜に適した処置で、馬どもはまるで一丁場いちぢやうばも息もつかずに駈けつけたように、びっしり汗をかいていたのである。彼はちよつと馬を休ませた。するとやがてのことに馬どもはひとりでに歩きだした。この騒ぎのあいだじゅうチチコフは見知らぬ若い娘をじつと見つめていた。彼は何度も娘に言葉を

かけて見ようと思つたのだが、どういふものか旨く行かなかつた。そうこうしているうちに婦人連は立ち去つてしまつて、あのなよらかな面<sup>おもて</sup>差と、なよらかな姿態と共に、可愛らしい娘の顔もいつしか幻のように消えてしまつた。そして又もや後には、街道と、半蓋<sup>ブリ</sup>馬車<sup>イチカ</sup>と、読者もお馴染の三頭の馬と、セリファンと、チチコフト、茫<sup>ぼう</sup>邈<sup>ぼく</sup>たる界限の田野<sup>でんや</sup>ががらんとして取り残されたのである。何処であろうが、到るところ、この世の中では、あの冷酷無情な、がさつで惨めな、汚ならしく黴の生えたような下層社会の中でも、或はまた単調で冷淡な、いやに退屈に取りすましたような上流社会の間でも、人は必ず一度や二度はまだそれまでに出逢つたこともないような現象に出逢つて、生涯、夢に見ることもないような感情に胸をときめかせることがあるものだ。さまざまな悲哀が折り重なつて我々の生涯をどのように織り成していようと、輝かしい喜びの光りがいつかは楽しく照り映えるものだ——それは丁度、絵に描いたような金ピカの馬具をつけた馬に曳かれた馬車が、窓ガラスをキラキラ光らせながら、突然、思いがけもなく、ついぞそれまで荷馬車より他は見かけたこともないような、惨めに荒れ果てた寒村を通り過ぎてゆくようなものだ。百姓たちは口をぽかんと開けて欠伸をしながら、帽子を被るのも忘れて、もう疾<sup>と</sup>つくにその素晴らしい馬車は通り過ぎて影も形も見えなくなつてしまつたのに、何時までもぼんや

りと突つ立っているのである。丁度それと同じように、あの金髪の娘も不意に、まったく思いがけもなく、この物語へ姿を現わしたが、また忽ち姿を掻き消してしまったのである。この際、もしもチチコフの代りに二十台の青年がいたとしたなら——それが驃騎兵であれ、学生であれ、乃至は浮世の旅路に踏み出したばかりの若者であれ——とにかく、そうした青年であつたならば、おお神様！彼の胸はどんなに昂奮し、感動し、有頂天になつたことであろう！必ずや彼は、ぼんやりと遠く眼を見張つたまま、道も忘れ、時間に遅れたらこの先きどんなひどい譴責けんせきに逢うかも忘れ、己れを忘れ、職務を忘れ、世界も、世界にありとあらゆるものをも打ち忘れて、いつまでも氣を失なつたように一つとところに立ちつくしたことであろう。

だが、我々の主人公は既に中年ではあり、それに用心深く冷靜な性質たちの人間であつた。彼にしても矢張り物思いに沈みはしたけれど、それはより着実な考え方で、決して無分別なことではなく、一面彼の考えには非常にしつかりした根柢こんていさえあつた。『なかなか好い娘つ子だつた！』と彼は煙草入をあけて嗅煙草を一服かいでから、呟やいた。『だが、あの娘の何処が一番いいんだらう？ どうやらあの娘は、ついこの頃どこかの寄宿学校か国立女学院を卒業したばかりらしく、まだどこにも、いわゆる女臭いところ、つまり、女

性としての最も不快なところがないから好いのだ。あの娘は今のところまだ子供みたいなもので、何もかもが単純で、何でも思ったとおりに喋り、可笑しいままに笑うのだ。あの娘はまだどんなものにも仕上げることが出来る、玉にもなれば、瓦にもなる——が、恐らく瓦になつてしまふだろう！ まあ、今あの娘を、お袋さんか叔母さんの手へ委せて見るがいい。そうすれば、ものの一年もたてば、すっかりあの娘は女のいやなところで一杯になつて、生みの父親でさえ見違える位に變つてしまふだろうから。いつの間にか威張つたり気取つたりすることを覚えこみ、聴き覚えの教訓にしたがつて身を振舞い、誰とどんな話を、どの位したらよいかとか、誰をどんな風に見たらいいかというようなことばかりに工風を凝らして頭を悩ましたり、自分が少しでも余計なことをしゃべりはしないかと、しよつちゆう、そんなことが心配になるのだ。そして挙句の果にはすっかり自分でこんぐらがつてしまい、とどのつまりは一生涯嘘をついてまわるばかりの、何ともはや得体の知れぬ代物になつてしまふのだ！』ここで彼は暫らくのあいだ口を噤んでから、やがてこう言い足した。『だが、あれは誰の娘だろう？ 親父はどんな人間かしら？ 金持で気前のいい地主だろうか、それとも奉職ちゆうにたんまりと財産を拵えたような、親切気のある人間ではなからうか？——それを突きとめられたらいいんだがなあ。だって、仮に

あの娘に二十万ルーブリも持参金がついてみる、それこそとても素晴らしいお膳ぜん立だてじゃないか。どうして、それだけあれば、いわゆる相当な人間の幸福がでっちあげられるというもんだ。』この二十万ルーブリという金高が、彼の頭の中で非常に魅惑的な夢を描きだしたため、先刻、あの馬車のまわりでごたごたしている間に、どうして馭者か馬丁からあの一行がどこの誰だか訊き糺しておかなかつたのだろうと、彼は我れと我が身に腹を立てはじめた位であつた。だが、間もなくソバケーヴィツチの村が見えだしたので、そうした考えは消え失せて、またしても例の一件に心を奪われて行つた。

その村は彼には相当大きなものに思われた。白樺と松との二つの林が、ちようど二つの翼をひろげたように——村の右と左とに、片方は黒々として、片方は明るい色をして伸びていた。その真中のところに、中二階のついた木造の家が見えており、屋根は赤く、壁は鼠いろ、というよりは寧ろ粗むし壁あらかべのまま——ちようど今時、屯田兵とんでんへいの宿舎や、ドイツ人の移民の住居に建てられているような家だ。これを建てるにあたって建築師は、さぞひつきりなしに主人の好みと争つたであろうことが、まざまざと思いやられる。その建築師は形式ばつた男で、頻りに釣合シムメトリーいを主張したが、主人の方はただもう便利なことばかりを重んじたものと見え、対称として一方の側にも当然あるべき窓ことごとが尽くふさがれてしまつ

て、その代りに、暗い納戸なんどにでもつけたらしい小さな小窓が一つ切り開けてあるだけというような結果になってしまった。正面の破風はふもやはり、建築師がどんなに苦心しても、家の中央へ持つて来ることが出来なかつた。それというのも、主人が片側の円柱を一本取り除くようにと命じたからで、そのために、四本という設計になっていた円柱が、三本きりになってしまったのである。庭は、丈夫な、途方もなく太い木の柵で囲まれていた。この地主は何によらず、ひたすら頑丈にすることばかり心掛けているらしく、厩舎にも、物置にも、台所にも、幾世紀でも保ちもそうな、実にどつしりとした、太い丸太が使つてある。村の百姓どもの小屋にしても、まったく素晴らしい骨組で、壁に煉瓦を使つたり彫刻の飾りをつけたり、その他くだらない工風が何一つしてない代りに、すべてが頑固いつてんぼり一点張りに仕上げてある。井戸桁いどげたにまで水車か船にでもなければ使わないような、がっしりした櫛かしざ材いが用いてあつた。要するに何を見ても実に丈夫そうで、決してビクともしないような、頑固で不細工な仕組になつていた。ポーチへ馬車を乗りつけながら、チチコフは、殆んど同時にちらと二つの顔が窓から覗いたのに気がついた——頭巾帽をかぶつた、胡瓜のように細長い女の顔と、モルダヴィヤ南かぼちや瓜かぼちやのようにずんぐりした男の顔とだ。モルダヴィヤ南かぼちや瓜かぼちやというやつは、瓢ひょうたん箆へんとも呼ばれて、ロシアではこれでバラライカを拵こしらえらる。二に

弦げんの手軽なバラライカで、その音も床ゆかしい爪弾つまびきを聴ききに集まる、胸むねや首筋くびすじの白い娘たちめくはに胸むねせをしたり、口笛くちふえを吹いたりする、あの二十歳はたち前後のおしやれで、剽ひょうきん軽きんな若者わかものたちの装飾かざりでもあり、慰なぐさめでもある。さて二つの顔は、チラと覗のぞいたと思おもつたら、すぐ引ひつこんでしまった。ポーチへ、青いあお豎襟たてえりのついた灰色はぐの上うへ衣えを著きた従僕じゆやくが出て来て、チチコフを玄関げんかんへ招まねじ入れたが、既にそこには主人しゆじんが出迎でむかえていた。彼は客きやくの姿すがたを見ると、いきなり『どうぞ！』と言いつて、チチコフを奥おくへ連れて行いつた。

チチコフが横眼よこめでチラと眺ながめると、今度はソバケーヴィツチの恰好ちやうこうが中なかぐらいの熊くまそつくりに見みえた。著きている燕尾服たんぷいふくが熊くまの毛色けしきそのまま、袖そでも長ながければズボンも長ながく、おまけに鰐わにあし足あしでドタバタと外輪ぐわいりんに歩あいて始は終しゆう、他人ひとの足あしを踏ふんづけるのだから、いよいよ熊くまそつくりということになる。顔かほも火ひのような赧あから顔かほで、五カペーカ銅貨どうがのような色いろをしてゐる。尤もつともこういふ顔かほは世間よこしまにざらにあつて、これを仕上しじやうげるのに造物主ぞうぶつしゆは大おほして苦心くしんも払はわず、鑪やすりだの錐きりだのといったような小道具せうたうぐは一つも使つかわないで、ただおおざっぱに刻きただけだ。斧きりをチヨンと入れると鼻はなが出来でき、もう一つチヨンとやると唇くちびるが出来できる。そこで大きな丸鑿まるのみで眼まなこをこじあけ、細かい仕上しじやうげなどは一切いっせ省しやういて、『生命せいめいあれ！』と言いうなり、この世よの中なかへおつぽりだしだした訳わけである。ソバケーヴィツチの顔かほは全くまるごとさういつた具合ぐあい

に、恐ろしく頑丈で荒削りに出来ていた。それも胴の上に支えているというよりは寧ろぶらさげているといった方がいらいだ。然も猪頸いくびで全然どちらへも曲らない。どちらへも曲らないから、自然、話し相手の顔は滅多に見ないで、いつも暖炉の端か扉口へ眼をやっているのだ。チチコフは食堂を通りすぎながら、もう一度チラと横眼で相手を見やった。熊だ！ まったく熊だ！ 成程こうまで不思議に似ているのも無理はない——名前からして\*1ミハイル・セミヨーノヴィツチというのだから。チチコフはこの男が他人の足をよく踏んづける癖のあることを知っていたので、出来るだけ自分の足許に気をつけて、なるべく相手を先きに立たせるようにした。主人は自分でも、どうやらそういう自分の悪い癖を知っていたらしく、さつそく『あんたの足でも踏んづけましたかね？』と訊ねた。しかし、チチコフはその心遣こころづかいを感謝して、まだ別段そんな気配はないと答えた。

客間へ入るなりソバケーヴィツチは安楽椅子を指さして、また『どうぞ！』と言った。チチコフは腰をおろすと、四方の壁と、壁に懸けてある絵とを眺めた。その絵はどれもこれも、昔の勇士や、ギリシアの将帥しょうすいたちの全身像の銅版画ばかりであった。真赤なズボンに軍服をまとい、鼻に眼鏡を掛けている\*2マヴロコルダートだの、\*3ミアウリスだの、\*4カナリスだの。こうした英雄たちはどれもこれも、ぞっとするほど太い腿ももを

して、前代未聞の素晴らしく大きな口髭を生やしている。こういう堂々たるギリシア人のあいだに混つて、一体どういう訳で、また何のために此処にあるのか知らないが、ひよろひよろに痩せた\*5バグラチオン將軍の像に、小さな旗と大砲の図柄ずがらを下につけたのが、至つて細い額縁がくぶちに入れてある。その次ぎには又、ギリシアの女傑じよけつボベリーナの像が懸つてゐるが、その片方の足だけでも、今どきの客間にうようよしてゐる伊達者の胴体よりはずつと太いくらいに思われる。主人は自分が頑丈に出来てゐるものだから、部屋の中まで同じように頑丈な人間の像で飾ろうと思ひ立つたものらしい。ボベリーナのそばの、すぐ窓際には、鳥籠が一つ懸つていて、黒つぼい地に白い斑点のある鶉つぐみが一羽その中から覗いてゐたが、それがまた、ソバケーヴィツチによく似てゐた。客と主人が口を嚙んで二分とは経たないところへ、不意に扉があいて主婦が客間へ入つて来た。非常に背の高い婦人で、家で染め直したらしいリボンのついた頭巾帽をかぶつてゐた。彼女は棕櫚しゅろの木のように、つんと首をたてたまま、しずしずと入つて来た。

「家内のフェオドウーリヤ・イワーノヴナです。」と、ソバケーヴィツチが言った。

チチコフはフェオドウーリヤ・イワーノヴナに近づいて、彼女が殆んど相手の唇へ押しつけるようにした手に接吻したが、その刹那せつな、彼はふと、その手が胡瓜漬きゅうりづけくさいことに

気がついた。

「なあ、お前に紹介ひきあわせておくが、」と、ソバケーヴィツチは言葉をつづけた。「この方がパーウエル・イワーノヴィツチ・チチコフさんだ！ 知事や郵便局長のところでお近附ちかづきになつた人だよ。」

フェオドウーリヤ・イワーノヴナは、女王に扮した女優の仕草そっくりに、ちよつと首を動かしただけで、やはり『どうぞ！』と言つて椅子をすすめた。それから自分も長椅子に腰をおろすと、モスリンの肩掛かたかけをぎゆつと緊め直しただけで、それきり眼まばたき一つしなれば眉毛ひとすじ動かさなかつた。

チチコフは再び眼をあげて、またしても太い腿と恐ろしく長い口髭を持ったカナリスや、ポベリーナや、籠の中の鶉つぐみを眺めた。

殆んど五分ぐらいのあいだ、三人ともじつと沈黙を守っていた。ただ鶉が、鳥籠の底にまいてある穀粒を拾う嘴音がコツコツと聞こえるだけであつた。チチコフはもう一度部屋と部屋の中にある物を眺めやつた——何もかもが恐ろしく頑固で不細工に出来ていて、それが奇妙とこの家の主人にじっくり似ていた。客間の隅に胡桃材のずんぐりした書物卓デスクが据えてあるが、不態ぶざまな四本脚で立っている恰好がまったく熊そっくりだ。テーブルも、安

楽椅子も、小椅子も——みんなひどく重く苦しく落着きのない容子ようすをしている。要するにありとあらゆる物が、椅子の一つ一つまでが、まるで『おれもソバケーヴィッチなんだぞ！』とか、『おれもソバケーヴィッチの親類なんだ！』とでも言っているようだ。

「私たちは裁判所長のイワン・グリゴリエヴィッチのところ、あなたのお噂をしたんですよ。」とチチコフは誰ひとり話を始めようとする様子がないので、とうとう自分の方から口をきつた。「先週の木曜でしたがね。あの晩はとても愉快でしたよ。」

「左様さようさ、あん時は所長の家うちへ行きませなんだわい。」とソバケーヴィッチが答えた。

「あれはなかなか立派な人ですねえ！」

「誰がね？」とソバケーヴィッチは、暖炉の端を見つめながら言った。

「裁判所長ですよ。」

「ふうん、あなたにはそんな風に見えるかも知れないが、あいつはフリー・メーソンに過ぎないんでね、まずこの世に二人とはない馬鹿野郎でしょうて。」

チチコフはこのような辛辣しんらつな批評いさぎに聊いさぎかたじたとになったが、すぐにまた立ち直って、こう言葉をついだ。「勿論、めいめい人間には弱点がありますからね。その代り、あの知事は実に勝すぐれた人物じゃありませんか！」

「知事が勝れた人物だつてね？」

「ええ、そうじゃありませんか？」

「あいつは世界一の強盗でさあ！」

「えつ、知事が強盗ですつて！」チチコフはそう言ったきり、どうして県知事が強盗の仲間へ入れられてしまったのか、さっぱり訳が分らなかつた。「正直なところ、どうもそんな風には思われないうんですがねえ。」と彼はつぶけた。「私に言わせて頂けば、あの方の振舞いには全然そんな様子が見えませんよ。いや、それどころか、まるで反対に、ずいぶん優しいところがあるじゃありませんか。」そう言つて彼は、知事が手ずから刺繍をした財布などを証拠にあげて、愛想のいい彼の顔つきをしきりに褒めそやした。

「あの面つらからして強盗面づらでさあ！」とソバケーヴィツチが言つた。「あいつに出刃でばでも持たせて街道筋へおつ放してみなされ、すぐに人殺しをやるから。一カペーカでも奪とるために平気で人を殺しますからね！ あいつと副知事の野郎とは、\*6ゴグとマゴグみたいな好い相棒ですわい。」

いや、奴やつこさん、あの連中とは仲が悪いんだな。とチチコフは肚の中で考えた。それじゃあ一つ、警察部長を持ち出してやろう。あの男とは仲がよさそうだから。——「そ

れはともかくとして、私は、」と彼が言った。「実のところ、警察部長が一番好きなんですよ。いかにもあの人は気性がさつぱりしていて、ぎつくばらんですからね。正直なところが顔で分りますよ。」

「悪党でさあ！」とソバケーヴィツチは、ひどく冷やかに言つてのけた。「あいつは人を売りもすれば瞞だましもする、それでいて、あんた方と一緒に飯まで食いおるのじゃ。わしには、あいつらのことがちやんと分つとる。あいつらはどいつもこいつもみんな悪党ばかりですよ。あの市まちじゆうが悪党で一杯なんぞな、悪党が悪党におんぶをして、悪党を追つかけ廻してうせるのですわい。どいつもこいつもキリストを売る奴ばかりでな。あの中で、どうにか人間らしいのは検事ひとりだが、あれだつて本当を言やあ、豚ですよ。」

こんな風な、簡単ながら、なかなか穿つた人物評を聞かされると、流石のチチコフももう他の役人を幾ら持ち出しても駄目だということが分り、それにソバケーヴィツチは他人ひとのことを好く言うのが嫌いなんだと気がついた。

「ねえ、あなた、お食事に参りましょうよ。」と、ソバケーヴィツチに向つて細君が言つた。

「じゃ、どうぞ！」とソバケーヴィツチが言った。そこで前ザクレスカ菜の出ているテーブルへ

近よつて客と主人とが慣例どおりウオツカを一杯ずつ飲んでから、都鄙とひの別なくロシアの津々浦々でやるようにいろんな塩物や或る種の刺戟性の珍味で口直しをすると、一同はぞろぞろと食堂へ向つたが、先頭に立つた主婦は、まるですると泳いでゆく鷺鳥がらうのようだった。小さな食卓に四人前の食器が並べてあつた。間もなく四人目の席へ姿を現わしたのは——既婚の婦人とも老嬢ともつかず、そうかといつて親戚の女とも家政婦とも、乃至はただの居候とも、確かなことはちよつと言えないが、——ともかく頭巾帽は被らないで、斑まだら模様の肩掛をした、年の頃三十前後の婦人であつた。よく世間には、それ自体として存在するのではなく、汚点しみか斑点のように他人に附随して生活している人間があるものだ。そう言う連中は、いつも同じ席を占め、いつも同じ恰好をしているから、殆んど家具のように見做みなされて、こういう手合いは生まれてこの方、一口も物を言つた例しもないように思われるが、女中部屋か物置へでも行つて見ようものなら——それこそ豈図らんやだ！

「うん、きょうの玉菜汁シチイはなかなか上出来だ。」ソバケーヴィツチは玉菜汁シチイを一匙すすつて、そう言いながら大皿から、玉菜汁シチイには付きものの、羊の胃袋へ蕎麦の粥や脳味噌や足の肉を詰めた ニヤーニヤ という料理の大きな一切れを取つた。「こんなニヤーニヤは

、「と彼はチチコフの方を向いて、言葉をつづけた。「とてもあの市<sup>まち</sup>じや食えませんぜ。あすこじやあ、まったく何を食わせられるか分つたもんじやありませんからね！」

「しかし知事のところでは、なかなか凝つたものを出しますよ。」とチチコフが言った。  
 「ところが、あれを何で拵らえるか御存じですかね？ それが分つたら、とても咽喉は通りやしませんぜ。」

「さあ、その拵らえ方は存じませんから、そういうことは何とも私には申されませんが、しかし豚のカツレツとポイルド・フィッシュは素敵でしたよ。」

「そんな風に思えただけですよ。あいつらが市場で何を仕入れるか、わしはちやんと知っておる。あの碌でなしの料理人<sup>コック</sup>めがフランス人に教わりやあがつてね、猫を買つてきて、そいつの皮を剥<sup>は</sup>いで兎の代りに食卓へ出しやあがるのさ。」

「あれまあ、なんて気味の悪いこと仰つしやるのです！」と、ソバケーヴィツチの細君が言った。

「そりやお前、仕方がないよ！ あいつらの家では、そうやっているんだもの。おれが悪いのじゃないさ、あいつらの家ではみんなそんなことをしてやがるんだからなあ。何によらず、あまり物が出るちゆうと、家のアクーリカ<sup>うち</sup>だつたら、さつさと、尾籠な話だが、溜<sup>た</sup>

めおけ  
桶へ捨ててしまうような物でも、あいつらはスープの中へ入れるんだ、スープへだよ！

スープへそんなものを入れやがるんだ！」

「あなたは、お食事の時に限って、屹度きつとそんな話をなさるのねえ。」と、ソバケーヴィツチの細君がまた反対した。

「なんの、お前、」とソバケーヴィツチが言った。「おれがもし、自分でそんなことをしたならだけれど、ちやんとお前にそう言っておくが、おれは決してあんな穢けがらなものには食わないからね。いくら砂糖でまぶしてあつても、蛙かえるなんぞおれは口へ入れないよ。牡蠣かきなんてものにも、手を出さないぞ、牡蠣かきが一体どんな恰好をしたものか、ちやんとわたしは知つとるからな。さあ、この羊肉ばらにくをあがつて下さい。」と、彼はチチコフの方を向いて言葉をつづけた。「これは羊の肋ばらにく肉にお粥かゆを添えたものですよ。あの先生がたの台所で市場に四日も店晒しになつてたような羊の肉で拵しららせるフリカツセーなぞたあ物が違いますからね。あんなものを考え出したのは、みんなドイツやフランスの医者どもでな。あんなものを考え出しおつた奴は、絞り首すにしても飽き足りないと思いますわい。減食療法なんてことを発明してからに、腹すを空かして病気をなおすんだとき！ あれあね、ドイツ人という奴は自分ひよわが繊弱ひよわいもんだから、ロシア人の胃の腑はらもそれで片づくものと思ひこんで

いくさるのでき！　なあに、あれあみんな嘘ですよ、いい加減の思いつきで、あんなことはみんな……」こう言いかけて、ソバケーヴィツチは腹立たしそうに頭かぶりさえふった。「なんぞといえ、文明だ文明だとぬかしやあがるが、文明なんて……べえッだ！　もつと他の言葉で言いたいところだが、食事ちゆうだから控えておきます。だが、わしのとこじゃあ、そうはしない。わしのとこじゃあ、豚なら豚をまるごと食卓へ出す、羊なら羊で、まるごと出すし、鷺鳥なら鷺鳥で、まるごと出します！　わしはたとえ二皿きりでも構わなから、思う存分、鰹たらふく腹はらくいたい方でしてな。」なるほどソバケーヴィツチは事実でそれを証明した。彼は羊の筋肉を半分、自分の皿へぶちまけると、それをすっかり食ってしまい、最後の骨の一本までがりがりやって、きれいに平らげてしまった。

なるほど、とチチコフは思った。こいつは言うだけのことはあるわい。

「わしのとこじゃあ、そうはしませんよ。」と、ソバケーヴィツチはナプキンで手を拭きながら言った。「わしのとこじゃあ、あのプリューシキンのとこみたいな真似はしませんよ。あの男は農奴を八百人も持ってやがる癖に、わしがとこの牧場番より劣った暮らしをして、実にひどいものを食ってますぜ。」

「そのプリューシキンって、どういう人ですか？」とチチコフが訊ねた。

「悪党でさ。」と、ソバケーヴィツチは答えた。「とても、想像も出来ないくらいの吝嗇けち漢んぼでな。監獄の中の懲役人だつて、あれよりや優ましな暮らしをしていませなあね。あいつの家じゃあ、みんなを飢え死にさせてしまったのですからね。」

「本当ですか？」とチチコフは乗り気になつて、「実際その人のところでは、非常に沢山の死ひとしにがあつたと仰つしやるんですね？」

「まるで蠅のようにバタバタと死ぬんでさあ。」

「蠅のようにですつて？　で、なんですか、その人の村まではお宅からよほどありますか？」

「五露ヴェルスト里リはありますなあ。」

「五露ヴェルスト里リ！」とチチコフは思わず口走つたが、胸が少しドキドキするようにさえ思つた。「で、お宅の門を出てから、右へ行くのでしょうか、それとも左へ行くのでしょうか？」

「あんな犬のところへなんぞ行く道は、知らない方が身のためですぜ！」とソバケーヴィツチが言つた。「あんな奴の家へ行くくらいなら、どこか曖昧あいまい宿やどへでも行つた方が、ただ言訳がたちますからね。」

「いや、お訊ねしたのは別にその……ただ、いろんな処をちよいちよい知っておきたいのが手前の性分でしてね。」とチチコフは、それに対して弁解した。

羊の筋肉に次いで凝乳饅頭が出たが、こいつは一つ一つが皿よりもずっと大きかった。その次ぎには犢ほども大きさのある七面鳥が出た。これには、玉子だの、米だの、肝臓だの、そのほか訳の分らない、いろんな、さぞかし胃にもたれそうな代物が詰めてあった。それで午餐はおしまいになったが、食卓をはなれた時、チチコフは四五貫も目方がふえたように思った。客間へ戻ると、そこには何時の間にか小皿に盛ったジャムが出ていた——梨とも、梅とも、他の果物とも見当のつかないジャムだったが、それにはもう、主人も客も手を出さなかった。主婦は、それを他の小皿へ取り分けるために部屋を出て行った。その隙を狙って、チチコフはソバケーヴィツチの方へ向き直った。ソバケーヴィツチは、あれだけ鱧腹つめこんだ後のこととて、安楽椅子に凭りかかったまま、時々ひくい呻き声を漏らしながら、口で何か訳の分らない音を立てるたんびに十字を切っては、その手で口を押え押えしていた。チチコフは彼に向って、『ちよつと御相談いたしたいことがあるんです。』と言った。

「まだこんなジャムがありましたよ。」と、主婦が小皿を持って入って来ながら言った。

「大根を蜂蜜で煮たのでございますがね。」

「それは、また後で食べるよ！」とソバケーヴィツチが答えた。「お前は自分の部屋へ行っていな。わしはパーウエル・イワーノヴィツチと、上衣をぬいで一休みするからね！」

主婦は、ではすぐに羽根蒲団と枕を持って来させましようと言ったが、主人が『いや、それには及ばん、安楽椅子でちよつと休むのだから』と言ったので、そのまま部屋を出て行った。

ソバケーヴィツチは、ちよつと首を俯むけて、一体どんな用件かと、聴耳を立てた。

チチコフは、ひどく遠まわしに話を切り出して、まずロシア帝国の全般的な問題にちよつと触れ、その国土の廣大無辺なことを褒めそやして、古えいにしのローマ帝国でもこれほど大きくはなかつたから外国人が驚異の眼を瞠みはるのも無理からぬことだなどと言った……。

（ソバケーヴィツチは首を垂れたまま、じつと聴いていた。）さて、この比類なき、栄ある帝国の現行法によれば、一旦戸籍簿に登録された農奴は、たとえこの世を去つても、次ぎの人口調査が行われるまでは矢張り生存者なみに取扱われるが、これは官庁に、無益なつまらない調査事項をあまり過大に負担せしめないためと、事務の煩雑を避けんがために他ならない。そうでなくても、国家機関はすでに煩雑を極めているのだから……。　（ソバ

ケーヴィツチは首を垂れて、じつと聴いていた。しかし、その便法べんぼうがどんなに結構なことであるにしても、生きたもの同様に租税を払わされる以上、多くの地主にとってはかなり迷惑である。そこで自分は、貴下に対して個人的な敬意を感じるところから、その、まったく並々でない重荷を、幾分でもこの身に引き受けたく思っているのだと言った。チコフは肝腎の目的物については極めて慎重な言葉を使つて、死んだ農奴などとは決して呼ばないで、ただこの世にいないものと言つた。

ソバケーヴィツチは矢張り、首を垂れたまま、じつと聴いていたが、その顔には表情らしいものは何ひとつ浮かんでいなかった。まるでこの男の軀からだには魂が全然宿っていないのか、それとも魂はあつても、それがあつておきるところにはなくて、あの不死身の\*7カシチエイの魂みたいに、どこかの山の向うで、厚い殻の中へでも閉じこめられているため、その中でどんなにあばれても表へは何の揺ぎも伝わって来ないのではないかと思われた。

「そんな訳なんですが?……」とチコフは、流石にわくわくしながら返答を待った。

「あんたは死んだ農奴が御入用なんですネ?」とソバケーヴィツチは、まるで穀物の話でもするように、少しも驚いた顔は見せないで、至極あっさりと言つてのけた。

「そうです。」とチコフは答えたが、言葉を柔らげるために、「なに、この世にいない

農奴<sup>やつ</sup>をね」と言い足した。

「それあ、ありますよ。ない筈はありませんさ……。」とソバケーヴィツチが言った。

「もしおありでしたら、なんでしようね、きつと喜んで厄介ばらいをなさいますようね？」  
「よろしい、じゃ売りましょう。」とソバケーヴィツチは、今度は少し首をあげて言ったが、ハハアこいつめ、確かにこれで一儲けする気だなど、相手の肚を見抜いていた。

ちえつ、くそ！ とチチコフは心の中で忌々しく思った。こん畜生め、おれがまだ買うなんて、そこで今度は口に出して、「では、仮りに値段はどれくらいで？ 尤も<sup>もつと</sup>こんな代物に……値段のなんのというのは変ですがね……。」

「あんたと余計な掛引<sup>かけひき</sup>をするまでのことはないから、あつさり言いますが、一人あたり百ルーブリですな。」とソバケーヴィツチが言った。

「えつ、百ルーブリ！」と叫ぶなり、チチコフは口をポカンとあけて、相手の顔をまじまじと見つめたが、一体それは自分が聞き間違えたものか、それとも、生まれつきソバケーヴィツチは口重<sup>くちおも</sup>で舌廻りが悪いため、何か飛んでもない言い損いをしたものか、ちよつと見当がつかなかった。

「どうですかね、それでは高価<sup>たか</sup>いとでも言いなざるんで？」と言ってソバケーヴィツチは、

やがてこう付け加えた。「じゃあ、あなたの附値つけねはどの位なんでしょう？」

「私の附値ですって！　どうもこりや、二人とも何か感違のちがいをしてしているんじゃないでしょうかね、それともお互いによく話が会得のちめないで、抑々そもそもその品物が何だったか、うっかり忘れてるんじゃないやありませんかね。じゃあ一つ私の方から誠心誠意のところを申し上げましょう。一人あたり八十カペーカ——これがもう、精一杯ぎりぎりの値段ですよ！」

「とんでもない、八十カペーカなんて。」

「そんなこと仰つしやつても、私の考えでは、どうもそれ以上は出せませんよ。」

「だが、草鞋わらじを売るのたあ訳が違いますぜ。」

「ええ、ですがね、やはり人間とも違うつてことに御異存はないでしょう。」

「じゃあ、あなたは、ちゃんと戸籍に載つてる農奴を、二十カペーカやそこいらで売る馬鹿があると思つてなさるのかね？」

「だがちよつと待つて下さい。あなたは どうしてそれを戸籍に載つてる農奴だなんて仰つしやるんですか？　その肝腎の農奴は疾とうの昔に死んでしまつて、もう影も形もない奴のことですよ。しかし、そんなことをこれ以上かれこれ詮議せんぎだてしたつて詰まらないから、じゃあ奮発ふんぱつして一ルーブリ半ずつで買ひましょう。それ以上は出せませんよ。」

「あんたは、よくもそんな値をつけてしやあしやあしていられますねえ！ そんな掛引は止して、まともな値段をつけたらどうです！」

「駄目ですよ、ミハイル・セミヨーノヴィツチ、まったく正直なところ駄目です。もうそれ以上は出せないといったら出せないんですからね。」チチコフはそう言ったものの、それでも、もう五十カペーカだけ奮発した。

「どうしてあんたはそうけちけちなさるのです？」と、ソバケーヴィツチが言った。「まったく、こりや高価たかありませんぜ。ほかの悪党たかだったら、あんたを誤魔化して、農奴どころか、くだらない代物を掴つかせるところだが、わしとこのは、まるで胡桃くるみみたいにかつしりした、選りぬきのやつばかりなんだからね。伎倆うでのしっかりした職人か、さもなければ丈夫な百姓ひやうしんばかりでな。ようがすかね、例えばあの馬車大工のミハーエフじやて！ あいつは立派な弾機ばねつきの馬車より他にやあ拵しららえなかつただ。モスクワ出来のによくあるような、一時間でぶっこわれるような代物とは違って、とてもがっちりしたもので……ちやんと自分で革も張れば、漆も塗ぬつたものでな！」

そこでチチコフは口を開いて、だがそのミハーエフだってもう疾うの昔にこの世を去っているのだと注意しようと思つたが、ソバケーヴィツチは、いわゆる自分の弁舌べんぜつにつりこ

まれて、滔々とまくし立てたものだ。

「それから大工のプローブカ・ステパンはどうだ！ わしはこの首を賭けてもいいが、あんな好い百姓は滅多にあるもんじやない。大した力ちからもち持ちでな！ あいつを近衛兵このえへいにでもしたら、どんなえらい出世をしたか分つたものじやないて——なんしろ背長が、六尺五寸一分からあつたんだからね！」

チチコフはまた、そのプローブカも矢張りこの世にはもういないのだと注意しようと思つたが、ソバケーヴィツチがすっかり調子に乗つて、無我夢中にまくしたてるので、黙つて聞いているより他はなかつた。

「煉瓦屋のミルーシキン！ あいつは、どんな家の暖炉だつて拵らえたものでしてね。靴屋のマクシム・テリヤートニコフはといえは、大針でもつてシクシクつとやったかと思つと、もう素晴らしい長靴が出来あがつてるのです。それでいて酒は一滴も飲まないのですからね。それからエレメイ・ソロコプロヒョン！ こいつ一人でも、他の奴をみんな合わせただけぐらいの値打がありますぜ。モスクワで商売あきないをしていましたがね、免役税オブロークだけでも年に五百ルーブリから入れておりましたからな。こういう粒選りの百姓ばかりですぜ！ どうしてどうして、プリューシキンなんぞの売りつける代物たあ訳が違いまさあね

「ですがね、」とチチコフは、いつが果しとも知れない、その凄まじい弁口の勢いに辟易しながら、とうとう口を入れた。「どうしてあなたは、そんなものの特長を一々かぞえあげなさるんですか？　だって、そんなことをしたって今さら何の意味もないじゃありませんか、みんなもう死んでしまってるんですからね。諺にも、死人<sup>しびと</sup>じゃ垣根にもならないというじゃありませんか。」

「それあ、確かに死んでいますよ。」ソバケーヴィツチは、なるほど考えてみればその農奴たちはもう死んでいるのだと気がついたらしく、そう答えたが、すぐにこう附け加えた。「ですがね、現に生きている奴らにしたところが何です？　あんなものが一体なんですか——人間じゃなくて、蠅ですからね。」

「しかしそれでもまだ生きていますよ。だが、こちらはまるで空想<sup>ゆめ</sup>みたいなものですからね。」

「いんにや、空想<sup>ゆめ</sup>じゃありませんぞ！　わしはそのミヘーエフって奴がどんな人間だったかお話ししますが、鐘太鼓で捜したってあんな奴あ見つきりっこありませんよ。とてもこの部屋へなんぞ入りっこないような、どえらい凶体の奴でしたからね。どうしてどうして、

これあ空想どころじゃありませんわい！ あいつの肩の糞力ときたら、馬だって敵いっこない位でしたぜ。あんたが何処かほかであんな奴を見つげなすつたら、お目にかかりたいもんですわい！」こう、しまいにはもう壁に懸っているバグラチオンと\*8コロコトウロ一二の肖像画の方を向いて喋っていた。それはよく、二人の人間が盛んに話し合っている最中に、その一方が、どういう訳が不意に当の話相手から眼をはなして、偶然そこへ入って来た第三者に目をうつす、それが全く赤の他人で、そんな人間からは、何の返答も、意見も、確認も得られないことが分つていながら、その癖その人物を仲裁に引き込もうとでもするように、じつとその顔を見つめるのと同じで、何にも知らぬ第三者はすっかり面喰らつて、自分が何ひとつ聴いてもいない問題にいい加減のお座なりでも答えたものか、それともその場の礼儀だけに、黙つて暫らく立つていてから、折を見て逃げ出したものかと、立ち迷うものである。

「しかし、二ルーブリ以上は、どうしても出せませんよ。」とチチコフが言った。

「それじゃあね、わしがひどく欲ばつてばかりいて、少しもあんたに譲歩をしないように思われるのも辛いから、それじゃあひとつ、七十五ルーブリずつにしておきましょう——尤も、銀行紙幣でなきやあ御免ですがね——こりやもう、まったくお馴染甲斐にするだけ

ですぜ！」

この野郎、一体どうしやがる気だろう？ とチチコフは心の中で思った。おれを馬鹿にしてやがるのかな？ それから今度は口に出してこう附け加えた。「まったくどうも変な話ですねえ。何だか我々はお芝居か喜劇でもやってるようじゃありませんか。そうでも思わなきゃ、納得が出来ませんよ……。あなたは物の分った方で、立派に教育のある方としか思われません。ところで、これは全くつまらない物で——ふ、ふ！ 一体どれだけ値打があるというんです！ 誰がこんなものを欲しがると仰っしゃるんです？」

「ところが、それをあんたは買いなさるといふのだからね、して見れば、まんざら見くびったものでもなさそうですわい。」

こう言われるとチチコフは唇を噛むばかりで、ハタと言句につまってしまった。しようことなしに彼は自分の内輪の話などを持ち出しかけたが、ソバケーヴィツチはにべもなくこう答えたものだ。

「何もあんたの身の上話なんぞ聴く必要はありませんよ。わたしは他人の内輪のことに喙くちばしが容れるのが嫌いにして——それはあんた御自身の問題ですからなあ。あんたの方で農奴が欲しいと仰っしゃるから、わたしは売ろうというまでで、これを買わなかったら後で後悔し

ますぜ。」

「二ルーブリならね。」とチチコフが言った。

「まったく、どうも！ 諺にある馬鹿の一つ覚えつてやつで、あんたは二ルーブリといいましたが最後、同じことばかり繰り返していなさる。もう少ししまともな値をつけて貰いましょうや！」

ふん、ほんとに忌々しいつたらない！ とチチコフは心の中で思った。 えい、もう五十カペーカだけ増してやれえ、犬にもお愛嬌だ！ ——「じゃ、仕方がない、五十カペーカだけ奮発しましょう。」

「ふん、じゃあ、わしもぎりぎり決着のところ、五十ルーブリにしときましよう！ これじゃあ、まったく損ですがね。何処へ行ったって、こんないい農奴は、これより安く買えつこありませんぜ！」

どこまで吝んぼだろう！ とチチコフは肚の中で呟やいたが、その後を少し忌々しそうに、こう口に出して言った。「一体こりやどうしたんです？……さも重大なことみたいに仰っしゃってさ！ 他処ほかでだったら無償ただでもくれますよ。それどころか、一刻も早く厄介ばらいをしようと思つて、誰だつて二つ返事で手離しますよ。こんなものを後生大事にと

つておいて、おまけに税金まで払おうつてのは、よくよくのおたんちんでさあね！」

「だがこれを一体どういう買物だと思いなさる——ここだけの内密な話ですが——これはおおつぴらに出来る取引じゃありませんぜ。わしか、それとも誰か他の奴が口でも割ってみなされ、それこそ信用が落ちてしまつて、もうどんな契約も結ばなくなれば、うまい取引にも手を出すことが出来なくなつてしましますからね。」

ちえつ、あんな当てこすりを言やあがる、悪党め！ こうチチコフは思ったが、さも落着きはらつたような顔で、すぐに答えた。「あなたはこういうお心算つもりか存じませんが、私はあなたがお考えになるように、何か必要があつて買い入れる訳じゃないんで、ただその……自分の気紛れにやつてるだけですからね。二ルーブリ半でおいやなら、お暇いとましますよ。」

こいつは、なかなか一筋縄じゃいかんぞ！ とソバケーヴィツチも思った。「じゃあ、仕方がない、三十ルーブリずつにしときましよう、それでひとつ買つて下さい！」

「いや、どうもあまりお売りになりたくなさそうですね。じゃあお暇いとまします！」

「まあ、そう言わないで、ちよつと待つて下さい！」ソバケーヴィツチは相手の手を放そうとしないで、こう言ったが、その途端に相手の足をいやというほど踏んづけた。それと

いうのも我等の主人公がついうっかりしていたからで、——その罰で彼は、アツと悲鳴をあげて片足で跳びあがらなければならなかった。

「これあどうも、御免なさい！ 飛んだ失礼をしましたようで。どうかまあ、ここへお掛けになつて！ さあどうぞ！」 そう言つて彼はチチコフを安楽椅子に掛けさせたが、その手際は、まるでよく馴らされた熊がとんぼがえり 翻筋斗を打つたり、『ミーシャ、女が蒸風呂へ入つてる真似をして御覧！』とか、『ミーシャ、今度は子供が豆を盗む真似をして御覧！』などと言われて、いろんな芸当をするのによく似ていた。

「これじゃあ、まったく、無駄に時間を潰すばかりですよ。私は急いでるんですからね。」  
 「とにかく、もうちよつと待つて下さい。あなたに好きなことを一つお話ししますからね。」  
 そういうとソバケーヴィツチは相手の傍へにじりより、その耳へ口を寄せて、さも秘密らしくソツとこゝろ囁やいた。「どうです、一角かどじゃあ？」

「と仰つしやると、二十五ルーブリですか？ 駄目、駄目、駄目！ 一角の四半分だつて出せませんよ。あれより上は一カペーカだつて増しませんよ。」

ソバケーヴィツチは口を噤んだ、チチコフも黙りこんだ。二分間ばかり沈黙がつづいた。驚鼻のバグラチオンが壁の上からじつとこの取引を見まもつていた。

「じゃあ、ぎりぎりのところ、幾ら出せるのです？」と、とうとうソバケーヴィツチが口を切った。

「二ルーブリ半。」

「まったく、そんな無茶な値つてあるもんですかい。じゃ、せめて三ルーブリだして下さいー！」

「出せませんよ。」

「どうも、あんたにかかっちゃしかたがない、じゃそうしときましよう！ これじゃあ損だけれど、人を悦ばさずにはおられないという、まるで犬みたいな根性でしてね。ところで、万事正式の手續を踏むために、公正証書を作ることになりますかね？」

「勿論ですとも。」

「なるほど、そうだろうと思ってね。では一つ、市まちへ出かけなきやなりませんなあ。」

こういうことに話がついた。そこで二人は、翌日市まちへ出むいて売買登記の手續をすることにした。チチコフは死んだ農奴の名簿が欲しいと言った。ソバケーヴィツチは二つ返事でさつそく書物卓デスクへ近よると、自分の手で名簿の作成に取りかかったが、名前を書くだけではなく、一人々々の秀れた特長まで一々記載したものである。

チチコフは何もすることがないので、後ろに突つ立つたまま、相手のだだっぴろいからだ軀を隅から隅までしげしげと眺めていた。ずんぐりした\*9ウヤトカ馬の背中みだにだだっぴろい背中や、歩道に立ててある鑄鉄の柱にそっくりの脚を見ると、彼は心のうちでこう叫ばずにはいられなかった。まったく大したからだ軀を授かつたものだ！これこそ、よくいう、裁ち方は拙いが縫いはしつかりしてゐるつてやつだ！……そもそも生まれつきからこんな熊みたいな恰好をしているのか、それとも、こんな辺鄙な田舎暮らしをしていたので、すっかり熊みたいになつてしまひ、麦蒔きをやつたり、百姓どもとごてくき騒いでいるうちに、いわゆる搾取者しほりやつていうやつに成りあがつたのか？ いやどうも、おれの考えでは、お前なんぞは当世風の教育を受けて世間へ出て、こんな片田舎ではなく、ペテルブルグに住んでいたにしても、やつぱり今と変りがないだろう。ただ違ふところといえば、ここでは粥カーシヤを詰めた羊の肋骨を片割れも食つた上に、凝乳饅頭で口直しをやらかしているが、そうなつたら、松露をそえたカツレツかなんかをカツカツ食うようになるぐらいのものだろう。それに今は農奴を手下に、まあ何とかうまくやりながら、無論やつらを酷い目に合わせたりはしないようだが、それというのも、農奴は自分のものだから、そんなことをしては自分の損になるからさ。ところが君が役人で、部下が官吏だつたりしようものなら、そ

いつらは自分の農奴とは訳が違うつてんで、容赦なくピシピシやつつけたり、または国庫を平気でごまかしたりするだろうて！ いや、まったく、こういう搾取者しぼりやになると、握つた手をひろげようともしくさらないんだ！ ところがこんな手合いが指の一本か二本でもひろげようものなら、いよいよ碌なことにはならないのだ。ちよつとばかり学問の上つ面でも嚙らせてみるがいい、すぐに上座かみざへしやくり出て、本当に学問のある人にまで、それを見せびらかそうとするから！ その上にまだどうかすると、『よし、おれの偉いところを見せてやろう！』などと言いだしかねないのだ。そして、大抵の者が手を焼くような小賢しい規則きまりを考えだすのだ……。ああ、もし誰も彼もこういう搾取者になったら、どうだろう！……

「さあ、名簿が出来ましたぜ！」とソバケーヴィツチが振り返って言った。

「出来ましたか？ じゃあ、こちらへ下さい！」チチコフは一通りそれに眼をとおして、その正確で几帳面なことに一驚を喫した。職業や、年齢や、係累の有無などが詳細に書いてあるばかりでなく、欄外には、その身持みもちや酒を飲む飲まないという特別な註まで、ちゃんと記入してある——要するに、見た眼にも気持のいいものであった。

「それじゃ、手附を頂いておきますかな。」とソバケーヴィツチが言った。

「どうして手附なんて仰っしゃるのです？ 市で一度に全部お払いしますよ。」

「だが、あんたも御存じのように、それが定法きまりでがすからね。」とソバケーヴィツチが言い返した。

「さあ、どうして差しあげたものでしょうか。手許には金を持っていないものですからね。じゃあ、ここに十ルーブリだけありますよ。」

「なに、十ルーブリですって！ せめて五十ルーブリはおいで行って下さらなくっちゃ！」  
チチコフは無いと言って断わろうとしたが、ソバケーヴィツチが、いや確かに持もち合わせがある筈だと、しつこく言い張るものだから、とうとう紙幣をもう一枚とり出して、『じやあ、もう十五ルーブリだけ差しあげます。しめて二十五ルーブリですよ。では受取りを下さいませんか。』と言った。

「どうしてまた受取りなどが要るのですか？」

「いずれにしても受取りは頂いておいた方が好都合ですよ。どうも世智辛い御時勢で……  
どんなことが起こるか分つたものじゃありませんからね。」

「ようがす。それじゃあ金かね子をこちらへ貰いましょう。」

「どうして金子を先きにお渡しするのです？ 金子はちゃんとここに持ってますよ！ 受

取りさえ書いて下すつたら、すぐにお渡ししますからね。」

「だが、どうして受取りが書けますかね？ その前にちよつと金子を拜ませて貰わないでは。」

チチコフは紙幣をソバケーヴィツチに渡した。すると相手はテーブルに近よつて、左手の指で紙幣をおさえながら、右手で紙切れに、国立銀行紙幣二十五ルーブリ、農奴売却代金の手附金として正に受取り もうしそろうなり 申 候 也と書いた。受取りを書いてから、彼はもう一度その紙幣を あつた 検めた。

「こりやだいぶ古い紙幣ですなあ。」と彼は、そのうちの一枚を日光に透かして見ながら、言った。「それに少しやぶれていますなあ。だがまあ、友達同士の間だから、かれこれ言うがものはありませんわい。」

えい、この握り屋め！ とチチコフは心のうちで思った。その上、おまけに人非人だ！

「女の農奴は要りませんかね？」

「いや、もう結構ですよ。」

「安くしておきますぜ。お馴染み甲斐に一人一ルーブリずつでようがすがね。」

「いえ、女の方は要らないんです。」

「そう、要らないものは何とも話になりませんなあ。好き嫌いには規則がなく、諺にも藪喰う虫も何とやらと言いますからね。」

「ところで、この取引は我々二人の間だけのことにしておいて頂きたいんですがね。」とチチコフは、別れを告げながら、言った。

「それあ、いうまでもありませんわい。これは第三者の容喙ようかいすべき事柄じゃありませんからね。近しい友達同士の話はどこまでもお互いの間だけのことにしておかなくっちゃありませんわい。じゃあ、御機嫌よろしゅう！ わざわざお訊ね下さって有難うございました。これからお忘れにならないようにお願いしますよ。またお暇がありましたら、御飯でも食べたり、退屈しのぎにやって来て下さい。何かとまたお互いに力になることもござんしようからね。」

いや、もう真平まっぴらだよ！ とチチコフは馬車の中へ乗りこみながら独り呟やいた。死んだ農奴一人に二ルーブリ半ずつもふんだくりやがって、忌々しい握り屋め！

彼にはソバケーヴィツチの仕打が業腹ごうはらでならなかったのだ。とにかく、何といったつて、知事のところで、警察部長のところでも会って、知合いの仲じゃないか。それだの

にまるで赤の他人みたいな遣り口で、あんなくだらないものに金を取り立てやがるんだ！馬車が邸を出た時、後を振り返って見ると、ソバケーヴィツチはまだポーチの上に突っ立ったまま、客がどちらへ行くかを見とどけようとでもするように、じつとこちらを見張っていた。

「下劣漢め！　まだあんなに突つ立つてやあがる！」と彼は吐き出すように呟やいた。

そしてセリファンに、百姓小屋のある方へ曲れと言いつけた。こうして地主館やかたから馬車を見られないようにして発たつてしまふ魂胆であつた。彼はプリューシキンのところへ行こうと思つたのだ。ソバケーヴィツチの話では、その男の村では農奴がまるで蠅のようにバタバタと死んだということだ。だが、そこへ行くことをソバケーヴィツチに知られたくなかつたのだ。馬車が村はずれまで来た時彼は最初に出会つた百姓を呼びとめた。その百姓は何処か途中で拾つたらしい恐ろしく太い丸太を肩にかついで、まるで疲れることを知らぬ蟻のように、それを自分の小屋の方へ曳つぱつて行こうとしているところであつた。

「おい、お鬚！　ここからプリューシキンのところへはどういつたらいいのかね、旦那の邸のそばを通らないようにして行くには？」

「どうやら百姓は、その質問に面喰らつたらしい。」

「どうだ、知らないのかい？」

「へえ、旦那さま、知りましねえだ。」

「ちえつ、こいつ！ その白髪頭をひき撈つてくれるぞ！ あの吝んぼのプリューシキン  
を知らないのか？ 百姓に食うものも食わせない業ごうよく欲地主をさ？」

「ああ、あの檻ぼろ褌ぼろつさげのこつてすかね！」と、百姓が頓狂な声で言った。このぼろ檻ぼろ褌ぼろつ  
さげ という言葉には非常に穿つた名詞がくつついていていたが、それはしかし上品な会話に  
はちよつと用いられない言葉だから、ここでは故意わざとそれを抜かすことにした。だが、そ  
れが実に穿つた表現であつたことは、その百姓の姿がもう疾とつくに見えなくなつてしまい、  
馬車がずいぶん先きへ進んでからまで、チチコフがまだ馬車の中で独りクスクスと笑つて  
いたところから容易に想像がつくだろう。まったくロシア人の毒舌にかかつては堪らない  
！ しかも、いったん渾名をつけられたが最後、それが子々孫々の代まで伝わり、その当  
人が任官しようと、退職しようと、ペテルブルグに住もうと、世界の涯へ引っこもうと、  
いつも彼について廻るのだ。そうなつた暁には、もうどんなに自分の渾名に小細工をして  
高尚らしく見せかけようが、または代書人などの手を通じて古いけんもん権門の家名を賃借しよ  
うが、結局なんの役にも立ちはしない。いつも渾名の方が先にたつてカアカアと鴉みたい

な鳴声を出して、自分がどこから飛んで来た鳥かを、はつきり喋ってしまふから浅ましい。口から発せられた<sup>がいせつ</sup>剽切な言葉は、文字に書きつけたも同様で、斧で断ち斬るわけにはゆかぬ。剽切な表現といえ、生気澆刺たる生粹のロシア人ばかり住んでいて、ドイツ人もフィンランド人も、その他いかなる異種族も全然影を見せぬロシアの奥地から生まれた言葉を描いて他にはない。ロシア人という奴は決して言葉に不自由することがなく、巢ごもりをした雌鷄みたいに言葉を抱きこんで後生大事に温めておりもしないで、まるで肌身はなさぬ手形でも突きつけるように、早速ペラペラと喋ってしまう。そうすれば、鼻がどうの、唇が<sup>くち</sup>どうのと附けたす世話は更にいらぬ。一遍に頭の天辺から足の爪先まですっかりそれと分ってしまうのだ！

円頂閣や円塔や十字架を頂いた寺院や修道院が、聖なる信仰の国なる我がロシア帝国に数限りなく散在するように、数限りない人種や、民族や、国民がこの地球上に群れつどい、ごたごたと入り乱れて、押し合いへし合いしている。そのどの国民もが、それぞれ才能の兆しを持ち、創造力に富む精神や、おのおの水際だった特異性や、その他いろんな天分を兼ね具えながら、それぞれ個有の言語によって他の民族との間に画然たる区別をつけている。然もその言語たるや如何なる事物を表現しても必ずその表現に独自の国民性の一部

を反映している。イギリス人の言葉には人心の洞察力と、人生に對するどこまでも利巧な認識が感じられ、フランス人の儂はかない言葉は軽佻な洒落となつてパツと輝くと、そのまま雲散霧消してしまい、また、ドイツ人の知的ではあるがぎこちない言葉は、ちよつと真似の出来ない独自の工風や発明を易々とやつてのける。けれど的確に表現されたロシア語ほど大胆不敵で、しかも心の奥底から逆ほとばしり出て、生氣澆刺として沸き立つ言葉は他にないだろう。

\*1 ミハイル・セミヨーノヴィツチ ロシア人は熊 (Medvedj 《メドウェージ》) を愛称でミーシャ又はミーシユカと呼ぶ。ところが、クリスチャン・ネームのミハイルの愛称も矢張りミーシャであるから、ここでは熊に似たソバケーヴィツチが然も熊の異いみ名ように縁のある名前を持っているのでチチコフが感心するのだ。

\*2 マヴロコルダート アレクサンドル (1791-1865) 公爵。ギリシアの愛国者で政治家。

\*3 ミアウリス アンドリアス・ウオコス (1770-1835) ギリシアの有名な水師提督すいし。

\*4 カナリス コンスタンチン (1790-1877) ギリシアの政治家。独立戦争 (一八二二年—二五年) に戦功を立て、一八六二年の革命に際しては臨時政府の要人とな

る。

\*5 バグラチオン ピョートル・イワノヴィッチ (1765-1812) アレクサンドル一世時代の名将。ボロジノの役に負傷して歿す。

\*6 ゴグとマゴグ 旧約聖書に出て来る悪人で、エゼキールの予言により、イスラエルの民を根絶せんがために北方より聖地に来るが、神によって亡ぼされる。黙示録では、世界最後の日に悪魔に唆かされてキリストの国に反抗して立ち、結局悪魔と共に焦熱地獄で身を滅ぼす諸々の地上の国王を意味している。

\*7 カシチエイ ロシアのお伽ときほなし 嚙あだなに登場する痩せた吝ん坊で、不死身の老人ということになっている。痩せ男や吝齋漢の渾名あだなに使われる。

\*8 コロコトウローニ フォードル (1770-1843) ギリシアの将軍。祖国の自由のために闘った英雄。

\*9 ウヤトカ馬 ロシア馬とフィンランド馬とを交配して出来た馬の種類で、体軀は小柄だが、非常に頑健である。

## 第六章

ずっと以前、私がまだ稚いとけなかつた頃のこと、もはや返らぬ夢と過ぎ去つた少年の日のころ私は見も知らぬ場所ところへ初めてやつて行くのがとても嬉しかったものだ。それが小さな部落であろうと、貧しい田舎町であろうと、乃至は大きな村であろうと、自由村であろうと、何でも構わない——あどけない好奇の眼は、到るところで多くの珍しいものを見つけた。どんな建物でも、また特に際立つた印象を与えるものでさえあれば、何でもことごとく私を引き留め、私を驚かせるのであつた。土地ところの庶民階級の丸太づくりの粗削りな一階建のささやかな家がごたごたと塊かたまりまつている中に、ぽつねんと一つだけ突き出している、窓の半分は見せかけだけという、きまりきつた建築様式の石造の官衙かんがであろうが、雪のように真白に塗つた新しい寺院の上に聳そびえている、白い鉄板で張つたまん丸い恰好のいい円頂閣であろうが、市場であろうが、町なかへひよつこり顔を出す田舎の伊達男であろうが——何ひとつ、私の若々しい鋭敏な眼を逃れることは出来なかつた。私は旅行馬車から鼻を突き出すようにして、まだこれまで見たこともない型のフロックコートを眺めたり、

八百屋の店の扉口から、干涸びたモスクワ製の糖菓を入れた壺と一緒にチラと覗く釘や遠くからでも黄いろく見える硫黄や乾葡萄や石鹼などの入っている木箱を眺めたり、田舎で退屈するためにどこかの県からやって来たらしい歩兵将校が路の片側を歩いて見送つたり、短外套を著て競走馬車で一散に駈けて行く商人を眺めたりした———そうして彼等の貧しい生活に想いを移すのであった。田舎の官吏が傍らを通りでもすると、私はすぐにこんなことを考えたものだ———あの人は一体どこへ行くのだろう、自分の兄弟の家の夜会へでも行くのか、それとも真直ぐに我が家へ帰つて、夕闇のまだすつかり濃くなりきらないうち半時間ばかりをポーチに坐つていてから、お袋さんや細君や細君の妹や家族の者一同と共に、早い夕飯を食べるのだろうか、そしてスープが出た後でようやく、頸飾をつけた女中なり、ダブダブの上衣を著た給仕なりが、永年その家に伝わる燭台に脂蠟燭をつけて持つて来る頃、彼等のあいだでは一体どんな会話が持ちあがるのだろうか、などと。また、何処かの地主の村へ乗りこんで行く時には、ひよる長い木造の鐘楼や、だだっぴろい黝んだ木造の古い寺などを私は物珍らしく眺めるのであった。遙か彼方から如何にも蠱惑的に地主館の赤い屋根と白い煙突とが、樹々の緑をとおしてチラホラ見え出すと、私はそれを翳している園が両方へ展けて、一刻もはやく邸の全貌が、噫！ その当時は決し

て俗悪なものではなかつた外觀を現わすのを、じりじりと待ち侘びながらも、一体この地主というのはどんな人だろう、肥つた人だろうか、息子があるだろうか、それとも娘ばかり六人もあつて、よく響く少女らしい笑い声を立てたり遊戯をしたりして、一番末の娘が万年美人ときているのではなからうか、彼女らはまた黒い瞳をしているのだろうか、そして当の主人は陽気な人だろうか、それとも、九月の末ごろの空模様みたいに陰鬱な顔をして、曆を覗きこんだり、若い者には退屈な裸麦のことばかり話すような親爺ではなからうか、などと揣摩憶測を逞しゆうしたものである。

今では、どんな初めての村へも私は平気で乗りこんで行き、その俗悪な姿を冷やかに眺めるだけで、冷静になつた私の眼には、これが昔だつたらさぞ顔色を変えたり、笑つたり、無闇にお喋りをしたりせずにはいられなかつたような対象ものも、一向面白くもなければ可笑しくもなく、今は平気で見過ごすことができ、固く結んだ私の唇にはただ無関心な沈黙が宿るに過ぎない。おお、私の青春よ！ おお、私の若き日よ！

さてチチコフは、百姓たちがプリューシキンに奉つた例の渾名のことを考えて心の中でクスクス笑っている間に、自分が百姓小屋や通りのぎらにある広大な村の真中へ乗りこんでいることには気がつかなかつた。けれど間もなく、丸太を敷いた舗道のために物凄く馬

車ががたつきだしたので、彼もようやくそれと気がついたが、この丸太敷きの道に較べたら、あの市なかまちのごろた石を敷いた道などは物の数ではなかった。丸太がまるでピアノの鍵盤のように上ったり下ったりするため、ぼんやりしている乗客は、後頭部に瘤をつくったり、額に青紫斑をこしらえたり、またどうかすると自分で自分の舌の先きを、いやというほど噛んだりもする。チチコフは、どういものかこの村の百姓小屋が申し合わせたようにひどく荒廃しているのに気がついた。小屋に使つてある丸太はどす黒く古びており、多くの屋根は篩ふるいのように穴だらけになつてゐる。中には上に棟木むなぎと、その両側へ肋骨のように張り出した垂木たるぎだけしか残つていないものもある。どうやら小屋の主人たちが、どうせ雨降りには屋根は繕つくろえないし、天気の日には雨漏りの心配はない、それに居酒屋にしろ大道の真中にしろ、好きなどころに広々とした場所があるのに、何を好んでけちけちするところがあるかと、誠に至極しごくもつと尤もな理屈をつけて、自分で柿板こけらいたや屋根板を引つpegがしてしまつたものらしい。小屋の窓には窓ガラスなどはなく、中には檻ぼろ褌ぼろや古外套をつめて塞いだものもある。またどうい理由わけかしらないが、よくロシアの百姓小屋にしつらえてある、欄干のついた軒下の露台は横へ傾いて、絵にもならないほど黝くすんでいる。小屋の後ろには、あちこちに山のように積みあげた穀堆こくづかが列をなして並んでいたが、それはもうか

なり長いこと積んだままになっていくらしく、その色が焼きの悪い古煉瓦のようで、天辺にはいろんな雑草が生え、剩え横からは灌木の繁みが凭つかかっている。その穀堆はど  
うやら領主のものらしい。穀堆と荒れはてた屋根の向うから村の二つの寺が、馬車の方向  
が変るにつれて、右に見えたり左に見えたりしながら、澄みきった大空へせりあがって来  
た。その二つの寺は並びあつていて、一方は荒れはてた木造、一方は石造で、壁は黄ばみ、  
全体に汚点と亀裂だらけになっている。地主館の端々がチラチラと見えだしたが、やがて  
百姓小屋のつながりが切れて、その代りに、ところどころ壊れた低い垣根に囲まれた菜園  
か甘藍畠とおぼしき空地へ出ると、ついにその全貌が現われた。この法外にだらだらと  
長い奇妙なお城は、どこか老耄れの廃兵といった恰好をしている。それは一階建のところ  
もあれば、二階建になっているところもあつて、必らずしもその老朽を防ぐよすがにはな  
りそうもない黝んだ屋根の上には、二つの展望台が相向いにニューウと突っ立っているが、  
どちらも曾ては塗つてあつた色の跡形だになく、今はもうぐらぐらになっている。家の壁  
もところどころ剥げて漆喰下地がむきだしになっているのは、雨や旋風や、秋の気候の  
変化など、あらゆる荒天に曝されて来たものと見える。窓のうち開いているのは二つきり  
で、他の窓は鎧屏をおろしたり、中には板で釘づけにされたのさえある始末。開いている

二つの窓も、辛うじて開いているといえるだけで、その一つなどには、青い砂糖の包紙を三角に切ったのが貼りつけてあるので至つて暗そうだ。

邸の裏から始まり、部落の後ろへずっとひろがつて、末は野原につづいている古い広大な園は樹木の生い茂るがままに荒れ果ててはいるが、どうやら、そのだだっぴろい村に生氣を添えている唯一のものらしく、荒れ果てた絵のような姿で、ひとり精一杯の美を放っている。伸び放題に繁茂した樹々の梢は、さながら緑の雲か、木の葉のさやさやと顫える不規則な円頂閣の形に群らがって、空高く浮かんでいる。緑の密林の中から、暴風か落雷のためにぼつきり折れたらしく頭のない巨きな白樺の白い幹が一本、キラキラと光る形のいい大理石の円柱のように空中に聳えている。柱頭の代理をつとめる尖った斜めの折れ口は、雪白の木肌に対して帽子か、それとも黒い鳥のように、どす黒く見えている。蛇麻草の蔓が下では接骨木やななかまどや榛の繁みをすっかり枯らしてしまい、それから柵という柵の天辺を匍いまわった挙句、上へよじのぼつて、折れた白樺を半ばまでぐるぐる巻きにしている。幹の中ほどまで登ると、そこから下へ垂れさがつて、今度はほかの木々の梢にからみつきはじめたり、または空中にぶらさがつて、己れの細くて粘っこい巻蔓を輪にして、風のまにまにゆらゆらと揺れている。この日光を受けた緑の森がところどころで

両方へ分れて、その間から日もささない空洞うつつが、まるで暗い落し穴のように、ぼっかり口をあけている。そこはすっかり暗い陰影かげにとざされていて、暗がりの奥に僅ほのかに仄見えるのは、真直ぐに走っている細い小径や、壊れた欄干や、倒れかかった四阿あずまやや、老い朽ちて洞ろになった柳の幹や、柳の後ろから濃い剛毛あらげのように顔を突き出している白毛頭の雀すずめのおこげ、  
 芋いもや、あまりひどく茂っているため枯れ萎びて纏れあい絡みあっている木の葉や枝、さては横合いから緑の掌葉を差し出した楓かえでの小枝などであるが、楓の一枚の葉裏に、一体どうしてなのかは、まるで分らないが、不意に日光ひかりが映さして、パツとそれを火のように透明なものに変えて、濃い闇の中で燦然と輝かせた。一方、園のいちばん端はしれには、他の樹木とは不釣合いに背の高い白楊はこやなぎが四五本、そのさやさやと揺らめくおのおのの梢に大きな鴉の巢をのせている。その白楊の中には、枝が引き裂けたまま、幹からすっかり離れもせずに、病葉わくらばと一緒にだらりと下へ垂れさがっているものもあつた。一言にしていえば、何もかもが素晴らしかった。それは自然の風致も人工の妙趣もついに及ばず、ただその両者が結びついた時にのみ見られる佳よさで、人間がああでもないこうでもない、ややもすれば無意味な苦心を重ねた後に、自然が最後の仕上げの鑿くを揮ふるって、重苦しい塊まりを崩し、赤裸々な構図の見えすいている野暮な正しさや惨めな欠陥を除けて、きちんと寸

法を測つたように清楚なだけが身上の血の気のない人工に、いみじき暖かさを添える時、初めて生まれる美しさである。

一度か二度、曲り角をまがると、我等の主人公はついに地主館やかたの前へ出た。正面から見ると、それは一層いたましい姿であった。柵や門に使つてある古い木には、もうすつかり青苔がついていた。下人部屋だの、納屋だの、穴倉だのといった、明らかに老朽した建物の群れが前庭にわを満たしており、その両側には右と左に別の庭へ通ずる門が見えている。すべてが、この邸かたで曾ては非常に盛大に農産経営が行われていたことを物語るだけで、今は何を見ても陰気くさいばかりだ。あたりを活気づけるようなものは何ひとつ見あたらず――扉あが開け閉たてされるでもなければ、何処からひとり出て来る人影もなく、住家すみからしい生ききとしたいそしみの気配は何も感じられない！ ただ一つ表門だけが開いていた。それもこの氣息きそく奄々えんえんたる場面を活気づけようとして、わざわざ姿を現わしでもしたように、塵ごじがけの荷を積んだ荷馬車こまぐるまで偶々たまたま一人の百姓がそこへ乗りこんで来たればこそで、いつもだつたら、これもぴつたり閉ざされていたに違いない。というのは、鉄の門におそろしく大きな錠前がぶらさがっていたからである。間もなく一つの建物の傍で、いま荷馬車を乗りつけた百姓と口論をはじめた人の姿をチチコフは見てとった。久しばらく眺めていたけれ

ど、彼にはその人物がいったい男なのか女なのか、さっぱり分らなかつた。著きている着物からしてどうもはつきりせず、女の上つ張りによく似ているし、頭には田舎のやしきおんな邸婢おんながよくかぶるような頭巾をかぶっている。が、声だけは、女にしては少しか嘎かれているようだ。ありやあ女だな！ とチチコフは心で呟ささやいたが、すぐにまた、いや、そうでもないぞ！ と附けたした。それから又じろじろと眺めた後で、彼はついに 勿論、女だ！ と呟ささやいた。相手の方でも矢張り同じようにこちらをじろじろと眺めている。よつぽどお客というものが珍らしいらしく、チチコフだけではなく、セリファンや馬まで穴のあくほど眺めて、馬の尻尾から鼻面までまじまじと見まわした。チチコフは相手の帯にさげている鍵束と、百姓に向つて使うぞんざいな口のきき方から推して、これはてつきり家政婦に違ちがいなと思つた。

「ねえ、小母さん、」と、彼は馬車から降りながら、声をかけた。「御主人は？」

「留守ですよ。」と家政婦は、その問いのおわるのも待たないで遮つたが、ちよつと間をおいてから附けたした。「何か御用ですかい？」

「ああ、用事があつてね。」

「じゃあ、部屋なかへ入りなさい！」そう言うなり家政婦は、くるりと向うむきになつて彼に

背中を見せたが、その背中には何かの粉が一杯ついていて、少し下の方に大きな綻ろびが  
出来ていた。

チチコフは何だか穴倉からでも吹いて来るような冷たい息吹の感じられる、暗くてだ  
っ広い玄関へ入った。玄関の次ぎの間もやはり真暗で、わずかに扉の下の大きな隙間をく  
ぐつて這いこむ光りにぼんやり照らされているだけだ。扉をあけて彼はやっと明るみへ出  
たが、眼の前に現われた乱雑さ加減にすっかり仰天してしまった。まるで家じゅうの大掃  
除でもするために一時ここへ家具という家具を積みあげたといった塩梅だ。一つのテーブ  
ルの上には脚の折れた椅子さえ載せてあり、それと並べて椅子の停った時計が置いてある  
が、それには古風な銀器や玻璃罫ガラスや支那陶器などが入れてあった。真珠貝で象眼をした書  
物卓スチは、もうとどころ象眼がとれて、その跡に膠にかわのこびりついた溝が黄いろつぽく残  
っており、その上にはいろんなものがごたごたと載せてある——上に卵形をつまみのある、  
少し青く変色した大理石の文鎮で押えた、何か細々こまこまと記入した書附の山だの、革表紙で、  
縁の赤い、ひどく古風な本だの、すっかり干涸びてしまって、胡桃ほどの大きさもないレ  
モンだの、挽もぎはなされた安楽椅子の腕木だの、手紙で蓋がしてあるけれど、中へ蠅が三  
匹もはまっている。何か液体の入った台附コップだの、封蝟のかけらだの、何処かで拾っ

て来たらしい襪襦つきれだの、インキでよごれっぱなしの、まるで肺病やみみたいにかさかさになった二本の鷲ペンだの、おおかたフランス軍のモスクワ侵入以前にでも主人が使っていたらしい、もうすっかり黄いろくなってしまった歯ブラシだの、といったものである。

壁には幾つもの絵が処ところせまく乱雑に懸けてあつて、どこかの戦争の絵らしく、大きな太鼓だの、三角帽をかぶつて喚いている兵隊だの、死にかかった馬だのを描いた恐ろしく長い銅版画はもう黄ばんでしまっているが、それは細い青銅の筋すじ金かねを入れ、四隅よすみにもやはり青銅の円い座金ざかねをつけた、ガラスもないマホガニの額縁に納めてある。それと並んで、花や、果物や、切り割つた西瓜や、野豚の頭や、倒さに吊りさげた鴨を描いた大きな黝くすんだ油絵が壁の半ばを占領している。天井の真中には、麻布あさの袋でおおつたシャンデリアがさがっているが、ひどい埃のために、まるで蛹さなぎの入っている繭まゆそっくりだ。部屋の片隅には、もつとひどいがらくたで、机の上へ載せるだけの値打もない代物が床に山と積んである。堆積やまの中には果して何があるのか、ちよつと見当もつかない、というのは、それに夥しく埃が積っているためで、ちよつとでも触ろうものなら、手がまるで手袋でもはめたやうになつてしまふさうだ。その中からどうやらはつきり形のわかるのは、木製の鋤すきの切れ

つぱしと、古い長靴の裏革ぐらいのものだ。もし、テーブルの上にある古いぼろぼろの頭巾がここに人の住んでいることを証明しなかったら、この部屋が生きた人間の住まいだなどとはどうしても思えなかつただろう。チチコフがこの奇妙きてれつな部屋飾りを眺めまわしている間に、横側の扉があいて、さつき庭で逢つた家政婦が入つて来た。ところが今あらためて見ると、どうもそれは家政婦というよりは男の執事らしい。家政婦なら、第一、鬚などを剃つたりする筈がないのに、この人物は、ちゃんと鬚を剃つておる、尤もそれは極く偶のこたらしく、顎から両方の頬の下部が、まるで厩で馬を清掃するとき使う針金製の馬節ブラッシそつくりだ。チチコフは怪訝な顔をしながら、執事の方から何か言いだすのを、もどかしそうに待つていた。執事はまた執事で、チチコフが口を切るのを待つているのだ。とうとうこの珍妙な探りあいにしびれを切らしたチチコフが思いきつて訊ねた。

「旦那はどうしたんだね？ 御在宅じゃないのかね？」

「主人はここにおりますだよ。」と執事が答えた。

「何処にさ？」とチチコフが訊きかえした。

「お前さん、眼が見えないのですかい？」と執事が言った。「ええ、焦れたい！ このわしが主人でがすよ！」

ここで我等の主人公は思わず一步後へ退つて、しげしげと相手の顔を見なおした。これまでに彼はずいぶんいろんな人間にも会い、恐らく作者わたくしや読者諸子が決して見ることのないような人間にも会つて来たが、どうもこんな人間に出会うのは初めてだった。顔に別段変つたところがあるわけではなく、大概の痩せた老人に共通な顔をしていたが、ただ顎だけが恐ろしく前へ突き出ているため、唾を吐くたんびに顎を汚さないようにハンカチで蔽おほわなければならぬ。まだ生いきいき々々としてゐる小さな金壺かなつぼまなこ眼は、まるで二十日鼠はつかねずみが暗い穴から尖とんがつた鼻面はなを突き出して、耳を翹そはだてたり、髭をピクピク動かしながら、どこかに猫か、悪戯小僧が隠れておりはせぬかと外界そとを見廻したり、胡散くさそうに空気の匂いまで嗅ぎ廻す時のように、長いげじげじ眉の下からキョトキョトと始終あたりを窺うかがつてゐる。何より目立つのは彼の服装である。どんなに手段を講じ、努力を払つても、彼の著きてゐる部屋着がいったい何で拵はしらえてあるかは、ちよつと突きとめることがむづかしい。袖と襟とは脂と垢でテカテカに汚れて、まるで長靴に使う鞣なめしがわ革かわそつくりになつてゐるし、背後うしろには、普通なら二つに割つてある筈の裾が、四つに裂けてビロビロとさがり、そこから芋層とめのような木綿わたが垂れさがつてゐる！ 頸にもやはり、靴下とも靴下止とも腹巻ともつかないが、どう見てもネクタイとは思われぬ代物を巻きつけてゐる。要するに、もし

もチチコフが何処かお寺の門かどぐち口あたりでこんな服装なりをした相手に出会ったとしたら、きつと二カペーカ銅貨を一枚くれてやったに違いない。これも我等の主人公の名譽のために言つておかねばならないが、彼はなかなか情け深い男で、乞食を見ると、どうしても二カペーカ銅貨を恵んでやらずにはおられなかつたからである。しかし、彼の前に立つているのは乞食ではなく、いま眼の前にいるのは地主なのである。しかもこの地主は千人の余も農奴を持つてゐるのだ。またこれほど多くの穀類を、粒のままや、粉にしたのや、また刈り取つたままで貯えていたり、倉や物置や乾燥室を、こんなに夥しい麻布や羅紗ろしやや、羊の皮の鞣なめしたのや生のままのや、乾した魚や、いろんな青物や、肉製品で一杯にしている者が他にあつたらお目にかかりたいものだ。彼の家の裏庭をちよつと覗いてみるがよい、そこには、いろんな木材きざいだの、決してこれから先き使われそうにもない器具の類がごたごたと並べてあるので、これはひよつとしたら、何か掘り出し物でも見つけようと思つて、足まめな姑婆さんたちが料理女をお供に毎日お百度を踏む、あのモスクワの荒物市場へ迷いこんだのじやないかと疑われる位で、いろんな、綴とじたり刳えぐつたり接はぎ合わせたり編あんだりした木工品うずたかが堆うずたかく積みあげてある。例えば、樽つるべだの、釣瓶つるべだの、手桶ておけだの、片手桶かただの、注そそぎくち口くちの附いたのや附かない木の酌器しやくだの、柄杓ひしやくだの、白樺の皮でつくつた曲物まげものだ

の、よく女が芋やいろんなくだらな入る桶だの、薄い白楊はこやなぎの板を曲げて拵らえた箱だの、白樺の皮で編んだ籃かごだの、その他貧富の別なくロシア人が日常つかうさまざまな道具の山であった。こんな細工物の山をプリューシキンは一体どうしようというのだろうか？ 彼の持つているような村が二つあったところで、とても一生のうちこれだけの道具は使いこなせるものではないのだが、それでも彼はまだ足りないと思っっているらしい。どうもそれだけでは満足が出来ないので、彼はいまだに毎日、自分の村の往還おうかんをぶらぶら歩きまわりながら、橋の下を覗いたり、溝板の下を窺うかがったりして、眼にとまったが最後——たとえそれが古靴の底だろうが、女の捨てた襪くつだろうが、鉄の釘だろうが、瀬戸物の破片かけらだろうが、何でもかまわす自分の家へ持つて帰っては、チコフが部屋の隅に見つけた例のらくたの山へ投げこむのである。『そうれ、また爺おやさんが漁あきりに出かけたぞ！』こう百姓たちは、彼が獲物を探しに行く姿を見かけると、いつも言いあつた。実際、彼が通つた後は、往還がまるで掃いたようにきれいになつた。通りすがりの士官が拍車を落したことがあつたが、その拍車は忽たちまち例の山へ移されていた。どうかして女がうつかり井戸端に釣瓶を置き忘れたりすると、彼はさつさとその釣瓶を持つて行つてしまふ。尤ももつと現場を見つけた百姓が直ぐその場で咎めさえすれば、そのまま何の文句もなく、彼は掠かすめ

た品をこつそり置いて行くが、それが一旦くだんの堆積<sup>やま</sup>へなげこまれてしまつたら万事休すで、これは斯<sup>か</sup>く斯<sup>か</sup>くの時に斯<sup>か</sup>く斯<sup>か</sup>くの人から買ったとか、祖父から譲られたとか言つて、飽くまで自分のものだと言張する。彼は自分の部屋の中でも、封蠟<sup>ふうろう</sup>だろうが、紙屑<sup>しせつ</sup>だろうが、鳥の羽毛<sup>はね</sup>だろうが、なんでも床に落ちてゐるものを拾いあげては、書物<sup>デスク</sup>卓の上なり窓枠の上へ載せておくのだ。

だが彼とても単に勤儉<sup>きんけん</sup>な主人<sup>あるじ</sup>であつた時代もあるのだ！ 妻もあれば子供もあつて、隣村の地主たちが訊ねて来ては食事を共にしたり、家政のやり方や上手な経済<sup>きりもり</sup>の切盛<sup>きりもり</sup>について彼から教えを受けたりしたものである。一切万事が生き生きとして進行し、判で押したようにきちんきちんと片づいて行つた。磨粉<sup>こなひきば</sup>場や晒布<sup>さらしば</sup>場が活動すれば、羅紗<sup>らさ</sup>織場や指物<sup>さしもの</sup>工場や紡績<sup>いとひきば</sup>場がどしどし働いていた。万事にかけて主人の鋭い眼光が到るところに行きわたつていた。彼はまるで勤勉な蜘蛛のように、家政という網の目を隅から隅まで、せかせかしながら、しかも抜け目なく馳<sup>は</sup>せまわつていた。彼の顔色には、あまり烈しい感情は現われていながつたが、眼に理知の光りが見えていた。彼の話は処世の知識と經驗とに充ちあふれていたので、客にはそれを聴くのが楽しかつた。愛想<sup>あいさう</sup>がよくて、お喋りの主婦は、客あしらいがいいというので評判だつた。二人の可愛らしい娘がよく客を迎えに出

て来た。どちらも金髪で、薔薇の花のように瑞々みずみずしかった。また活発な男の子も一人あって、お客の前へ飛び出すなり、相手が喜ぼうが喜ぶまいが、そんなことには一向お構いなしに、片っぱしからみんなを接吻して廻った。邸の窓という窓は残らず開け放たれており、中二階には家庭教師のフランス人が住んでいた。この男はいつもきれいに髭を剃っていて、射撃の名人でもあった。よく蝦夷山鳥えそやまどりや鴨を御馳走に持って帰ったが、時には雀の卵より他には取つて来ないこともあつて、そんな時には自分の分だけそれでオムレツを拵らえて呉れと言つた。家じゆうに他には誰もそんなものを食う者がなかつたからだ。その中二階には又、彼と同国人で、二人の娘の方を受持つている女の家庭教師も住んでいた。当の主人はといえ、食卓につく時いつもフロックコートで出て来たが、それは少々著古きふるされてはいたけれど、さっぱりと手入ていれがしてあつて、肱などもきちんとしており、補布つぎなどはどこにもあたつていなかった。ところが、善良な主婦が亡くなって、鍵の一部と共にこまごました心遣いがプリューシキンの肩にかかつて来た。彼は妙に落着きがなくなり、大抵の男鰥おとこやもめがそうであるように、だんだん疑い深くなり、吝嗇けちくさくさなつて行つた。どうも姉娘のアレクサンドラ・ステパーノヴナには信用が置けない——この考えは成程まちがつていなかった。というのは、間もなくアレクサンドラ・ステパーノヴナが、一体ど

この連隊に属しているとも分りもしない或る騎兵の二等大尉と驅落かけおちをして、父親が軍人という奴はみんな博奕ばくちうちで道楽者だという不思議な偏見から士官嫌いなことを知っていたので、大急ぎで何処か田舎の教会で結婚式を済ましてしまったからだ。父親は娘の前途のろを呪のろつただけで、行方ゆくえを搜索しようともしなかつた。家の中はいよいよ落莫らくぼくたるものになった。主人の吝嗇りんしやくはますます露骨になつてきた。吝嗇には好い相棒である白髪が彼の剛こわい髪かみの毛けに光り出して、それと共に吝嗇の度が一層くわわつた。家庭教師のフランスマ人は息子が官途につく時期に達したというのを口実に解雇された。女教師マダムの方はアレクサンドラ・ステパーノヴナの誘拐を幫助した疑いで追放された。息子は、父の意見で最も健全な勤め口だという裁判事務を見習うために県の首都まちへ送られたが、裁判所へは行かずに父の意見ごいに叛そむいて軍隊へ入つてしまい、勝手に父の許もとへ軍服を買う金を請求してよこした。それに対して彼が父親から、いわゆる『\*1馬鹿握り』というやつを受取つたことは言うまでもない。最後に父親と共に家に残つていた妹娘が死んだため、いよいよこの老人は莫大な自分の財産の番人として、管理者として、所有主として、一人ぼちになつてしまった。孤独な生活はいやが上にも彼を吝嗇にした。周知のとおり、吝嗇というやつは狼のように貪欲なもので、がつがつと貪れば貪るほどいよいよ貪婪どんらんになるのである。彼の心には、

さなきだに人間らしい感情が乏しかったのに、それが刻一刻と薄れて、見る影もない廃残の身からは日毎ひごとに何ものかが喪うしなわれて行つた。時も時とて、わざわざ軍人というものに対する父の考えを確実にしようとするように、彼の倅はすっかり賭博に身を持ち崩してしまつたのである。彼は心底から倅に対して父親の呪いを送り、その後は倅がこの世に生きていようがいまいが、一切そんなことはもう氣にかけまいと思つた。年毎としごとに彼の家の窓は次ぎ次ぎと閉ざされて行つて、とうとうしまいには開いているのはたつた二つきりになつてしまひ、その一つには、読者もすでに御存知のとおり、紙が貼りつけてある始末だ。家事の大切な方面が年と共にだんだんお留守になつて行き、その代りに、けちけちした彼の眼差まなざしは紙片かみきれだの鳥の羽毛はねだのといったものに向けられて、そんなものばかり自分の部屋に寄せあつめているのである。彼はまた自分のところへ生産物を買ひに来る仲買人に對しても、いよいよ頑固一点張りになつた。仲買人どもはいろいろ掛引を試みるが、とうとう愛想をつかして、こりやあ人間じやない、悪魔だと言つて、さつぱり寄りつかないようになつた。乾草も穀類も腐つてしまひ、穀堆こくづかや禾堆いなむらはキャベツでも作るのに持つてこいの、申し分のない堆肥に變つてしまつた。穴倉にしまつてある麦粉は、まるで石のように塊まつて、斧で割らなければならぬ程になり、羅紗や麻布やいろんな手織布は、

手を触れるのも怖ろしいくらいで埃と見わけがつかなかった。彼は自分の家には何がどれほどあるのやら、もうすっかり忘れてしまつて、ただ憶えているのは、戸棚のどこかに、何かの浸酒の残りを入れた壺があつて、それをこつそり誰かが盗んで飲まないように自分でちゃんと記号しるしをつけておいたのと、それから鷲ペンや封蝋ふうろうがどこにあるという位のことである。ところが、収穫の方は前々まえまえどおりにとどしどし集まつて来た。百姓は昔どおり免オプロク役税プロクを持つて来なければならず、女たちもそれぞれ元どおりに胡桃を年貢に納めなければならなかった。また機織はたおり女は、やはり以前と同じ機はたかす数の麻布を織らなければならなかった。こうして集まつて来たものは皆、倉庫に山と積まれたまま腐つて廃物となつてしまつたが、しまいには彼自身までが、一種の人間の廢物くずになつてしまつたのだ。アレクサンドラ・ステパーノヴナはいつか二度ばかり小さい男の子を連れて、何か少しでも貰えまいかと思つてやつて来た。どうやら、例の騎兵大尉との放浪生活が、結婚まえにそう思つたほどうまくは行かなかつたらしい。プリューシキンは、しかし彼女を赦して、いたいけな孫にテーブルの上に載つかつていた釦ボタンかなんかを持たせて遊ばせたくらいだったが、金子かねは一文もやらなかつた。二度目に来た時、アレクサンドラ・ステパーノヴナは子供も二人づれで、父への土産にお茶うけの丸麵クリーチと新しい部屋着を持つて来た。というのは、お

父さんの部屋着はみつともないどころか、恥かしくて見ていられないほどひどいものだったからだ。プリューシキンは二人の孫を可愛がり、自分の右と左の膝に二人を乗せて、お馬ハイドウドウといつて揺ぶつてやった。丸麴クリーチと部屋着は有難く頂戴したが、娘には絶対になんにもやらなかった。アレクサンドラ・ステパーノヴナはそのまま空しく帰つて行つた。

さて、チチコフの面前めんぜんに立っているのは、こういう類いの地主だった！ どうもこんな現象はロシアでは甚だ稀なことといわねばならぬ。ロシア人はだいたい誰も彼もが、縮こまって小さくなっているよりは寧ろどしどし発展することを好む。それに、例のロシア式の無茶と奢りで精いっぱい放蕩ほうとうをやり、一生を浮いた浮いたで暮らしているような地主がそこいらにごろごろしているのだから、なおさら不思議だ。そういう連中の住居すまいを見ると、初めてやって来た者は吃驚びつくりして立ちどまり、見る影もない地主たちの間へ一体どんな御領主の公爵様が不意に姿を現わしたのだろうとおつ魂消たまげてしまう。上には数知れぬ煙突や望楼や風見が聳そびえ、ぐるりには傍屋ほうおくだの来客用に建てたいろんな家屋だのの夥しく並んでいる白い石造の邸宅は、まるで宮殿のように見える。何一つ欠けているものがあるだろうか？ 芝居もあれば、舞踏会もあり、篝火かがりびや油燈ランプで照らされた庭園は、耳を聳

するような楽の音とともに夜もすがら輝きわたっている。県下の大半の人間が衣裳を著飾きつて楽しげに木蔭を逍遙しょうようしているが、煌々こうこうたるこの照明の中では誰にも何ら不思議なものとも怖ろしいものとも思われない。とはいえ、人工の光線に照らされた木枝は本来の鮮やかな緑の色を失つて樹々の茂みのなかから芝居がかりにニユツと顔を出し、上の方ほど暗く、いかつくなつて、この夜の空にいつもより二十倍も怖ろしい姿を浮き出させており、また永遠の闇にとざされた気難しい樹々の梢は、はるか空中で葉をふるわせながら、自分の根本を明々と照らす安っぽい光りに向つて憤慨をもらしているのだ。

もう数分のあいだプリューシキンは一言も物をいわずに突つ立っていたが、チチコフの方も主人の風体ふうていと部屋の中の有様とにすっかり心を奪われてしまつて、容易に口を開くことが出来なかつた。長いこと彼は、自分の訪問した理由をどう説明したものか、適當な言葉が思いつけなかつたのだ。初め彼は、あなたの徳行とっこうと類い稀れな御人格については予々かねがねお噂をうかがっていたから、ぜひ一度お目にかかつて親しく敬意を表したいと考えて参上した、というようなことを言おうと思つたのであるが、どうもそれではあんまりだという気がした。彼はもう一度、部屋の中のがらくたをチラと流眇ながしめで見たが、ふとその時、徳行 だの 類い稀れなる人格 だのという言葉は止して、その代りに 経済 と

秩序 という言葉を持つてくれば、上乗だと気がついた。そこで咄嗟に文句をかえて、あなたの経済にかけての御手腕と、稀らしく秩序のととのった御領分については予々お噂を承わつていたから、ぜひお近附をねがつて御挨拶がいたしたく、罷り越した次第ですとやつた。無論、これより他にもつとよい口実がない筈はなかったが、その時はどうしてもこれ以外の名案が浮かばなかったのだ。

それに対してプリューシキンは、何かもぐもぐ唇を動かして呟やいた——というのは齒がなかったからだ——が、いったい何を言ったのか、はつきりは分らないが、多分その意味はこんなようなことだったろう。『手前の挨拶なんぞ、糞くらえだ！』が、我が国には客を好遇する道が広くゆきわたつていて、その法則はどんな吝嗇漢でも無視することが出来なかつたので、すぐに彼はややはつきりした言葉で、『さあ、どうかまあ、お掛け下さい！』と言ひ足した。

「わしはもうだいぶ前から、お客さんに来て貰つたことはありませんのでな。」と彼は言葉をついだ。「それに、正直なところ、あんまり得になることでもごわせんしね。お互いに往つたり来たりするなんて、ありや碌な習慣じゃごわせんわい、家事は疎かになるし……それに、お客の馬にだつて乾草はやらにやなりませんしね！ ところで、わしはも

う疾とつくに食め事をすましただがね。なんしろ家うちの台所ときちやあ、天井が低くて、汚ならしくて、おまけに煙突がすっかり壊れておる始末でな、火でも焚たこうものなら、さっそく火事騒ぎですからね。」

成程なあ！ とチチコフは心に思った。——これじゃあ、ソバケーヴィツチのところ  
で凝乳饅頭や羊の肋肉をしこたま詰めこんで来て、よかつたわい。

「それにお恥かしい話じやが、屋敷じゆう探しても乾草一束ない始末でな！」プリューシ  
キンはまた言葉をつづけた。「第一、そんなものをどうして貯たばっておけますかい？ 地所  
は狭いし、百姓は怠け者で、働くことを嫌って居酒屋へ行くことばかり考えてけつかる  
……これじゃあ悪くすると、今にこの年齢としで物乞いをして歩かなきゃならないかも知れま  
せんわい！」

「ですが、私の伺ったところでは、」とチチコフが、控え目に聞き咎めて言った。「お宅  
には千人以上も農奴がおありだというじやありませんか。」

「誰がそんなことを言いましたね？ お前さま、そんなことを言った奴の顔に唾ひでも吐つ  
かけてやりなさればよかつたのに！ そいつは屹度そんなことを言つて、あんたを擲から掬かお  
うと思つたのですよ。農奴が千人もあるなんて、飛んでもない話じや、ひとつ勘定をして

貰いたいものさね、なんの、そんなにあつて堪りますかい！ この三年ばかりというもの、忌々しい熱病がはやりおつてな、わしがここでは農奴をどえらく殺やられてしまいましたわい。」

「へえ！ それで、余程たくさん死んだのですか？」とチチコフは同情をこめて叫んだ。

「左様、ずいぶんえらく奪とられましただ。」

「いったい、どのくらい死んだのですか？」

「八十人ばかりも殺やられましたで。」

「まさか？」

「なにも嘘なぞ言やしませんわい。」

「では、もう一つお訊ねしますが、その今おつしやった人数は、この前に人口調査があつた時以来のお話なんでしょう！」

「そうなら、まだしもですがね、」とプリューシキンが答えた。「この前の調査以来だと、ざつと百二十人からになりますわい。」

「へえ、ほんとですか？ かつきり百二十人も？」思わずこう叫んだままチチコフは、驚きのあまりぽかんと口をあけた。

「お前さま、この年寄のわしが嘘なぞつきますか、もう七十にもなるのに！」とプリューシキンが言った。どうやら彼は、殆んど嬉しそうな相手の叫び声に少し気を悪くしたらしい。チチコフも、他人の不幸に対してこんな同情のない態度を見せるのはまったく不謹慎だと気がついたので、さっそく溜息をついて、まことに御愁傷の至りだと言った。

「そんなお悔みなんぞ言つて貰つても、一文にもなりませんわい。」とプリューシキンが言った。「この近所にも大尉が一人おりましたな、どこの馬の骨とも分らない癖に、わしの親類じやなどと名乗つて、伯父さん、伯父さん！と言つてからに、悔みを言いだしたが最後、急いで耳を塞がずにやおられないような大声を立てますのさ。もう面つらからして真赧まつかでな、おおかた強い酒を浴びるほど喰らつてけつかるのでがしようよ。きつと軍隊にいた頃、湯水のように金を使つてしまつたか、でなきや、芝居の女役者にでもすすつからかに剥むかれてしまつたのがさあね、それで今頃になつて、わしがとこへやつて来ては、お悔みなんぞこきやあがるんで！」

チチコフは、自分の同情は決して大尉のお悔みなどと同じものではない、自分はそんな口先だけではなく、行為によつてそれを証拠だてるつもりだと、大おお童わらわになつて説明すると共に、もはやごてくさ言つている場合ではないと思つて単刀直入に、自分はそういう

災厄のために死んだ農奴全部に対する納税の義務をこの身に引受けたのだと、その場で言明した。この申し出は少なからずプリューシキンに驚かせたらしい。彼は眼を皿のようにして、<sup>しば</sup>久らく相手の顔をまじまじと見つめていたが、ようやく最後に、『それじゃあお前さまは、軍隊にお勤めになった方じゃごわせんのかい?』と訊ねた。

「いいえ。」とチチコフは、かなり狡く、こう答えたものだ。「勤めは文官の方でして。」「文官にね?」と、プリューシキンは鸚鵡がえしに繰り返して、それから、何か食べるよきな具合に、もぐもぐ唇を動かした。「じゃが、どうして又そんなことをなさるんで? みすみすあなたの損じゃごわせんか?」

「あなたの御満足のためなら、損失などは何でもありませんよ。」

「それはそれは! お前さまはまったく御親切なお方じゃ!」プリューシキンは喜びのあまり、鼻の孔から嗅煙草の滓<sup>かす</sup>が、まるで濃い珈琲の雫<sup>しず</sup>くみたいに甚だ不体裁に、によりりと覗いたことも、また部屋着の前がはだけで、ちよつと見るのも憚られるような下着が顔を出したことも気がつかずに、喚きたてた。「ほんとにお前さまはこの老人<sup>としより</sup>を慰めて下さるのじゃ? ああ、有難や有難や! あんたはわしの救いの神様じゃ!……」それ以上プリューシキンはつづけて言うことが出来なかつた。しかし、ほんの一分か二分も経たな

い中に、さつき彼の 仏頂面ぶつちようづらに忽然こつぜんとして現われた歓喜の色が、同じように忽ち跡形たちまもなく消え失せて、再びその顔には気懸りらしい表情が浮かんだ。彼は手巾で顔を拭きなごしたが、今度はその手巾を小さく丸めて、それで上唇をこすったりしただした。

「何ですかね、甚だ無駄ぶしつけなことを申して、お腹立ちになっちゃ困りますが、その税金は毎年納めておくんなさるのでがしようねえ、そしてその金は、こちらへ廻して下さるだけ、それとも直接じかに国庫おかみへ納めておくんなさるだけかね？」

「じゃあ、こういうことにしましょう。つまり、その農奴は現に生きているものとして、それをあなたが私に売って下さった形にして売買登記の手続きをします。」

「なるほど、売買登記をね……。」そう言ったまま、プリューシキンはじつと考えこんで、またしても唇をもぐもぐやり出した。「じゃが、登記をするとなると、だいぶの費用ものいりでがしてな。なにせ役所の書記といえば至って厚かましい野郎ばかりでな！ 以前は、銅貨で五十カペーカに、麦粉の一袋もやればまあよかつたものだが、当節じゃあ、搗麦を荷馬車にまるまる一台と、おまけに赤紙幣あかざつの一枚もつけてやらなくちゃなりません、——まったく、欲張りつたらない！ わしはどうしてあれに眼をつける者がいないのか、不思議でなりませんわい。ほんとに、ああいう手合いには物の道理を言って聞かせてやった方がえ

えのじや！ 言葉ちゆうものは誰にだつてこたえるものじや。誰が何といおうが、道理に叛くことは出来ませんからな。」

どうだか、そういうお前こそ叛くだらう！ とチチコフは心に思ったが、すぐに、自分は謹んでその登記の費用も一切こちらで負担するつもりだと言った。

プリューシキンは登記の費用まで相手が持つと聞くと、このお客はよつほどの馬鹿に違いない、そして役所勤めをしていたなどというのもいい加減の出鱈目で、以前もとはきつと軍人で女優にでも現うつつをぬかしていたのだからときめてしまった。が、それにも拘らず、彼は自分の喜びを隠すことが出来ずに、チチコフに対してばかりか、そんなものがあるかないか聞きもしないで、彼の子供に対してまで、ありとあらゆる祝福の辞を述べたものだ。それから窓際に立ち寄ると、指で窓ガラスをガタガタたいて、『おーい、プローシカ！』と呼んだ。間もなく誰か慌あわただしく玄関へ駆けこんだ気配がして、そこで何か久しばらくごそごそやっているようだったが、やがて長靴の音がどたばたと近づいて来ると、扉がぁいて、プローシカが入つて来た。十三四の男の子で、歩きたんびに今にも足が抜けてしまいそうな、おそろしく大きな長靴をはいていた。プローシカがどうしてこんな大きな長靴をはいていたかということは直ぐに分る。つまり、プリューシキンの家では召使が何人いようが、

みんなに對して長靴が一足しか宛がわれないで、それをいつも玄關に置いておくことになつていた。大抵、誰でも主人の居間へ呼ばれると、庭はずつと裸足で飛んで来るが、玄關へ入るなり、その長靴をつつかけて、それから主人の部屋へ顔を出すのであつた。主人の部屋を出ると、彼はまた長靴を玄關で脱ぎすてて再び赤裸足あかはだしで歸つて行くのである。秋もさなかの、殊に薄霜のおりた朝などに、誰かが窓から覗いてみたら、召使という召使が、どんな達者な舞踏家だつて、舞台の上でもやらないような恐ろしい勢いで跳ねまわつてゐるのが眼につくことだろう。

「ほうら、見てやつて下され、このまあ、馬鹿面を！」とプリューシキンはプローシカの顔を指しながら、チチコフに向つて言つた。「から木偶でくの坊のくせにな、ちよつとでも何か置いとくと、すぐに盗りとくさるのでがすよ！こりや、阿房あほう、貴様は何しに來たのじやい？ さあ言つてみる、何の用だか？」ここで彼は暫らく口を噤んだが、それに対してプローシカの方も黙りこくつていた。「サモワールを支度するのじや、分つたか？ それから、この鍵を持つていつてマヴラに渡すのじや、彼女あれに倉へ行つて來いつてな。倉の棚に、いつかアレクサンドラ・ステパーノヴナが土産にもつて來た丸麵麴の固くなつたのがあるでな、あれをお茶受けに持つてこさせるのじやよ！……こりや待て、どこへ行くのじや？

阿房め！　しょうのない阿房じゃ！……足もとに火でもついたように、何をそう周章あわてくさるのじゃ？……話をよく聴いていけ。その麵麩パンはな、おおかた上つつらは腐つとるじやろうからナイフで削り落すのじゃよ。じゃが、その屑はうっちゃってしまわないで、鶏と舎りへ持つて行くのだぞ。それから、ええか、貴様は倉へ入っちゃやならないぞ。入りでもして見ろ、ええか？　白樺の筥で思いきり堪能させてくれるから！　ちようど今貴様はガツガツしておるから、筥でも喰らつたらさぞよかろうに！　まあ、入るなら入つてみる、ちやんとおれは、この窓から見張つておるから。まったく、あいつらには何一つ油断がありませんからな。」と彼は、プローシカが長靴を曳きずつて出ていってから、チチコフに向つて言った。その後で彼は、チチコフにまで胡散くさそうな目を向けはじめた。どうも、相手のそんな篋べらぼう棒な太つ腹が本当らしく思われなくなつたので、彼は肚の中で　こりや何とも分つたもんじやないぞ。ひよつとするとこの男は、あの道楽者どもと同んなじに、口先だけで駄法螺をふいとるのかも知れないぞ。無駄話をしたり、お茶の一杯もよばれようと思つて、いい加減な出鱈目をしゃべりまくつた挙句に、ハイ左様ならとくるんじやないかな？　と思つた。それで彼は、警戒かたがた、ちよつと相手の心を試してみようと思つて、売買登記はなるべく早く済ましたいものだ、人間というものは一向あてにならない

もので、今日あつて、明日の命も分らないのだからと言つた。

チチコフは今すぐに手続をしてもいいと答え、ともかくその農奴の全体の名簿が欲しいと言つた。

それでプリューシキンはすっかり安心した。彼は何か思案をしているようだったが、やがて鍵を持って戸棚へ近よると、戸をあけて長いことコップや茶碗のあいだを掻きまわしていたが、しまいにこんなことを呟やいた。『どうも見つかりませんがね、どいつか、あれを飲んでしまいさえしなきや、たしか素晴らしいリキュールがあつた筈じゃが、なにせ、そろいもそろつて泥坊ばかりじゃでな！ おや、成程、これじゃなかつたかな？』チチコフを見ると、相手の手には埃で袋でもかぶせたようになった一本の玻璃壺ガラスが握られていた。『これは、死んだ家内が拵らえたもんでな、』とプリューシキンは言葉をついで、『女中頭の阿魔あまめが、すっかり投げやりにして、栓もしないでおきくさつたのですがすよ、畜生め！ 黄金虫だの、いろんなものが中へ落ちていましたかね、そういうごみはわしがとっておきましたでな、今は綺麗なもんでがす。あんたに一杯つぎますわい。』

だがチチコフは、もう飲んだり食つたりした後だからと言って、極力そのリキュールは御免を蒙つた。

「酒も食事ももうお済みになった！」とプリューシキンが言った。「成程なあ、やつぱり育ちのいい方というものは、すぐに分りますわい。いつでもお腹がいっぱいだと仰っしゃって、何にも召上がりませんで。ところが、やくぎなそこいらのコソ泥どもときた日には、いやはや幾ら食わせても食わせてもな……。あの大尉がそうなんで、ここへやってきちゃあ、『伯父さん、何か食べさせて下さいよ！』と、こうでせ。わしがあいつの伯父なら、あいつはわしの祖父だともいいますか。きつと自分の家には何も食うものがないものだから、それでああほつつきまわっておるのですがすよ！ そうそう、あなたは、あの亡者どもの名簿が御入用なんでがしたな？ おやすい御用で！ わしはな、今度の人口調査に戸籍から削除してもらおうと思つて、ちゃんと別の紙に一人のこらず書きつけておきましたわい。」プリューシキンは眼鏡をかけると、書附を引つ搔きまわしはじめた。そして、いろいろな書類の束を解くたんびに、お客に恐ろしい埃の馳走をふるまったため、チチコフは頻りに嚏みをしたものだ。そのうちにようやく、隙間もなく何か書き埋めた一枚の紙が取り出された。それには百姓たちの名前が、まるで蟻子でも集つたようにぎつしり書きこんであつた。いろいろな名前がある。パラモノフだの、ピーメノフだの、パンテレーモノフだの、中にはグリゴリー・\*2ドエズジャイ・ニエドエジョーシなどという変つ

た名前まで飛び出して来るのだ。みんなで百二十幾人あった。チチコフはその夥しい数を見て、思わず北叟ほくそえ笑んだ。彼はそれをポケットへしまおうと、プリューシキンに向って、登記の手続をするため、いちど市まちまで御足労を願わなければならん、と言った。

「えつ、市まちまで？ 飛んでもない！……家をあけるのは困りますわい。なにせ、わしのこの奴らは盗ぬす人か悪者ばかりでがしてな、一日で洗いざらい盗み出して、外套を懸ける釘まで抜いて行つちまいますからね。」

「じゃあ、どなたかお知合いはありませんか？」

「知合いなんぞありますか？ 知合いはみんな死んじまつたり、仲なかたが違いをしちまいますしてな……あ、そうそう！ なあに、ないことはごわせんよ！ ある、ある！」と彼は叫んだ。「あの裁判所長がわしの知合いでがしてな、昔はよくここへもやって来たものじゃて。よく知っておりますわい！ お互いに同どう窓そうの友でな、一緒によく垣根へなんぞ這いあがったものじゃて！ なんて知らんことがごわしよう！ 旧ふるい知合いでがすよ！……じゃあ、あの男へ手紙でも書きますかな？」

「そりゃあ結構ですよ、あの方なら！」

「ようがすとも、ありや旧友でごわしてな！ 学校時代にもいい相棒でしたわい。」

するとその木偶でくのような顔に、不意に一種の暖かい光りが閃めいて、感情とは言えないまでも、仄かな感情の残影とでもいうようなものが現われた。それはあたかも水に溺れた人がひよつこり思いがけなく水面へ顔を出したのと同じで、岸に寄り集まった群集は期せずして歓呼の声をあげ、喜び勇んだ兄弟姉妹は岸から縄を投げてやって、もう一度背中なり、腕もがき疲れた腕かいななりが見えて来ないかと待ち侘びるけれど、その甲斐もなく、さつき顔を見せたのが最後のおさらばだったのだ。その後では万象ばんしょう寂せきとして声なく、ひっそり静まりかえって呼べども答えぬ水面は、ひとときわ怖ろしく、ひとときわ荒こうり寥りょうたるものになつてしまふ。プリューシキンの顔もそれと同じく、一瞬、感情の影がチラと掠めすぎた後では、いつそう無表情な、いつそう下卑たものになつた。

「机の上に新らしい四つ切ぎりの紙が一枚あつたはずじゃが、」と彼は言った。「はあて、何処へ紛れこんでしまったかな。なにせ、うちの奴らはみんな手癖が悪いだから？」そこで彼はテーブルの上や下をあちこち覗いてみたり、方々をひつかきまわした挙句、『マヴラ、これマヴラ!』と喚きたてた。呼び声にに応じて、手に皿を持った女が姿を現わしたが、その皿には、読者も先刻御承知の固麵麩かたパンが載つていた。そこでこの二人の間に次ぎのような言葉のやりとりが持ちあがつた。

「この泥坊女め、貴様あの紙をどこへやった？」

「旦那さま、本当にわたしや、旦那さまがコップの蓋になすった小さな紙片かみきれよりほかに、何も見たこともありませんよ。」

「いんにや、貴様の顔を見れば、ちやあんとお主ぬしが盗んだことが分るわい。」

「あれ、なんでハア、わたしがそんなものを盗とりますかね？ そんなものは、わたしにや何の役にも立ちませんよ、別に読み書きが出来るわけでもなしね。」

「嘘をつけ、お主はあれを寺てら男おとこに持って行ってやったのじゃ。あいつは文字をどうやらぬたくりおるからな、それであいつのところへ持って行ったのじゃろ。」

「ふん、寺男は紙ぐれえ欲しけりや自分で買いますだよ。あの人がお前さまの紙片なんぞ知るもんですか！」

「ようし待つておれ、今にその罰で閻魔の庁へ行つてから鉄てつの刺さす又またにさされて、じりじりと鬼ひあぶに火焙りにされるからな！ 見ておれ、じりじりと火焙りにされるのじゃぞ！」

「だつて、そんな紙なぞ手でさわったこともねえだのに、なんで火焙りにされる訳がありますかね？ なんぞ他の、女の弱みで責められるなら、仕様もねえだが、わたしやまだ盗みをしたちゆうて責められる覚えはありませんよ。」

「なあに、ちゃんと鬼が火焙りにするわさ！　こりや泥坊女、貴様は主人を瞞したから、こうされるのだぞ！　そういつてな、鬼どもがお主を真赤な刺叉で火焙りにするわさ！」

「そんなら、わたしやこう言つてやりますだよ。　そんな覚えはねえだ！　金輪際そんな覚えはねえだ。わしは何にも盗んだことあねえ……　つてね。おや、紙はあのテーブルの上にあるでねえかね。いつでも旦那さまはこうして無実の罪でわたしを責めなさるだよ！」

成程そこに四つ切の紙があるのを見つけると、プリューシキンはちよつとたじろいで唇をもぐもぐやつていたが、『ふむ、なにをそうがみがみ言うのじやい？　この怒り虫め！　こちらが一言いうと、十言も口答えをしやがつて！　さあ行つて、手紙に封をするだから火でも持つて来い。待て待て！　お主はまた脂蠟燭でも持つて来るつもりじやろうが、脂は溶け易くて、すぐ燃えて無くなってしまふから損じや。だから附木つけぎを持つて来な！』と言つた。

マヴラが出て行くと、プリューシキンは安楽椅子に腰をおろしてペンを取つたが、それから長いこと札の四つ切紙をあちこちひねくりまわしながら、何とかしてそれを八つ切にする工風くふうはないかと骨折つてみた。が、結局それも駄目と諦めがつくと、黴かびが生えてどろどろになつた液の底に蠅が無数に沈んでいるインキ壺へペンを突つこんで、まるで楽符の

お玉杓子たまじやくしそつくりの文字をならべながら手紙を書きにかかった。彼は、絶えずブルブル震えて紙面全体を跳ねまわりたがる手を制して、いかにも吝けちくさく行ぎようと行とをくつつけるように書いて行つたが、そうすると今度は余白がたくさん残るので、それも気が気ではないのだ。

まったく人間というものが、これほど下劣ひせんしゆうあくで卑賤ひせんしゆうあく醜悪ゆうあくなものに墮落することが出来るのだろうか？ これほど変るものだろうか？ これが果して真相に近いことだろうか？

ところが、すべてこれが真実まことの相すがたで、人間はどんなものにもなり得るのだ。いま熱情に燃えさかっている青年が、もし自分の老いさらばうた後の姿を見せつけられたなら、恐れ戦おののいて飛びすさることだろう。ものやわらかな青年時代を過ぎ、がさつで粗剛そごうな壮年に達しても、心して人間的な行いを保持してゆくように努め給え。途中で取り落してはいけない。後で取り返すことは決して出来ないから！ 未来に横たわる老齡はつれなく怖ろしいもので、何一つもとへ返してくれはしないのだ！ まだしも、これよりは墓場の方が慈悲ぶかい。墓の上にはここに人間が葬られているとでも書かれようけれど、老齡の冷酷無情な面影からは、何一つ読みとることも出来はしないのだ。

「ときに、あんたのお友達で、」と、プリューシキンは手紙をたたみながら訊ねた。「逐ち

電くでんした農奴が欲しいって人はごわせんかな？」

「お宅には逐電した奴もおありなんですか？」と、チチコフはハツと我れに返って、急いで訊き返した。

「ごわすとも、大ありでな。婿が搜索してくれましたが、さっぱり行方が分らないそうもつとでな。尤も彼奴は軍人だから、ガチャガチャ拍車を鳴らして踊ることは名人じゃが、法律上のことであちこちする段になると……。」

「で、そんな農奴がどのくらいおありなんですか？」

「左様さ、これも七十人ぐらいにはなりませんあね。」

「まさか、そんなに？」

「いや、まったくの話ですがよ！ なにせ、わしがとこじや毎年、逃げますのでな。どいつもこいつも恐ろしい喰らい抜けばかりでな、のらくらして大喰らいばかりしてけつかるだ。で、わしの食うものが第一ごわせんような始末で……。逐電した奴なんざ、幾らでもかまいませんよ。ひとつお友達にそういつて勧めて下され。せめて十人も見つけ出しゃあ、ええ金になりまさあね。調査簿に載つとる農奴なら、一人あたり五百ルーブリが相場ですからな。」

なんの、そんなことを友達なんぞに匂わせもするもんか。とチチコフは心の中で呟やいたが、口へ出しては、そんな友達はずつといそうもないし、第一その手続だけでも大變で、着物の裾がすりきれるほど役所へお百度を踏んでも、結局費用だおれになってしまふから、手を引くに限ると説き聴かせて、しかし本当にそれほどお困りのようなら、お気の毒だから、自分が引受けてもよい……が、値段のところは、全くお話にもならない安いものだと言った。

「で、幾ら出して下さるだね？」そうプリューシキンは訊いた。が、彼の顔は忽ちユダヤ人みたいな浅ましい相好になって、両手が水銀のようにブルブル震えていた。

「さあ、一人あたり二十五カペーカだしましょう。」

「それで、どうして払って下さるだね？　正しょうきん金でかな？」

「ええ、この場で現金で払いますよ。」

「ですがね、お前さま、わしの貧乏世帯に免じてせめて四十カペーカに買って貰えませんかね。」

「御主人！」とチチコフが言った。「なんの四十カペーカどころか、私は五百ルーブリずつでも出したいところです！　ほんとに私は喜んでそれだけ払いますよ。だって、あなた

のような尊敬すべき善良な御老人が、正しいお心ゆえに苦しんでいらつしやるのを眼まのあたり見るのですものね。」

「いや、まったく、そのとおりがすよ！ 金輪際、ほんとのことのがす！」とプリューシキンは、頭こうべをたれて無性にそれを振りたてながら、言った。「何もかも、みんな馬鹿正直のお蔭でがすわい。」

「で、よござんすか、私にはあなたのお人柄ひとがらが一目で分つたのです。それなのに、どうして一人あたり五百ルーブリぐらい差上げないことがありましたよ。しかしながら……私にはそれだけの財力がないのです。だから、お愛想に五カペーカだけ奮発させて頂きましたよ、そうすると、農奴は一人あたり三十カペーカの勘定になりますねえ。」

「そりやまあ、なんでがすか、せめてもう二カペーカだけ気張きばっておくんなさいよ。」

「二カペーカですな、ようござんす、気張きばっておきましょう。で、一体どれだけあるんです？ たしか七十人と仰おほつしやいましたねえ？」

「いんにや、みんなよせると七十八人になりますわい。」

「七十八人、七十八人と、それが一人あたり三十二カペーカだから、こうつと……。」ここで我等の主人公は一秒ばかり考えた、たしかにそれ以上はかからなかったが、彼は俄にわ

にこう言った。「ええ、二十ルーブリと九十六カペーカになりますね！」彼はなかなか数  
理に長けていた。で、彼は早速プリューシキンに受取りを書かせて金を渡したが、それを  
両手で受けた老人は、絶えずこぼしはしないか、こぼしはしないかとビクビクしながら何  
か液体でも運ぶ時のように、恐ろしく用心深く書物卓デスクの方へ持つて行った。書物卓デスクのそば  
へ行くと、彼は仔細にもう一度その金をあらためてから、やはり非常に用心深く、それを  
抽斗ひきだしの一つへしまつた。てつきりその金は、カルプ師とポリカルプ師という、この村の  
二人の僧侶が彼を埋葬する時まで、そのまま抽斗の中に死蔵しぞうされて、さぞかしその時にな  
つたら、娘や婿や、また恐らくは、自から彼の親類と称している例の大尉などの筆紙ひっしにつ  
くし難いがたほどの喜びとなる運命だろう。金子を蔵しまうとプリューシキンは安楽椅子に腰をお  
ろしたが、どうやらもう何にも話の種がなくなつたらしい。

「なんですが、もうあんたはお帰りなんで？」彼はチチコフがちよつと身動きをしたの  
を見て、そう言ったが、その実じつこちらはポケットからハンカチを取り出そうとしただけで  
あつた。

そう言われるとチチコフも、成程この上こんなどころに一刻も愚図ぐずぐず々々していることは  
ないと気がついた。『ええ、もうお暇いとましなくちやなりません！』そう言つて彼は帽子を手

に取つた。

「が、お茶は如何で？」

「いや、お茶はまた、いつかこの次ぎの時にして頂きましよう。」

「どうしてね？　もうサモワールは言いつけましただよ。じゃが正直なところ、わしはあまりお茶は好きじゃごわせんわい。贅沢な飲みもので、それに砂糖が滅法高くなりましてな。プロシカ！　もうサモワールはいらないぞ！　それで麵麩はマヴラのとこへ返して来な、分つたな？　前のところへしまつとくだぞ。いんにや、そうでねえ、ここへよしな、おれが自分で持つて行くだから。それじゃあ、お前さま、御機嫌よろしゆう！　どうかまあ、お前さまに神さまのお恵みがありますように！　で、その手紙は裁判所長に渡ししておくなされ。そうじゃ！　あの男に見せて下され、あれはわしの旧い友達だでな。そうだとも！　同窓の友でがしたからな？」

それから、この不思議な化物ばけもののような皺しわくちやの老人は、お客を屋敷の外まで見送つたが、その後ですぐに門をしめるように言いつけた。その足で彼は、番人どもがめいめい持場もちばについているかどうかと、倉庫を見まわりに出かけたが、番人どもはちゃんと四隅よすみに立って、木の杓子しゃくしで鉄板がわりの小さい空樽あきだるを敲たたいていた。それから台所をちよつと

覗いて、召使たちが満足な物を食っているかどうかと調べるような顔をして、玉菜汁シチカーシヤと粥を鱈腹つめこみ、一同を誰彼なしに、手癖が悪いの、身持がよくないのと罵りちらしておいてから、自分の部屋へと戻った。一人になると彼は、きょうのお客の、全く底の知れない親切に對して、どんな謝礼をしたものかと考えてみたりした。一つあの男に懷中時計でもやるかな。と彼は肚の中で考えた。あれはなかなか立派な銀時計で、真鍮あかがや赤銅ねの品とはどだい物が違うわい。すこし破損いたんじやいるが、なあに、そりや自分で直すじやろうて。あの男はまだ若いから、花嫁の氣に入るために懷中時計ぐらいは欲しかろうさ。いや、それよりも、と彼は、少し考えてから附けたした。いつそあれは、死んだ後でおれの形見かたみとしてあの男にやるように遺言に書いておこうわい。

だが、我等の主人公はそんな時計などは貰わなくても、この上もない上乘の御機嫌だった。あんな思いもよらぬ収穫こそ、何よりの贈物であった。まったく何と云ったって、死んだ農奴ばかりか、おまけに逐電したやつまで合わせると、みんなで二百人を越すのだから堪らない！ 無論まだプリューシキンの村へ乗りこんだばかりの時から、何か旨いことにありつけそうな氣はしたが、こんな余録よろくがあるうとは夢にも思わなかつた。道すがらも彼はいつになく愉快そうで、口笛を吹いたり、拳を口にあてて喇叭らっぱを吹くような塩梅に唇

を鳴らしたり、はては何か唄までうたいだしたりしたが、その唄が実に変っていたので、セリファンもじつと耳を澄まして聴いていたが、その中うちにちよつと頭かぶりをふつて、『へつ、旦那は何をうたつてござることだか！』と眩くらやいた位だ。彼等が市へ近づいた頃には、もう濃い夕闇がせまっていた。影と光りがまつたく溶け合い、それに物の姿までが溶けこんでしまっているように思われた。だんだら模様ようばうの関門も変にぼやけた色を帯び、立番たちばんをしている兵隊の口髭が、眼よりずっと上の額の辺にくつついでいるようで、鼻はまるでなさそうに見えた。轍わだちの音が急に高くなり、車体がひどく跳りだしたので、いよいよ馬車ばしやが丸石の舗道へ乗りこんだことが分つた。街灯はまだ点ともされず、ただそここの家の窓に灯ほ影かげがさしはじめたばかりであつたが、横よこ町ちやうや袋小路ふくろこうじでは、兵隊や馭者おしやや労働者らうどんしやがわんさといて、赤いシヨールを掛けて素足すあしに短靴たんくつをはいた特殊な婦人がまるで蝙蝠ふぶのように辻つじ々つじを素早く走り廻まわっているような市まちではどこでもこの時刻にはつきものの、或る種の場面や会話が持ちあがっていた。チチコフはそんな手合いには眼もくれなかつた。そればかりか、郊外へ散歩に行つての帰りらしい、ステッキをついた多くの華奢な役人たちの姿にさえ、彼は見向きもしなかつた。ただ時おり彼の耳へ入るのは、どうやら女の声らしく『なに言つてんのさ、酔よっぱらいさん、失礼なことすると、承知しないよ！』とか、

『お放しつたら、馬鹿つ、警察へ突きだして、油をしぼってやるから！』などという叫び声であった。つまりそれは、夢みがちな二十歳前後の若者が芝居の帰り道に、スペインの街や夜や、額に捲毛まきげをたらしめてギターをかかえた素晴らしい女の姿などを胸に描きながら歩いている時、いきなり熱湯でもぶっかけるように、浴びせられる言葉なのだ。何かこういう若者の頭に浮かばない空想があるだろうか？ 彼は天国へも昇れば、シルレルのところへお客にも行く——ところがまるで霹靂へきれきのように、こうした致命的な言葉が突然、彼の頭上で鳴り渡ると共に、彼はやはり自分が地上にあつて、それも\*3センナヤの広場か、酒場の近くに佇んでいるのに気がつく、そして又もや味気ない日常生活が彼の面前にそそり立つのである。

ブリーチカ半蓋馬車はガタリと一つ最後に揺れると、まるで穴の中へでも入るように旅館の門へ吸いこまれて行つた。ペトウルーシカが出迎えたが、この男は、前がはだけるのを嫌つて片手でフロツクの裾を押えたまま、片手でチチコフを馬車から助けおろした。給仕もナプキンを肩にかけて、蠟燭を捧げながら駈けだして来た。ペトウルーシカは旦那の帰りを喜んでいるのかどうか——それはよく分らなかつたが、とにかくセリファンと胸めくほせをした時には、いつもの気難しい顔が、どうやら少しは晴れやかになつたように思われた。

「ずいぶんごゆつくりでございましたねえ。」と給仕は、階段に灯りを見せながら言った。  
 「ああ。」チチコフは階段へ足をかけながら答えた、「で、君の方はどうだね？」

「はい、お蔭さまで。」と給仕は、お辞儀をしながら答えた。「昨日、何でも中尉だと仰つしやる軍人の方がお着きになりました、十六番にお泊りでございます。」

「中尉だつて？」

「何だかよくは存じませんが、リヤザーニからおいになつたとかで、鹿毛の馬をつけたお馬車でございました。」

「うん、よしよし、まあこれからも、せいぜい宜しくやるさ！」そう言つてから、チチコフは自分の部屋へ入つた。控室を通りながら、彼は鼻をくんくんいわせたが、ペトウルシカに向つて『こら、せめて窓ぐらい明けといたらどうだ！』と小言をいった。

「時々あけといたでがすよ。」とペトウルシカは言つたが、それは嘘にきまつている。主人の方も嘘だとは知つていながら、別に何も言わなかつた。旅から帰つたばかりのこととて、彼はひどくがっかりしていた。ほんの仔豚の肉だけという極く軽い夕食を認したためると、さつそく彼は着物をぬぎすてて、夜具やぎの中へもぐりこむなり、ぐつすりはたらきと深い眠りにおちた。それは痔の気も知らねば、蚤の煩わしさも知らず、また大して頭の能力はたらきもない

といった、誠に仕合せしあわせな人々だけが享受する、あの実に素晴らしい眠りであった。

\*1 馬鹿握り 中指と食指の間へ母指の頭を出して握った拳で、これを相手の鼻先へ突き出して愚弄嘲笑の意味を表わす。ここでは愚弄と同時に拒絶を意味し、我が国の『赤んべえ』に相当するものと考えれば間違いない。

\*2 ドエズジャイ・ニエドエジョーシ 『行けども行けども涯はて知らず』という意味の、変な名前である。

\*3 センナヤ ロシアの大抵の市にある特殊な一角いっかく。本来は乾草市場であるが、多くは場末ばすえの盛り場になっている。

# 青空文庫情報

底本：「死せる魂 上」岩波文庫、岩波書店

1938（昭和13）年7月1日第1刷発行

1952（昭和27）年6月1日第9刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「茲→ここ」 不図→ふと 兎に角→とにかく 兎も角→ともかく 莫斯科→モスクワ 露  
西亜→ロシア 欧羅巴→ヨーロッパ 彼得堡→ペテルブルグ 伊太利→イタリア 仏蘭西  
↓フランス 希臘→ギリシア 巴里→パリ 洪牙利→ハンガリー 芬蘭→フィンランド  
留↓ループリ 哥↓カペーカ 桃花心木↓マホガニイ 釣燭台↓シャンデリア 卓子↓テ  
ーブル 襯衣↓シャツ 刷子↓ブラシ 切子硝子↓カットグラス 硝子↓ガラス ※「#  
濁点付き片仮名キ、1-7-83」↓ヴィ 互り↓わたり 互つて↓わたつて」

※「没」と「歿」の混在は、底本通りです。

※底本は巻末に訳註をまとめていますが、中見出しごとに「\*番号」で設定しました。

※訳註の頁数は省略しました。

入力：山本洋一

校正：高柳典子

2016年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 死せる魂

または チチコフの遍歴 第一部 第一分冊

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 MYORTVUIE DUSHI (МЕРТВЫЕ ДУШИ)

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>